The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	物語としての「家」…パーソナル・ヒストリーに見る日常世界の解釈
Author(s)	橋本, 満
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3075258
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

物語としての「家」

---パーソナル・ヒストリーに見る日常世界の解釈

橋本満

物語としての「家」

---パーソナル・ヒストリーに見る日常世界の解釈

序章 1

第一部　男たち

1．街の歴史---物語の始まり 39

2．継承される家 51

3．家の創設 62

第二部　女たち

4．男がみる女の世界---二代目の女性像 99

5．家を作る女 115

6．家を守る女 163

結語 246

文献 269

序章

1）物語としての事実

本論文に登場する六人は、京都の錦小路に古くからある商店街に住んでいる。同じ時代を生き、同じ町に住み、歴史的にも空間的にも狭い世界を共有して生きてきている。にもかかわらず、この六人の人たちが語る錦小路の世界は微妙に異なっている。この六人は三つの家に属しているが、その三つの家のあり方にいくらかの違いがあることから、この街に対する関わり方も異なってくるし、それぞれの家のの描き方も変わってくる。[1)]

三つの家が異なるということだけではない。六人それぞれが、各々の家の中において立場が違うということ、すなわち家族との関わり方の違いが、家という一つの世界に対しても異なるイメージをそれぞれが持っているように見える。人と人との関わりあい方が家に対する関わりあい方を微妙に変え、その違いがまた家よりもさらに大きな空間である街との関わりあい方を変えている。

共同体としての商店街は、個人や家族に比べればより広い世界である。日本全体から見れば、京都という町の中の一部分でしかない

[1)] パーソナル・ヒストリーを通して共同体を描くという方法ですぐれたモノグラフとしては、Blytheを参照。

が、この共同体に長い間住み慣れ、この世界の中にいわば閉じ込められたかのように生きてきた人たちにとっては、この街は日常生活の全体である。この全体は、この世界の中に住む人々にとっては自明の世界のようだが、彼らにしても直接に把握しきれる全体では決してない。人々はこの共同世界に対するイメージをそれぞれに形作り、形作ることを通してたがいに重なりあう全体を作ってきたのである。[1)]

人々がそれぞれに抱いている全体のイメージは、この六人が五十年、六十年とこの街に暮らす中で経験した出来事を自分のものとして解釈し、その出来事を生きてきた人生の積み重ねとして語る「物語」となっている。であるから、各々が全体、すなわちこの街あるいは家、に対して抱いているイメージは、そのまま自分自身のイメージでもある。日常の経験を通して積み重ねてきた自己と自分をとりまく全体に対して、それぞれが構成してきた世界である。街について語ること、家について語ること、これらの語りは自分についての物語となって、彼らそれぞれが抱く全体を表している。[2)]

[1)]シュッツ、あるいはバーガーの構成主義という立場をとることになるのだろうが、バーガーに典型的に表れているように、構成主義は全体のイメージを「近代社会」といういささかあいまいでしかも自明の存在を前提している。たとえば、Schutz and Luckmann、Bergerを参照。

[2)]ディスクールよりも物語を使う方が、全体を示しやすいと考える。ディスクールは広範な意味に使われることが多くて混乱を生じやすい。物語は、どれだけ小さくて短くとも、なんらかの全体を表すだろう。

この論文で使われる資料は、フィクションでないことは当然としても、素朴な意味で事実と言えるものでもない。そもそも、事実といって、そのまま目の前に現れる事実があるなどとは考えられない。誰かによって、何らかの状況の中で語られることで「事実」は提示されるものだからである。この論文に登場する事実は、すべてはこの六人の人々が語った物語の中でのみ「事実」である。語られる世界の中での「事実」である。しかも、わたしが彼らへインタヴューすることによって、彼らが描きだした事実なのである。

街の歴史を男たちが語るところからこの論文は始まる。この歴史も、歴史学が語る「事実」ではなく、この街が古くからの由緒ある商店街であるという人々の誇りを描くために「語られた歴史」なのである。[1)]

歴史学が描く歴史は、街の歴史を描くために利用される。この街には千年の過去にさかのぼれる歴史があり、その伝統が現在の街の始まりとされるところにこの物語の始まりがある。長い歴史をもつこの街の伝統は、現在の商店街に生きる人々についての物語の欠か

[1)] 歴史が１９世紀に歴史学になる前の、storyとhistoryとが分化していない頃の人物史の方法を復活させようとしているのかもしれない。だが、共同体（社会）の時間に根ざす歴史こそが、意味ある時空の「物語（歴史）」を作るはずである。Carr (18, 163sqq)を参照。

せない部分として、語られるのである。[1)]

明治期までのこの街の歴史は、歴史家たちが整理した「歴史的事実」に依存せざるを得ない。明治・大正期の歴史も、当時の古老たちの聞き書きとして記録されているものを、ある場合は「市史」として正統化された資料から、また実際に昔語りとして聞き伝えた「歴史」から、街の歴史は再構成される。[2)] だが、彼らの記憶に残されている歴史時間に入れば、歴史資料が正しいとする事実と、彼らが語る歴史とは別の世界の「物語」なのである。

時に彼らが語る歴史は、「歴史的事実」と食い違う。彼らが語る出来事と「歴史的事件」とのくい違いは随所に起りうる。あるいは、正確には記憶されていない。歴史年表と彼らの記憶とがあわないと言っても、それが虚偽というわけではない。かえって、歴史学によって正しいとされる事実の方が、人々の記憶する歴史の中では「街の歴史」としての説得力を持たない。彼らの体験と結び付けて記憶されている出来事の方が、つまり彼らの歴史世界に織り込まれた出来事こそが「事実」なのである。

街の歴史、家の歴史は、彼らのものとして語られるかぎりにおい

[1)]「新しい歴史学」も事実性について科学主義的なアプローチを前提とするところがある。「事実」という曖昧さは、歴史学方法論だけでなく、社会学の理論の世界でも問題にしうるであろう。歴史学については、CarrardがPoeticsという概念で「新しい歴史学」を批判的に検討している。

[2)] 第一章は、いわゆる歴史資料から再構成したこの街の歴史であるが、登場人物の語りの一部と位置づけている。

て「正しい歴史」である。年表との違いだけでなく、語る人によっても違いがある。だがこの論文では詮索しない。意味を持つのは現在の彼らの日常世界に位置づけられた「歴史」であって、彼らの意味世界から切り離された事実としての歴史の方がかえって「事実」ではない。

彼らは歴史を語っているようでいて、歴史的過去を語っているのではない。語っている現在の自分を描くために歴史を語っているのである。つまり、彼らの物語の中にある歴史こそが現在の彼らにとっては「事実」となる。彼らの話題は過去の出来事についてであっても、語りは常に現在にある。

インタヴューは、昭和五十六年から三年にわたって行われた。資料としては、わたしの行ったインタヴューはすでに古い。だが、もう一度インタヴューをすれば、彼らは違う物語を語るであろう。商店街そのものも変わったし、なによりも人々は齢を経て新たな経験を積み重ね、自己の描き方を変えたであろう。あらためてインタヴューをすれば、異なる「街の歴史」を、以前とは変わった自己でもって語るであろう。

インタヴューの時に彼らが語ってくれた物語は、当時の彼ら自身の世界を切りとるものとして語られたのである。資料としてのインタヴューはすでに古くなってはいても、語りそのものは古びていな

い。当時の彼らは、テキストとして今に生きているのである。インタヴューは、テキストとしての彼らの自己についての切りとり方であったし、その切りとり方は現在でも意味を持つ。テキストとしての物語は変わらず、むしろ、その物語を読むわたしの方が変わったことの方が大きいであろう。[1)]

インタヴューが一つのまとまりを持つように見えてきた時、わたしは小さな論文を書いておいた。インタヴュー全体をまとめる力は、当時のわたしにはなかった。一つ一つのエピソードや、家や商売のあり方についての彼らの語りは、異文化の出来事を聞くように興味深いものであった。同じように京都という町に暮らしながら、生活はまったくと言っていいほどに違っていた。近郊の住宅街で育ったわたしは、話しを聞きながら、異文化とも言える古い京都の下町の生活の中に迷い込んでしまったようであった。とりあえずまとめた小さな論文は、解釈をめぐる方法論的な問題に力点を置くようにして書いた。二人の女性だけを登場させて、家についての二人の語りの違いを描き、その語りを解釈する社会学者としてのわたしを位置づけようとした。解釈学的アプローチを社会的事実に適用する際の問題点を示そうと試みるだけであった。［橋本 1981；Hashimoto］

この小さな論文をまとめた後も、三つの家のうちの一つとだけ、

---

1)「開かれた作品」としてのテキスト、という考え方は、インタヴューの記録にもあてはめることができるであろう。エーコを参照。

この十年あまりの間、中断しながらも接触を保ってきた。「女が守る家」とである。正確には、この家の女主人とである。折に触れて話しを聞いてきた。かつてのインタヴューの確認のような作業であった。新しい知見はあまり得られず、接触は途絶えがちとなっていった。

大きな出来事が起こった。跡継ぎの長男の死であった。この家族にとっては、あまりにも悲しい出来事であった。この事件でわたしは調査を終わろうと決心した。物語の終わりである。

他の家でも、老主人が亡くなり、跡継ぎが新しい主人となり、世代が交代していった。時間は確実に経過し、家と街は次の世代へ継いでいかれるのだろうが、わたしに語られた物語は一つの区切りを迎えているように思われた。

この十年は、インタヴューに応じてくれた家族にとっても、またわたし自身にとっても、大きな変化であった。この論文を書くためにあらためてインタヴューの記録を読み返すと、話しをしてくれた人たちの姿があたかも昨日のことのように記憶によみがえってくる。と同時に、十年前には読み切れなかった話の道筋が、かれらの言葉の中から現れてくるという新たな発見をも経験することになった。

この新たな発見は、実はすでにテキストの中に仕込まれていたはずである。かつての小さな論文では、語られたエピソードを忠実に

再現するというよりも、わたし自身の言葉に織り込んで語り直そうとしていた。整理するのはあくまで社会学の世界に住む「わたし」であった。語り手たちのライフ・ヒストリーに従って、つまりもっとも自然に思える生育史という「自然史」の枠内に納めて、一貫性をできるだけ保とうとした。だが、「自然史」としてのライフ・ヒストリーは、語る人たちが自分の過去を振り返ることで再構成される「語り」であった。「自然史」をわたしが語ることによって、彼らの物語が人と家と、さらにこの街の発展の物語であるという「神話」を、再確認したにすぎなかった。だが、彼らの語りの中には、語ることによって「発展」は、すなわち現在への自己の生成は、あらためて作り直されてるということが込められていた。テキストには、すでにこの「語りの理論」が潜んでいたのである。

繰り返しになるが、方法論をしか目指せなかった小さな論文では、二人の女性が解釈する自己と家との世界をわたしが再び解釈し、彼女たちの世界とわたしが住む社会学の世界との橋渡しがどれだけ可能か、という理論的な試みに終始していた。「二重の解釈」という解釈学的方法の用語を使って、わたしの属する社会学の理論の世界の立場をいくらかでも明らかにしようと試みたにすぎなかった。彼らが何を語ったのか、という中心にすべき問題に足を踏み入れることはできなかった。つまり、わたしに見えていた世界は、「社会学

理論」の方法論的世界であった。

社会学理論の世界も、「発展」の論理を大前提のように受け入れている。この点が、彼らのライフ・ヒストリーの語りを、あたかも「人生の成功」の話として取り込める素地となっている。時代の変遷と、その変遷の中で状況に適応して家を栄えさせ、自己を変革し成長させていく人物像を、自己と社会の適応モデルとして描くことができる。彼らの世界解釈は、日常世界の「社会理論」として、「社会学理論」と共通の土壌を持っているのである。「この時に、こういうようにしたから儲かった」とか、「あの時、わたしはこうしたから、危機を乗り越えることができた」というエピソードは、事後説明という点で、社会学の理論に適合する物語ともなりうる。事後説明という両者に共通する枠組みは、時に、その物語の文脈が何であるかを忘れさせる。

さらに、成長と発展の物語は、近代社会を描くことを一つの大きな仕事としてきた社会学の基本テーマでもある。個人の成長と家の成長、共同体の成長、社会全体の成長、というテーマは、核家族化や近代化を基本とする社会変動論の基本的モチーフである。多くのパーソナル・ヒストリーは、ある場合は成功の物語であり、他の場

合には伝統として取り残された人々の記録である。[1)]

人生を振り返って話をするという人々の物語と、それをパーソナル・ヒストリーとして記録しようとする学問的態度との間には、実は共通する暗黙の前提があるとも言えるのである。この暗黙の前提とは、現在から半生をさかのぼるという観点と、近代社会がどのように発展してきたかを理論化しようとする観点とに共通する「理論」なのである。半生が語られるのは一定の成果を得た人々の物語としてであるし、現在の社会がどのようにして達成されたのかという結果を説明しようとするのが近代社会の物語である。両者をつなぐのは、個人の成長（社会化）が社会全体の変化（近代化）と同様の道筋をたどるという「神話」である。[2)]

方法論的な整理をするために、「社会学理論」と「社会理論」という言葉の次元での区別をして、社会学の枠内で発展をみてきた理論が、はたして現実のさまざまの出来事を日々解釈する人々の「理論」と同じ「物語」となりうるのか、を検討しようとした。「社会学理論」は、あたかも全体を社会学者が知っていて、個々の現象を

[1)] ライフ・コース研究は、近代社会における世代交代の「物語」である。たとえば、森岡・青井を参照。近代日本の中のライフ・ヒストリーとしては、中野(1977)がある。人類学的なライフ・ヒストリーの方法を、伝統と近代の枠組を乗り越えようと批判的に検討しているものとして、Crapanzanoが、理論的には、Watson and Watson-Frankeがある。

[2)] 構造機能主義は、社会化と近代化というテーマを部分と全体との機能的関係として描いた。たとえば、Parsons and Balesを参照。

説明しようとする。これに対し、人々の「社会理論」は、日常の世界の一つ一つの出来事に意味を見出し、この意味を通して全体を知ろうとする。人々は個別を語って、個別を通して全体を語る。「社会理論」が提示する全体は、個々の出来事が起こる度に人々が抱き直すイメージを通して、そのイメージが作られる度に差異を持つことによって、描き直されていく全体である。全体は人によって、また状況によって、微妙な差異をもつイメージとして示されながら、それらの少しずつ異なるイメージが集まることで一つの全体が形成されていく。

「社会学理論」は、たとえば近代について強固なイメージを提示するけれども、近代そのものが内包する個々の出来事の差異については語らない。せいぜい全体のなかの小さなヴァリエーションにすぎない。一般理論が、全体を語るようなレトリックを持っていて、一つの全体イメージを個々の出来事に押しつけることによって提示される「偏った全体」であり、一元的な全体なのである。社会学者は、あたかも全体を知っているようにして、部分について説明する。多様であることが近代の特質である、と言いながら、実は「近代」にあわない多様性を切り捨て、近代の許す「多様性」を確保する作業なのである。

十年という年月がたって聞き書きの「鮮度」が落ち、生々しい個

人の世界の語りがセピア色の古い写真のようにわたしの心に定着してしまった現在、あらためてインタヴューで語られた内容に主眼を置いて書き直そうとした。インタヴューで記録した言葉をそのままに書き止め、差異の重要性に注目したいと考えるようになった。つまり、かつての小論でもできるだけ彼らの言葉で描こうとしたのだが、切り捨てたものは非常に多かったのではないか、という反省をすると同時に、インタヴューでの生の言葉をそのまま論文に用いることがためらわれたのは、自分の属する世界からはみ出すのではないか、という怖れをも持っていたとも考え直したのである。自分にできる解釈とは何か、ということを強調しなければ、かつての小さな論文が書けなかったのである。

彼らの生の言葉を用いることで、読み手の関心が、語られた生の言葉の内容に引きつけられてしまうのではないか、と恐れていたと言ってもよい。わたしの方法論的関心が、彼らの言葉によって寸断されることを嫌ったのであろう。方法論というわたしの住む世界の知的満足を優先させようとしていたのである。

結果的には、わたしの描いた彼らの物語を、方法論的な序章と結論とでサンドイッチにするという姑息な描き方をとらざるをえなかった。今回のこの論文でも、やはり理論的なコメントで彼らの物語をはさむという同様の構成をとっている。だが、彼らの物語を彼らの

生の言葉でそのままに描いても、解釈するわたしの立場はけっして薄れることがないと、今回は確信を持って書けるようになった。むしろ、わたしのつまらないコメントによって一つ一つの言葉の力を殺いでしまうことの方を恐れて書こうとしている。方法論的なコメントでもって、社会学理論が許さない「多様性」こそに、彼らの物語の重要な部分があるということを主張するために、理論的「サンドイッチ」を選んでいる。この選択の根拠として、テキストはたとえそれを書き写すだけでも一つの解釈となりうる、という言い古された言葉の再発見がある。

彼らの生の言葉が彼らの狭い日常世界に関する語りであっても、そのままに彼らの社会に対するさまざまのイメージを十分に表現していると今は思っている。語りはそのままで、彼らの日常世界についての「社会理論」を提示している。彼らが自分たちの生きてきた歴史を自分たちの言葉で語る度に、新たな歴史として再生され、再生される度に彼らの現在が形ち作られ、さらに彼らの言葉の中で彼らの世界のイメージは作られていく。日常的空間の中に彼ら自身のイメージが作り直され、重ね合わされ、彼らの日常世界が現実のものとして受けとめられていく。

「成功の自慢話」であっても、この物語は確かな「社会理論」となって、まさに彼らの生きる社会を描き、説明し、現在の彼ら自身

のあるべき姿を作り出していく。現在を描くために過去が語り直されるというレトロスペクティヴな視角こそが、彼らの描く彼ら自身の物語なのである。当然、「成功の一代記」は人生の「生成の物語」となり、発展の物語を語る「近代化理論」に適合するライフ・ヒストリーを提供することにもなる。「社会理論」も「社会学理論」も、互いに相手を支持しあって、「近代の物語」を唯一正統の神話とするだろう。

「生成の物語」とは、現在において、過去が語り直されることによって再生される発展の物語なのだ、という筋書きが明らかにされるなら、語りの場と時間は明示される。ライフ・ヒストリーという「自然史」が、決して自然でないことが分かるだろう。過去を語っているようでいて、実は現在の自己を語るために過去を語り直しているのである。

人々の物語をこのように語るわたし自身はどこにいるのだろう。わたし自身も、インタヴューを読み直すというレトロスペクティヴな視角をこの十年で手に入れた。インタヴューを通して世界を彼らと共有していたというレトロスペクティヴな物語を今に再生することは、彼らの言葉を語っているわたしという語り手をことさら強調しなくても、彼らの物語を表現できると考えるに至ったのである。インタヴューという行為を通して作りだした十年前の時空を、現在

のわたしが語り直しているのである。

彼らは自分の過去を年代的に順序よく「ライフ・ヒストリー」として語ってくれたわけではない。インタヴューの度に、語られた歴史時間は異なっていた。生い立ちを語ってくれたインタヴューもあったし、現在の不満を語ってくれたインタヴューもあった。現在と過去とが混じりあって語られたこともあった。時間があちこちに飛んで、わたしを混乱させることもあった。しかし、レトロスペクティヴな語りとして聞くと、「語っている」という一貫性は揺らがない。小さい頃の出来事、結婚してからの出来事、というように過去のある時点の出来事として聞くから、時間的な混乱があると受け取ってしまうのである。語りの世界の中の「出来事」として読めば、すべては語られている時空での問題提起であり価値判断である。

かつての小さな論文の時もそうであったが、断片的な一つ一つのエピソードを、一本の時間経過に並べ直して書いていくことにした。人間の成長というもっとも自然に思えるライフ・ヒストリーという形式で、時間経過にあわせて整理することにした。もちろんこの整理によって、わたしという語り手による物語の再構成が介入している。生い立ちという「自然史」は、パーソナル・ヒストリーという形で記録されて、二重の再構成をへているのである。

生のインタヴューでは、生い立ちの話でも順序よくは語られない。

インタヴューごとに、その時その時にもっとも関心を持っていた出来事から、彼らの語りは始まった。一回ごとのインタヴューこそがむしろ完結した一つの物語であったろう。完結していたはずの一つ一つの物語を一つづきのライフ・ヒストリーとして、わたしが描き直しているのである。この点でも、わたしはすでに物語を語ってしまっている。

わたしが「彼らの物語」を語っているなら、この論文に書かれた「物語」がテキストということになる。生のインタヴューはもはやテキストとしては消えてしまっている。彼らの語りの中で描写された「事実」はもはやどこにも存在しない。[1] 彼らの語りそのものが、わたしによるインタヴューで現れてきたものなのだから、もともとの「生の事実」などはありえないだろう。インタヴューした者とインタヴューされた者との間で作られた世界でだけ存在しえた「事実」は、さらにわたしが語ることで新たな地平に持ち込まれている。その新たな世界でのみ提示されるテキストがこの論文の大半を占めている。

解釈学的方法論からいえば、ここに二重の解釈がある。二重の解釈どころではなく、何重にも重ねられた解釈がテキストを作っている。しかもテキストのオリジナルがどこに存在するかは不明である。

---

[1] インタヴューを記録したテープの山が残っているし、そのテープを書き起こした分厚いファイルもある。だが、この大量の音と文字は、何らかの解釈なしには意味を持たないだろう。

彼らの日常世界の中で何度も語り直されて、彼らの経験してきた出来事は一つのテキストとなり、彼らの再解釈の対象となっている。そのテキストは彼らとわたしとのインタヴューの世界でさらに語り直され、その作られたテキストをわたしがこの論文でテキストとして提示している。

リクールの解釈学的方法によれば、テキストは再解釈を重ねられて、ミメーシス１、ミメーシス２、ミメーシス３、というようにミメーシスは積み重ねられて行く。テキストは確かに書かれたものとして、再解釈の対象として常に存在する。リクールはさらに、行為についてもテキストと同様に再解釈の対象になりうるという。［Ricoeur］

テキストとしての行為という観点は、行為をやりとりしあう相互作用の積み重ねとして互いに相手を解釈しあい社会的関係を構成していくという状況においては、行為１、行為２、行為３、というように、自己の行為をミメティックに積み重ねていくという自己提示のありかたをよく表すかもしれない。キャッチボールをしている時、一球ごとに、相手の投げてくる方向（意図）を読みとりながら受け、相手に受け取りやすいように投げる方向を修正して、投げる者と受ける者との間には予期できる相互行為のパターンが形成されていく。一つ前に投げた球と受けた球の「意図」（ボールの方向）と「結果」

（受けた場所）に次の球の「意図」（これから投げる方向と投げてくるだろう場所）が重ね合わされていく。ミメーシスとして連続する相互作用と解釈できるだろう

行為は「今、ここで」だけ行われるわけではない。ある相互作用が、一定の時間経過の中で継続していく範囲内でだけ、行為が行われるわけではない。「今、ここで」だけ通用する「ルール」の中で、行為は繰り返されるだけではない。過去の別の時空で経験した「行為」を、「今、ここで」の行為に持ち込む。将棋なら、ルールは常に一定であるから、過去の棋譜を、目前の勝負に生かせるだろう。ルールが、将棋という時空を「切りとって」くれる。だが、経験を現在の行為に持ち込むことは、ルールの異なるゲームに過去の棋譜を生かして、目前の他者との相互作用を形成することに似ている。経験としての行為は、「今、ここで」の時空に移し代えられて、新たな意味世界の下で表現し直される。ミメーシスは連続しない。

インタヴューでの「過去」の物語は、わたしに語られることで、つまりわたしとの相互作用の枠内で、新たに語り直される。過去の経験は、経験が起こった過去の時空から切りとられて描写され、わたしに語られている世界の物語として提示されている。語り直されている時点での「今、ここで」によって、新たな意味を付与されている。

さらに、インタヴュー記録としてのテキストをわたしが語ると、リクールの言うミメーシスの連続性は、もう一つの断絶を蒙る。彼らの語りは、わたしの語りにとって替わられて、同じ「事実」の描写のように見えても、語りの次元はもう一度異なる地平へと移される。

語りの次元が数回にわたって移行されることは、かつての小さな論文でも方法論的な大きな問題点であった。それゆえ、彼らの語りを聞いたわたしが、彼らが重要だとみなしているとわたしが思った言葉だけを「」に入れて引用する形で、できるだけ「わたしが語る」というスタイルをとった。当時は物語という説明の方法論を視野に入れることはできなかったので、論文としての一貫性を「わたしの語り」という次元で押し通そうとしたのである。彼らの語りとの次元の違いは、いわゆる「二重の解釈」という解釈学的循環に逃げ込むことで、問題が解消されるかのようにしておくしかなかった。

［橋本 1981、106］

わたしの語りは、「社会学理論」の世界からの介入であった。彼らの語りは彼らの「社会理論」による説明として扱い、わたしにせいぜいできることとして、わたしの語りと彼らの語りとの二つの世界の橋渡しという、折衷的なレヴェルにとどめようとした。橋渡しと言いながら、わたしの語りは、社会学の世界に向かっては彼らの

語りの代弁者であり、「社会学理論」の物語がいかに狭くて硬直した語りしか許さないか、という批判を「社会理論」から行おうとし、同時に、彼らの「社会理論」を「社会学理論」の世界でわたしが語っていたのである。日常世界の説明原理としてさまざまな「社会理論」があり、「社会学理論」は人々の語りとしての社会理論に視野が届いていない、という批判的立場を提示できると思ったのである。

結果は、わたしが語れば語るほど、どれだけ彼らの言葉を取り入れて語っても、社会学の世界での物語を再構成しているにすぎなかった。ライフ・コースの例証であったり、ライフ・ヒストリーとしてのモノグラフの提示という社会学的作業とみなされたのであった。二つの世界の橋渡しというよりも、社会学の世界に否応なしに組み込まれているわたしの「物語」を再発見することになったのである。

わたしの語りは、社会学理論のミメーシスとして位置づけられたようであった。社会学の世界に住む読み手たちは、「事実」の紹介に興味を持ち、わたしのフィールドからの社会学的報告として読んだ。わたしの「作品」は、フィールド・ワークと連続する一つのミメーシスであった。二つの世界の橋渡しになろうということは、やはり社会学的世界の理論のミメティックな語りでしかなかったのである。[1)]

[1)] 上子武次は、すぐれたライフ・コース論という好意的な感想を述べてくれたし、Journal of Family Historyの編者であるTamara Harevenは、日本の女性のと家族の現代史という文脈で評価したようである。

わたしが記録した語られた物語としてのテキストは、実はわたしの作ったテキストだったのである。「橋渡し」を意識して、わたしはテキストを作ってしまっていたのである。もちろん、このテキストは、文学作品が書き手に密着して保存されるようには、語り手に密着してはいない。語られたままのテキストは、わたしという調査者の手によって、文字のレヴェルに移し変えらて新たな「テキスト」とされてしまっている。この「テキスト」は、語り手のテキストに対してミメティックではありうるが、わたしの物語の中に切りとられて、語り手のテキストと「連続する」という保証のないミメーシスである。社会学の世界において、フィールド・ワークという領域の中で連続するミメーシスとして成立しうるテキストでしかない。

記録されたテキストは、いかなる事実を伝えているのであろうか。事実であるというのは、わたしが選んだ物語の中で「事実」として描写されているという条件においてだけである。わたしの語りは、「二つの世界の橋渡し」という形で隠されていたといってよいだろう。それゆえ、インタヴューで語り手が再構成した物語と、わたしが切りとった世界の物語とを区別するために、生の言葉はできるだけ用いないように心掛けていたのである。インタヴューに応じてくれた人々の物語を、わたし自身が興味あるとみなした事柄として描いているのだ、という立場を強調しようとしていたのである。わた

しの描いた物語は彼らの物語の事実とは異なる、ということを主張しておきたかったのである。他方、社会学の世界では、彼らの物語は十分には描ききれない、とも主張していた。わたしが提示した「事実」は、わたしによって「文化の翻訳」をほどこされた「テキスト」となっていたのである。［Geertz 1983b］

結果は、社会学的世界を暗黙のうちに肯定することになった。彼らが語った「事実」は、わたしの属する社会学的世界の「事実」に翻訳されてしまい、この世界の中でのみ「意味あるもの」となっていたのである。つまり、ライフ・コースの研究であり、パーソナル・ヒストリーのフィールド・ワークであるという評価であった。

今は、たとえ彼らの物語としての「事実」と、わたしの描く物語における「事実」とは異なる意味を持つのだとしても、やはりわたしの物語は一つの「事実」の提示であると確信するようになった。ちょうど、彼らが確かな歴史学の年代や言葉を用いなくても過去の物語を語りうるように、わたし自身も彼らの物語をたとえ「歪め」ていても一つの世界を語りうるのである。ミメーシスが連続しなくても物語を語ることはできるし、語られる世界が異なって出来事に与えられる意味が違っていても、「事実」はそれぞれの世界で成立するのである。わたしが語る物語が、ライフ・コースの研究としての、あるいはパーソナル・ヒストリーのフィールド・ワークとして

の解釈を受けても、つまりわたしの意図以外の評価を受けても、それは「テキスト」として「開かれている」という一つの証拠として意味があると考えられるようになったのである。

2）物語のそれぞれの特徴

この論文では、六人の人たちに、三つの家について語ってもらっている。

第一部では、登場人物は男だけである。男たちの語った家であり街である。第一部の第一章で街の歴史を概観するのは、漬物屋の若主人が錦の歴史から彼の話を始めたという「出来事」からくる。「錦の歴史、古いでっせ」という彼の最初の言葉は、錦の古い伝統をとりあげてこの街の現在を描こうとするだけでなく、彼の家の伝統をも説くためであった。インタヴューの間、彼はたびたび古い歴史や哲学を引用した。彼の語る家の物語は、単に歴史を振り返ることではなく、彼自身の生き方の道徳的表明でもあった。ただし、彼がこのレヴェルでの語りを意識的にしているわけではない。彼の物語に読みとったこの街の「始まり」であり、それを同時にわたしの物語の「始まり」としたのである。

第二章「継承される家」は、漬物屋の初代が生まれ育った家の物語から始まる。この始め方は、二代目である若主人の歴史趣味とい

うことだけではない。家の歴史にさかのぼることで、自分の現在を語ろうとしているということを表している。彼はこの街の歴史を集めて、商店街の青年部で好んで歴史を語ることもするという。この語り方には、彼の歴史趣味以上の意味がある。現在栄えている店の出自が、錦の歴史と同じくらいに古いことに彼は価値を置こうとするのである。彼は二代目である。彼が好んで語る古い錦の歴史と比べて、彼の店の歴史はあまりに新しい。そこで、父親の里の歴史が錦の歴史に重ね合わされて、彼の継ごうとする店が、家の伝統だけでなく、街の伝統を継ぐ存在として、語り直されていくのである。

錦はたしかに古くからある食料品を商う街であるが、じっさいには新しい店がほとんどである。戦後にやってきた人々が錦の現在の繁栄を支えている。第三章の「家の創設」の主人のように、闇市の様相を呈していた戦後の錦に、いわば裸一貫で乗り込んできた商才ある「新入り」が、錦で成功して店を大きくし、現在の小売りの商店街としての錦を大きく育てたといってもよい。彼のような「新入り」には、錦の歴史は無縁であるし、街の古さは彼の商売に価値を生まない。商店街として町を栄えさせるにはむしろ邪魔になることもあった。いや、錦の古さそのものが彼の成功を妬み阻害しようとしたこともある。新入りである一代目にとっては、街の古い伝統は、彼らの新しい商売にとって障害でさえもあった。

第二章「継承される家」の老主人も、一代目として錦に入ってきて自分の店を建てた。昭和の不況、戦中・戦後の混乱を生き抜いて危機を乗り越え、二代目に店を譲ろうとする時には、錦の中心人物として伝統を背負うようになっていた。だが、伝統を強調するのは二代目の若主人であって、初代は戦後の混乱と経済成長の変化を、「家の創設」の主人と共に乗り越えてきた世代である。「継承される家」の初代は、「家の創設」の主人と同世代であり、錦の戦後の復興では同じ経験を共有している。いくつかの危機を共に乗り越えてきたという確信が、彼ら二人の「家の物語」に共通する。初代たちが生き抜き、現在の繁栄を築いてきた歴史を、二代目が街の伝統として再生させようとする。危機の克服は、繁栄の継承という未来への延長を保証する伝統として語り直されるのである。

「家の創設」の主人は、自宅をこの街の中に持たない。仕事場と家とを離している。息子は店を継いでいるが、妻や嫁には店を手伝わさせない。職住分離という近代的な会社経営の形をとろうとする。彼の語りの中に、妻は入ってこない。妻へのインタヴューの機会は与えられなかった。近代的小家族の形をとって生活し、近代的経営者の態度を家に対して保とうとする彼は、かえって「家父長」的態度をくずそうとはしなかった。

「継承する家」の方は、三世代が同居する形で錦に住む。老主人

の妻は、老主人が留守の間、家も店も切り盛りしてきた。従業員にもわが子のように接し、伝統的な家の商売の形を守ろうとする。若主人の妻も、当然のように老女主人の跡をとるように期待されている。家の伝統は、錦の伝統とともに継承されなければならない。それゆえ、二代目は伝統を自分たちの一部にしようとする。この家では、女主人は欠かせない存在である。彼女なしに、家の歴史はありえない。だが、若女主人はまだ若主人の語る歴史の一部ではなかった。

第二部は女たちの物語である。「継承する家」の若主人が「女たち」について語るところから物語を始める。街の歴史、家の歴史が男たちに語られて、その世界の中で作られている女たちの世界がある、という構成で第二部の物語を始める。

第五章「家を作る女」の女主人は、「継承する家」を夫ともに作ってきた。じっさいに商売をし、店を大きくしたのは彼女であった。夫は、長い間戦争にとられ、戦後帰国しても戦地での消耗でほとんど商売ができず、体力を快復してからはこの街全体のために働いてきた。その間、ほとんど彼女自身が現在の店を、そして家を作ったのである。だが、あくまで男たちの「大きな世界」があって、その枠の中で家が作られてきたという物語の一貫性は保たれる。

彼女は、夫が始めた店とはいえ、一人立ちして商売をやってきた。

自分の生い立ちを、早くから一人前でやってきた人間として描く。小さい頃に母親が亡くなり、田舎の百姓としては商才のあった父親から、商売の才能を譲り受けたと言う。新しい店を彼女自身が作ってきたのに、やはり継承の物語が、父親の血を受け継ぐ女性として語られる。「男まさりの女」は、父親のイメージの再生として語られる。商売の上手な女は、女として母親を継ぐのではなく、女でありながら父親を継承し、家を、そして街を、繁栄させる商売人なのである。

継母に生まれた小さいな兄弟を育てながら、彼女は人一倍家のために働いた。このような生い立ちを持つ彼女にとっては、普通の奥さんになることは魅力のないことだった。彼女の夫のように、裸一貫から店を始め、それを大きくすることに人生をかけることを選んだ。継承の物語が語られながら、実は作り出す努力が彼女の語りの中心にある。しかもその努力は、女であるために「馬鹿にされる」という男の世界の中でのハンディ・キャップを乗り越える努力であり、この努力は繁栄する家を息子に手渡すという形で実現されるのである。

戦争中から戦後の混乱期、さらに日本の戦後の繁栄の中で、彼女は店を大きくしていった。やはり、危機が物語の不可欠の部分になっている。さらに、その店を息子に継がせるためには、どのような商

売が最もふさわしいか、までをも彼女は自分の人生の一部として組み込んだ。家を作り、その家を継承させ、さらに継続されるべき発展を、連続する一つの物語として彼女の人生のシナリオに描き込んだ。努力の物語は、継承のシナリオが実現される中ではじめて、意味を持たされるのである。

第六章「家を守る女」は、第五章の女性とまったく対照的である。錦でもっとも古い、そしてかつては格式ある仕出し屋であった家に嫁ぎ、ただその家を守っていくことに人生をかけた。

彼女も父親を早くに亡くしている。母親を亡くしたことと、父親を亡くしたことの違いは大きいだろう。だが、同じように小さい頃に親を亡くしても、片方は積極的に人生を切り開いていくシナリオを描いたのに、この女性は、ひっそりと、「人から言われるまま」に人生を過ごそうと努めてきた。

百年以上も続く家に嫁いだ嫁として、家を守るというほかには自己を表現する仕方がなかったということもあろう。彼女が描く自己、家、女のイメージは、与えられた鋳型に、自らすすんではめられていこうとする姿である。いかに今は昔と変わってしまったか、その変化の中に生きながら、「守る」ということにどれだけ大きな意味があるかが、物語の中心に置かれる。家と店の盛衰の中で、時代の変化の中で、守るということが女の世界を作り出していく唯一の方

法であるかのように、時の流れにまかせて自分自身のあり方を発見していく。二代目、三代目に盛んであった家が、いくつかの危機を通して変化していく中で、自分の世代が「家を守る」という努力によって次の世代に何物かを創造することを予見するかのように、与えられた家という空間で「女の世界」を描いていく。だが、彼女の守りの物語は、長男の死によって突如終わりをつげる。創造への願いは断ち切られてしまう。

3）現在に呼び起こされる過去

登場人物たちについてのこのような特徴づけは、わたしの物語の中で単純化され典型化されているのではないか、との批判を受けるだろう。男と女、作る女と守る女、この二つの対照でさえ、すでにこの論文を書くために都合のよい構成となってもいる。「男」と「作る」、「女」と「守る」というセットに仕立て直せば、たとえば革新と伝統という軸でも、ここに記録したパーソナル・ヒストリーは範疇化できるだろう。男性イメージは創造、女性イメージは保守、というフェミニズムが批判する男性中心主義が、この街の世界、そしてその世界の中の家に浸透しているという結論にもなりうる。

彼らが語る物語の描写を読んでもらえれば、それほど単純でないことが分かるだろう。「表と内」「男と女」という伝統的な空間と

性の分化は、街と家のあちこちに発見できる。だが、男が表だけの、そして女が内だけの、という区分はけっして固定されてはいない。「家を作る女」は、女としてのハンディ・キャップを乗り越えることが「女として馬鹿にされない」生き方であると繰り返し語る。「家を守る女」はむしろ「女であること」を逆手にとって、家の創造に生涯をかける。焦点は、明らかな区分よりも、むしろ細かな差異にある。インタヴューを再構成する時に、彼らの生の言葉にこだわる理由がこの点にある。

引用される生の言葉は、人々の語りの切りとりである。一回ごとのインタヴューがむしろ一つの完結した物語であった、とも言ったが、その完結した物語から切りとられた彼らの「語り」はいわば一枚一枚の写真のショットであり、それらの一つ一つのショットがわたしの物語として再構成してある。

登場人物を典型的なパーソナリティに分類することは、細部の差異の興味を殺ぐだけではない。多様なはずである人物のパーソナリティをいくつかの典型に集約することは、登場人物にヴァラエティをもたせて全体を網羅するように見えて、実は、物語を整理し単純化することになってしまう。このような単純化は、しばしば全体を強調するために行われる。人物伝が成功を讃えるための物語であったり、あるいは社会学でよくあるように、近代化という社会そのも

のの成功を描くための物語であったりする。社会進化論であれ、近代化論であれ、あるいはもっと普遍的に、社会変動論であれ、一元的な物差しで計られる進化の、あるいは変化の「物語」は、しばしば現在の到達点から過去の出来事を「理論化」しようとする。［橋本 1993］あらかじめ想定されている全体のテーマのために、登場人物や出来事を「操作」するということはよく行われる。

この論文では、全体のテーマを最初に設定しておいて、部分である個々の人々の物語を全体のために描こうとはしない。まず問題にしようとするのは、範疇化による「標準化」ではなく、差異である。登場人物は、男と女、作る人と守る人、というカテゴリーに分けて、それぞれの章のテーマが描かれているようだが、この描き方は実は中心のテーマではない。とくに第一部では、一人の人間が身を起こして商売を成功させていくというライフ・ヒストリーを描き、あるいは第二部で家を守る女の一生というライフ・ヒストリーを描く、というようにわたしの物語が構成されているようだが、ライフ・ヒストリーの中のそれぞれのエピソードにおいて、家や街の「世界解釈」が人によって、ある場合は語られた状況において、それぞれ微妙に異なる、というところに焦点を置こうとしている。

興味の対象となっている差異は、登場人物の個性のヴァラエティ、というよりもむしろ語られた個々のエピソードのヴァラエティにあ

る。これらのヴァラエティがどのように全体を描くにいたるのか、という問題を視野の中心においている。どのような全体を構成しようとしてヴァラエティの差異が描かれているのか、という点にこそ興味の焦点がある。登場人物たちが描く家や街に対するイメージの持ち方の違いが、細かな差異を作っているところに描写の力点を置こうとしている。彼らの全体に対するイメージはそれぞれが微妙に異なって、しかも街という全体を作っている、そしてその全体は彼らの物語の細部にこそあると言える。

彼らはこの街に何十年と住んできた。しかも、小さな狭い通りに面して、扱う商品は違っても、食料という共通の品物を扱ってきた。サラリーマンが住む郊外の住宅街も、収入や学歴、職業という点からいえばある程度の均質性を持ってはいるが、何代にもわたって住むということはないし、代々同じ小学校に通って、地域に密着している仕事場を持っているわけでもない。この街の人々は、この街に住み、この地域の小学校へ通い、同じ様な仕事をし、ある場合には何代も続いてこの街に暮らしている。共同体としてのこの街の生活慣習は、人々が移り住み、出て行き、また新たに入ってきても、冠婚葬祭などの目に見えるしきたりだけでなく、通りの掃除や朝夕の挨拶という日々の付き合い方にまで、暗黙の「ルール」が浸透している。息苦しいと言っていいほどの均質性への圧力がある。もちろ

んこの均質性も彼らが作ってきたものである。

にもかかわらず、この街に住む人々の描く「社会のイメージ」には、つまり家や街に対して抱いているイメージには、差異が見て取れる。この差異は人々のこの街に対する関係の違い、彼らの家の位置づけの違い、であり、この差異は彼らのライフ・ヒストリーの描き方の違いに表れている。

個人は、けっして社会との関係によって決定される従属変数ではない。人々はそれぞれが占めている位置で、社会に働きかけ、歴史を形作っていく。家を創り、それを伝え、継ぎ、もっとも身近な街という共同体を形成していく。与えられた歴史を、個人の歴史の中で位置づけ直し、より大きな歴史の一こまを作っていく。それぞれの人の抱く全体イメージに従って作り直していき、しかも個々の人々が作る全体には互いに理解し合える「一貫性」がある。いや、共通する世界があると人々は信じて、個々のヴァラエティを生きているのである。

この論文で語られるいくつかのライフ・ヒストリーは、それが語られた時と場所の投影として個々の人の生き方に意味を与え、共同体の歴史を語り直していくプロセスを、あらためて描き直したものである。彼らが自分たちの過去を切りとって語ってくれた一ショット一ショットを、つなぎあわせたものである。

過去を語ることは懐古ではない。現在の創造である。語られる度に過去は再構成されていく。レトロスペクティヴに語ることは過去に向いて語っているのではなく、現在を語るために「過去」を今に引き出しているのである。この点が、本論文のもう一つの焦点となっている。つまり、彼らが語った過去は、過去の出来事を語っているようでいて、けっして過去の物語ではない。語っている時点で、「過去の出来事」として創造されているものなのである。

彼らが過去を語る時には、現在が未来にも続くように、過去から現在へ、そして未来へと、一直線に続く物語を語っている。常に、現在からの未来への創造である。［橋本 1993］「家を作る女」にしろ、「家を守る女」にしろ、彼女たちが描いた人生のシナリオは、過去から現在へ、そして現在から未来へと、語っている位置から一直線に続いている。彼らは「過去」を、語っている現在の自分のあり方、さらにこの現在が将来にも続いていく自分自身の生き方として語っているのである。

物語を語ることは、与えられた時空なしには聞き手に伝わらない。[バフチン]この論文に登場する人々は、長い歴史と伝統を持つとされる商店街に住み、そのライフ・ヒストリーを、この街の彼らの家で語る。この時空があることで、わたしは彼らの物語をライフ・ヒストリーとして聞くことができる。彼らが「伝統」とか「歴史」と

か「老舗」とか呼ぶ時空は、彼らの物語るライフ・ヒストリーにちりばめられたヴァラエティを成り立たせているのである。この時空は、まさに現在であり、語っている場であり、わたしが聞き手とし記録する「関係」である。そしてさらに、今その記録をわたしが語り直そうとしているのである。

聞きとる側のわたしが属する時空は、彼らの時空にとっては異質であろう。異質なものがインタヴューに来るのだから、わたしは侵入者である。だが、侵入者としてのわたしがいろいろとつまらぬことを質問するのに対し、彼らはかなり楽しんで答えてくれたと思っている。「こんなこと、何のお役にたつのか」と、彼らの答がどのような貢献をするのかという疑問は、毎回のインタヴューのはじめに必ず出た。こういうつまらぬことを尋ねるわたしの仕事に対する当然の疑問であったのだろう。男たちからの反応は、「そんな話なら、どこかで一杯やりながらしましょうか」などとも言われた。わたしが彼らの世界を「異文化」と感じたように、彼らにとっても、わたしの属する世界は異質であったはずである。けれどもインタヴューを重ねるうちに、彼らの世界とわたしの世界とは、たとえ偶然であろうと、あるいはわたしの思いこみにすぎないと言われるかもしれないけれども、インタヴューが続いている限り、一つの空間と時間とを共有するようになったと確信している。話す楽しみ、聞く楽

しみという、互いの期待がインタヴューの度に持てるようになった。うまくいったインタヴューは、どのようなものでも、語り手と聞き手との間に何らかの満足感をもたらすようである。［中野 1977、287］

このように論文の形をとって彼らの物語をわたしが語り直す時、わたしの空間と彼らの空間とが十分な接点をもち続けないならば、彼らについてのわたしの語りはありえないだろう。もちろん、今わたしが書いているのであるから、彼らとわたしが一つの時空を共有していたというのも、わたしのイメージの世界にだけ存在する。時間が共有されていないのは、言うまでもない。

もしわたしの属する「社会学の時空」によって彼らの語りを一方的に枠にはめてしまうなら、せっかく作り上げた「テキスト」は、わたしの時空の中の色あせた「事実」に変形してしまう。彼らの語ってくれた物語は、わたしの強制した物語のなかで単純化された一つの描写になってしまう。この街に住む人々はこんな慣習を持っている、季節季節にこれこれの行事を行う、家はこんなやり方で継承されてきた、などの断片化された「事実」の羅列になってしまう。いわば「異文化」に発見された珍しい出来事としてのみ記録されてしまうだろう。

繰り返すが、わたしが彼らの物語を語るためには、世界が共有さ

れていなければならない。異なる二つの時空がある時接触しすれ違って「相互作用」を持ったというだけでなく、物語を語るための一つの時空を作り出さなければならない。

インタヴューを集中的に行った十数年前の世界を現在のわたしが語り直すためには、おそらく、わたしの中で一つの物語の世界を作り出すために必要な時間の経過であったのだろう。わたし自身が十数年前を振り返り、レトロスペクティヴな語りの世界を現在に持つことで、十数年前の彼らとの接点を現在にまで延長して、一つの物語を可能にしたとも言える。

このレトロスペクティヴな物語の世界も一つの世界であって、他の語り方もありうる。ここで描く人々のライフ・ヒストリーは、「時空」の一つの共有の仕方である。語られたものを語り直すという「相互作用」は、おそらくはインタヴューの中で行われていたはずの「わたしの語り返し」への「彼らの語り直し」は、この論文を書くことによってさらに継続すると言えるであろう。つまり、彼らがこの論文を読めば、彼らはわたしに新たに語り直してくるはずである。だが今、ここで一つの物語として示すことで、彼らとわたしとの「相互作用」を完結しようとする。

彼らとわたしとのキャッチボールは、何重にも続き得る「循環」である。この多重の「解釈学的循環」は、方法論的には永遠に続き

うる。とどまることのない循環が続くであろう。だが、この論文を一つの物語とすることによって、循環の環が閉じられる。この閉じ方は、一つの閉じ方である。この閉じ方を選ぶために、一つは方法論的に、もう一つは彼らの語りの中に一つの閉じ方を発見するために、十数年という経過が必要であった。この循環の閉じ方が、つまり一つの語り方としての意味が、どのような延長線を持ちうるかこそが、今後の最大の問題となるであろう。

第一部　男たち

1．街の歴史---物語の始まり

「錦の歴史、古いでっせ」と、錦小路で二代目になる漬物屋の若主人は言った。遠山和義、昭和十二年生まれである。「錦の歴史を話すことは、京都の食品流通機構の歴史を話すことになります」と彼は言う。錦小路が、京の台所として室町時代から現在に続き、活気ある商店街として生き残っているのは、その長い歴史があるからだと言うのである。「その歴史を知ってね、現代風にアレンジして、今の社会、文化にあった風にしてね。基本はいっしょです。それを大切にして、継続していくことに意義があるのです。」歴史は現在に生きていなければならない。

錦小路は、京都という町が出来上がった頃から続いていると言われている。四条通りという京都の中心を東西に貫くメイン・ストリートの一筋北にあって、繁華街に隣接している。近代的な建物が建ち並ぶメイン・ストリートから一歩離れるだけで、昔ながらの市の世界に足を踏み入れることになる。

京都の人々に「錦」と呼ばれて親しまれているのは、寺町通りから高倉通りという南北に走る二つの通りにはさまれる、四百メートルに足らない細い道である。人が二人並べばいっぱいになるような狭い通りである。寺町通りの一つ東に新京極と呼ばれる南北の通りがあり、錦小路はこの新京極で止まっている。突きあたりに、「錦

の天神さん」がある。明治・大正期には新京極に芝居小屋が並び、京都の大きな繁華街の一つであった。現在でも、映画館、食堂、その他さまざまの小さな店が並んで、かつてのにぎやかさが残っている。

寺町は、名が示すように、寺がたくさんある通りである。新京極は、寺の境内に接して作られた繁華街であった。にぎやかな通りの裏には、表通りからはうかがえないけれども、今でも墓地が広がっている。

寺町通りから西は、御幸町、麩屋町、富小路、柳馬場、堺町、そして高倉通りと、南北の通りが錦通りを区切っている。麩屋町と柳馬場の間は東魚屋町、柳馬場と高倉通りとの間が中魚屋町、そして高倉通りから西が西魚屋町と呼ばれる。錦が魚屋の同業者町であったことが、町の名前からうかがわれる。

「錦」は幅二、五メートルほどの昔の京の街のままの細い道である。道の両側に、百五十軒ほどの食料品を扱う店が並んでいる。魚、野菜、肉、乾物、鶏、卵、漬物、それぞれを専門に扱い、店幅いっぱいに品物を並べ、道にあふれんばかりに商品の質と量とを競っている。魚を扱う店でも、海の鮮魚を専門にする店、淡水魚を専門にする店、貝を専門にする店、それぞれが軒を接して品物を競い合い、同業の店が二軒三軒としのぎを削っている。

遠山和義の父、遠山政次は、この商店街全体の組合である錦振興組合の会長である。政次は、「錦の歴史、ご存知やとは思うけど、明石の魚を御所に納めるのに、ここは御幸道になってましてね。伏見の港から天秤に担いでやってきて、ここらあたりは鴨川の西の土手で、薮や松林の木の陰で休憩する場所になってました」と錦の歴史を語り始めた。

錦小路から御所までは、蛸薬師、六角、三条、姉小路、御池、押小路、二条、夷川、竹屋町、丸太町と東西に走る十の通りがある。丸太町は御所の南の端に接する。新京極の東にある河原町通りは、東西の繁華街である四条通りと交わるもう一つの繁華街である。このさらに東に、京都の中心を東西に区切って北から南に流れる鴨川があり、後白川法王が「鴨の川と、賽の目と、比叡の荒法師は思うにならぬ」嘆いた氾濫原が広がっていた。四条大橋で鴨川を東へ渡ると、四条通りに面して南座がある。慶長の頃、阿国歌舞伎が京の河原で踊った念仏踊りに由来するという歌舞伎の由緒ある芝居小屋である。四百年の歌舞伎の伝統を誇り、現在でも顔見世興行として、東西の歌舞伎役者が毎年十二月に集まり、師走の京都を彩る。

四条通りが東山の裾に突きあたるところに、祇園社すなち八坂神社がある。鴨川の東岸からこの八坂神社までの間が、祇園である。「一力」と呼ばれて有名な万亭をはじめ、いくつもの古い「お茶屋」

がならぶ花街が広がっている。今も、だらりの帯にこっぽりを履いた舞子さんが歩く、京都の最大の夜の歓楽街である。八坂神社は四条通りを中心とする京都の町衆の守護神であり、七月には山鉾が巡行する祇園祭に全国から観光客が集まる。

京都の旧市内の町のつくりが、平安京の坊条制から現在の碁盤の目のような町の姿をとるようになったのは、十一世紀から十二世紀のことであったらしい。町が、通りに面して向かい合って一つの町内を形成するようになった。それ以前は、ブロックごとに町を作っていたのに、この時代から通りを中心とする町に変わっていった。つまり、一つのブロックは、面する通りごとにちがう町の名を持つ。たとえば、錦小路に面して東・中・西魚屋町があり、南北の通りに面しては、八百屋町、瀬戸屋町、貝屋町と呼ばれる町ができてきた。鎌倉・室町初期の火事の記録に、すでに錦小路の名が見られる。［秋山 、55以降］

『宇治拾遺物語』によると、「くその小路」と呼ばれていたのが、当時の帝によって錦小路と名付けられたという説話があるという。「具足小路」がなまって「屎小路」となり、十世紀半ばに「錦小路」と名付けられたというのが実情のようであるが、この頃から商売にちなんで街の名前が付けられるようになった。［京都市、48-9］都のあちこちに市がたち、京の人々の日常の必要を満たすようになっ

ていた。商人たちは、店を持たず、棒振りとよばれる行商に近いものでもあったらしい。その中に供御人と呼ばれて御所に出入りする商人がおり、それを現在の錦の人たちは自分たちの起源としている。伏見から魚を運び、鴨の河原につづいていた現在の錦の場所で、豊富な地下水を利用して魚を貯蔵し、そこで衣服を改め、御所に品物を納めていたという。

「錦の薮といわれて、すすきや竹薮があったのと、清涼な水があってとり魚の貯蔵ができる地下水があったから、錦は食料の市になりました」と和義は言う。「井戸の下へずっと横から行って、冷蔵庫がわりに地下水を利用して貯蔵してね。品物の鮮度を落とさんようにするには、それよりなかったんですなあ。今はもう潰してしもてないけど。」それに「門鑑という、出入り商人の鑑札がありましてね」と、現在にも「門鑑」を伝える店があると言って、錦の先祖の知恵と、普通の商人ではない社会的地位の高さとを、この街で商売する人たちの誉れとするのである。

錦は、室町期の座の形成によって同業者町ができる中で、魚屋の同業者町として始まった。すでに鎌倉初期に、魚供御人座が六角堂付近に設けられていた。当時、この六角堂から東南にあたる錦小路が魚棚となり、やはり六角堂の西には西洞院の鳥魚の市があったという。二つの町は、当時の京の中心、四条通り室町に近接していた。

［藤本、148-9］現在、西洞院の鳥魚の市は残っていない。錦のようには、市の伝統が伝えられることはなかったのである。

現在の祇園祭でも、四条通りと室町通りが交差する点は「鉾の辻」と呼ばれ、祭の中心となる鉾が立ち並ぶ。七月十七日の山鉾巡行で、鉾と山が四条通りに集まり、祇園社へ動き始める場所である。室町時代の呉服問屋たちが町衆として祇園祭を支え、この界隈がかつての京都の中心であったことを今にしのばせる。

和義は自分たちの街の歴史にはとくに関心を持ち、自らが会長を務める振興会の青年部で、会員が歴史を学ぶことを勧め、自分自身も錦の歴史を勉強している。「こんなものを作らはった先輩方が偉い。受け継ぐわれわれがその歴史を知らんといかん。歴史をよく見て、そして新しいものを展開していくのが商いの道やと思います。」歴史の単なる回顧ではなく、錦の人間が団結し錦をさらに発展させるために歴史を求め学ぶのだと言う。「家のルーツぐらい覚えとけ。それがないとこは、錦のルーツぐらいは覚えとけ。そこには何かがある」と錦の仲間に主張し、伝統を守り発展させようするのである。

政次も「上(かみ)の棚、錦の棚、下(しも)の棚いうのがありまして」と、歴史から街の由来を説き起こす。それをうけて和義は、「徳川幕府が魚問屋という株仲間を始めた。秀吉の時代に楽市楽座があってね。その前に座があって。信長が商人を集めましたわね。それが楽市楽座

で、それから株ができて。そうやってはじめて、市場の形ができたのが元和年間です」と説明する。「『三棚(さんたな)』と言うてね。昔は店のことを『棚』と言うてました。市場も『棚』でした。徳川時代に三つの大きな棚があって、それが今の流通機構の元やった。中央市場という市場みたいなね。そこで物の価値、相場が立てられた。昔は、ここは問屋さんの商いする、いわゆる仲間が出入りする場所やった。中央市場のシステムといっしょです。」錦は中央市場のルーツでもある。

「上の棚」は現在の「上京区椹木町西洞院西入る」に、「下の棚」あるいは「六条の棚」は「下京区魚棚通室町西入る」にあった。その他に、西納家と呼ばれる塩干市場が「下京区黒門通四条下る」にあった。［京都府、329；藤田、329；奈良、17］[1] そのうち、錦だけが現在にまで市の姿を残している。錦に住む人たちが錦を誇りとするのは、長い歴史の中で錦だけが生き残ってきたという点にある。その他の「棚」は、現在は小さな商店街となっているか、あるいはかつて大きな店があったことを町の姿にとどめるだけである。

明治期に入って株制度が廃止された。錦で続いた魚問屋は五軒であったという。［奈良、49］和義は言う。「徳川時代は幕府の恩恵で、保護された商いでしたでしょう。明治の改革で新政府ができて、

[1] 藤田によると、京都の魚市場研究は、京都市社会課『市場の沿革』が、その後の研究の底本になっているという。

そういうものがいったん廃止になって、いわゆる自由商売という商いができるようになった。いままでの掟とか取り決めが乱れまして、結局さびれていく。錦もさびれていってしまう。ところが、錦は中心部にあったからさびれなかった。上や下の棚はさびれてしまう。それでは、食品の流通機構が乱れて、市民に正しい商いができない、ということで、昭和二年に中央市場ができた」のである。「日本で初めてですよ」と政次は京都に最初の中央市場が作られたと強調する。

魚問屋は、元和（一六一五～一六二三）年間に称号が許され、万治・寛文（一七一六～一七三五）年間に上の店・錦の店・六条の店が三店魚問屋とされた。享保（一七一六～一七三五）年間には、上の店には十二戸、錦の店には十一戸、六条の店には二戸の問屋があり、それぞれが仲買人を定めて鑑札を持たせて市場に出入りさせたという。［藤田、329-30］[1]「三棚」という呼び方は、この頃からのものであろう。和義が言う鑑札は、仲買人が問屋市場に出入るするためのものであった。この鑑札は、錦で現在も鮨屋を営む「伊豫又」に残っている。この「伊豫又」が錦で最も古い店とされている。

---

[1]元治元年（一八六四）以降、六条の店が衰退し、問屋町（下京区問屋町五条下る）が繁盛してきたという。

明治元年に明治維新によって株仲間が崩壊し、自由商売となった。ところが、「仲間」が設けられて、仲間以外のものは魚問屋はできないとされた。明治十五年に京都商工会議所が設立されて、あらゆる商売での新規加入が認められ、新しく魚問屋ができ、競争が激しくなり、転業や廃業する店が多数出た。明治十六年頃、古くからの問屋で営業を続けていたものは七軒にすぎなかった。この衰微に危機感をもった卸の同業者の集まりが、三棚と七条停車場（現在のJR京都駅）前の市が集まって魚鳥商組合を作り、さらに大正三年、京都魚問屋組合と改称した。錦の魚問屋は京都魚問屋組合の第二部となり、名を錦友会とした。第一部は「上の店」で、第三部は「問屋町」であった。錦はすでに京都最大の卸売り市場となっていた。七条停車場前の市というのは、京都の南の端、淀川の沿岸にあった横大路村の市を、明治十年の京都駅の開設にあわせて移動させたものである。横大路村の市は、大阪から淀川をさかのぼって京都の南の端に着いたところにあった。京都大阪間に鉄道が敷かれ、横大路村の市は京都駅の近くに移されたのである。大正四年には、「上の店」で十一軒、「錦の店」で四十三軒、「問屋町」で十六軒、七条停車場前で二軒の問屋があった。［京都府、145-6］

明治期から大正期に、卸市場は混乱と変動を経験した。この混乱は京都だけのことではなかった。他の大都市も同様の混乱を経験し

たといわれている。乱売が行われ、問屋業の浮沈は激しかった。中央卸売市場の開設は各地で求められていたようである。和義の言う「正しい商い」は、昭和二年に全国にさきがけて京都に中央卸売市場が設けられ、ようやく回復されることになった。大正から昭和期の混乱は、大正の終わり頃に錦に嫁入りして来たというお婆さんから和義が聞いたところによると、錦は「ものすごう悪かった。卸だけで、小売りの人は誰も通らなかった。昭和の七年くらいまで、ものすごうおかしかった」という。「正しい商い」ではなく、「香具師のような商売」が横行していた。そこで、中央市場が京都駅の一つ西の駅、丹波口駅に作られ、食品の流通が確保されることになった。政次が「全国で初めて作られた」と強調するのは、「正しい商い」をする錦のプライドを市の歴史に見いだそうとするからである。

錦の商いは正しくなければならない。錦の市の伝統にのっとって、適切な競争と共栄という商売が行われるべきなのである。たとえば、「はしり」といって、季節の品物の早さを錦は競ってきた。和義は、「はしりとは、『初もん』を競って出す。『初もん』を競ったのが錦でしょう」と言う。「はしり」という言葉そのものが錦から出たのだとも言う。

かつて横大路村に市があった時、北からは桂川をへて、西からは淀川をへて、また東からは琵琶湖と宇治川を通って、諸国の物産が、

京都の南の端にある横大路の市へ集まって来た。横大路の市に荷上げされた品物を、問屋たちは早さを競って、京へ担いで走ったという。走って初ものを運んだことから、季節のもっとも早い品物を「はしり」と呼ぶようになったのである。三棚の他の問屋たちも「はしり」を競ったのだろうが、「はしり」こそ錦の品物の心意気を表すものだと和義は言う。早さだけでなく質においても、錦の出す品物が季節一番の「はしり」であることを誇りとするのである。早さ、質、価格を競争する「正しい商い」は、錦の歴史に根ざしているのである。互いに競い、共に栄えるという錦の商売の基本が「はしり」にある。

「中央市場へは、錦の人が半分くらい行った。いや、そんなに行ってないか。相当に行った」と和義は言う。近代流通システムとして最初の中央市場に錦の人たちが中心となって参加し、市場システムの役割の重要さの一翼を担ってきたことで錦の商いの質の高さを価値づけようとする。

昭和二年の中央市場開設は、実は、錦の商売を変質させていった。卸の市場としての錦が、小売りの商店街に変化していくことになったのである。「トロ箱一杯という商いから魚の切り身一切れの商いまでを扱い、量から質の商売へ変っていきました」と和義は言う。この時、現在の錦の原型が生まれた。午前中に卸の商売をし、午後

からは小売りをする。錦は小売りを中心とする街に変わっていった。

現在の錦は、明治初期の日本全体の変化に巻き込まれて生じた危機を乗り越え、大正から昭和初期の流通システムの大変革を経験し、小売りの街に生まれ変わった。戦争が錦の市としての機能を完全に停止させ、戦後の混乱の中から新しい錦が生まれて、現在の錦の姿になってきた。この後に描くいくつかのライフ・ヒストリーは、現在の錦へと街が変貌していく過程を、個人の歴史として語っていく。

2．継承される家

和義は、遠山家の歴史を徳川時代以前にさかのぼる。「土岐一族からの家、という伝説があってね。明智光秀に追われて、西京極で寺男をしていたらしいです。そこで、代々庄屋をしてたわけです。作り酒屋でね。」遠山の家は古く、格式がある。戦国時代、明智光秀の一族にさかのぼれる歴史と伝統を持っている。父親が錦に出てきて店をかまえる以前に、この家には歴史があった。錦の歴史に匹敵する長い歴史があった。

家の歴史は、そのまま商人としてのモラルを支える。屋号であるカク正は、五、六代前の遠山正左衛門がはじめて付けた名前である。「カクは覚悟の覚。悟るです。正の肩にカギをかけて、屋号の印に使います。当時は、商売人はごまかして売る。昔は、ごまかしたり、だましたり、いわゆる原始的な商いが多かった。今でもあるけどねえ、そういう人が。」

家訓として伝えるものはない。「うちの家訓はこの屋号です。ごまかして売ったり、信用のないような売り方するな。計量をきっちりと、正当な商いをせよ、ということです。いちばん大切なのが計量です。目方をごまかして安く売ったりすることはあいならん。その中で、そのきびしい中で、己を悟れ、というのがカク正の意味です。正しい商いをせよ、ということです」と和義は「カク正」とい

う屋号を解説する。「正しい商い」の誇りは、遠山家の歴史と家格、そして屋号とに裏付けられているのである。

政次は、次男として生まれた。兄は孝夫と言う。「重の付く名前が何代も前にあるらしいです。カク正の正も、名付けた正左衛門が自分の名前の正からとったということです。他に、正平とか正作とか、正の付く名前も沢山あった。政次の前には、政次郎というように、政の付く名前がありました。」和義は代々の名をさかのぼって説明する。名前を継いできたことも、家の歴史を語る。

長男の孝夫は、遠山の家が庄屋であったというので、学校の先生をしながら家を継いだ。「この家の仕事はきまってました。先生、医者、役場勤めというところです。」就くべき仕事が、家格によって決まっていたし、この家では代々が定められた仕事に従事していたと和義は言う。商売人になったのは、政次の代が最初ということである。

和義によると、「伯父は、農林学校を出て、生物の先生でした。校長もしてました。京大の何とかいう先生と親しくして、野菜の品種改良をしたらしいです。この間も、教育なんたら褒賞とかいうの貰ってね。勲何等たらいうのを貰いました。」「親父は次男なんです。伯父と同じように農林学校を出て、農協に勤めて、そこでいろんな蔬菜作りの講師をしてました。」孝夫、政次兄弟は、京野菜と

呼ばれる伝統野菜の研究をし、蔬菜作りの指導もしていたのである。

「親父の方は、次男やから性格がはででね。学校とか役所とかそういう世界にいるのがいやになって、菊屋という百貨店に移りました。その百貨店の上海とか大連とかの支店へ行きました。十九歳の時には、大連の菊屋百貨店の貿易主任になってました。ちっぽけなことが嫌いで、大きいことが好きでね。」父親は家を離れて、海外へ出て行った。

政次は、リフトから落ちてきた荷物の下敷きになって大怪我をした。「同じ死なせるなら、日本の土で死なせるのがいい、と言うてね。古いですなあ。そういうこと、今でもありますやろ。」家族が中国へ迎えに行き、日本に帰って静養することになった。「もう駄目だと思われたらしいですけど、回復しました。」「親父は、お爺さんから、『そんな危ないことするな。京都にいろ』と言われましてね、それで京野菜で漬物屋をすることになったんです。」遠山の家は作り酒屋でもあったので、奈良漬けの酒の粕を大阪の漬物屋に卸していた。中国へ行く前には、政次は蔬菜作りの指導もしていたので、漬物屋を始めるには条件が整っていた。

「京都ではいかん、というので、親父は勉強のために大阪の漬物屋へ見習いに行きました。」「昔は皆奉公に行かんならんかった。小西という店です。今も続いてます。あの『大安』さんの今の専務

さんも、親父に続いて見習いに来たはりました。」京都の一流の店からも見習いにきていた大きな店で、政次は修行をした。「一応、むこうの番頭くらいにまでなったんでしょうな。」成長してからの見習い修行であったが、政次は出世していた。

「昭和五年の創業になります」と和義は続ける。京都で中央卸売市場ができた直後であった。中央市場へ移った店が空いたままになっていたし、昭和の初めの不況もあって空き家の店が錦に沢山あった。その一つを買い取って、錦の「カク正」は始まった。「ある店を全部買い取りました。人から物から全部です。漬物屋さんが極道しはって、祇園に二号さんやら何やら置いてね。それこそ、布団一枚まで全部買うて貰わないと借金が返せない。その借金の肩代わりをして、後へ入ったんです。」錦全体はさびれていた時期であったという。

政次は農協や農林学校の指導をしていたし、新しい店でも漬物の実習をして漬物の漬け方を教えた。大阪での奉公の経験もあり、技術的にも熟達していたので、親の援助も受けて準備が整ったうえでの開店であった。

和義は言う。「昔、伯父さんが京大の先生といっしょに野菜の漬け方やら園芸やらを毎週ＮＨＫでやってたらしい。わたしもそんなことは知らんでね。最近、うちの業界誌を見てたら、参考文献にうちの親父やら伯父さんの論文が出てる。『すいか奈良漬けの漬け方』

とかね。今でこそみなさん知ったはるけど、野菜は炒めてから漬けるとかね。新しい方法です。その参考文献を見てると、親父と伯父さんの名前がたくさん出てくる。親父と伯父さんのことをはじめて知りました。」

中央市場の開設という新しい動きの中で、錦の卸売り市場としての力が弱まり、新しい錦として小売りの街に変貌し始めていた時であった。卸の店は減っていたし、小売りの店も少なかった。政次は漬物に新しい技術を導入し、京野菜を使った新しい「京漬物」を始めようとしていた。

店が軌道に乗り始めた昭和十年、政次は結婚した。政次は二十七歳、花嫁聖子は二十四歳であった。聖子は奈良の農家から嫁入りした。長男和義は昭和十二年に生まれた。

商売が軌道に乗り始める頃、小学校一年生の和義と生まれて半年の娘を残して、政次は兵隊へ行った。昭和十八年のことであった。戦争中の物資統制が強まっていく中で、政次は「三法」という公的機関への物資の卸しを手がけるようになっていた。あとに残された聖子は、その事業を継ぎ、女手一つで切り回すことになった。

「統制経済がものすごく厳しくてね」と政次は言う。京都の食品を、三井、三菱、住友などの大きな会社や工場に公定価格「マル公」で卸す仕事を始めていたのである。丸に公の字が品物に打ってあっ

たので、「マル公」と呼ばれていた。「うちへ商品が入って、京都の大きな町工場、官庁へ配給になる。全部うちで割り当てました。全国の産地から引いて来た品物を、まずうちへ納めて、そこからみんなに配ってました。」「公的に決まった歩合で納めます。他はみな闇です。うちだけは正規のルートで流してました」と政次は誇らしげに言った。カク正の「正しい商い」は、戦争中の統制経済の下でも保たれたのである。

和義によると、マル公の仕事は「親父の代わりにお母はんがやってはりました。ここはみな倉庫でした」と、現在の南店を指して言う。創業の店は錦小路をはさんでこの南店の向かいにあり、現在は本店となっている。「お母はんが、新券と旧券の切り替えまで、ずっとマル公の商売をやってました。戦争中、男の人は商売をするのを恐がってね。何かあったらすぐ警察に引っ張られるさかい。お父さん、あれ特高でしたの。」「いや、統制経済警察官」と政次が答える。

「うちのお母はんやら、女性がマル公の商売をしてた。男はみんな戦争へ行ってるし、いかがわしいのにはマル公をささないし。お母はん、烏丸の下がったところにある丸紅のビルの一番上の社長室に通うてはりました。皆がもんぺ穿いてるのに、スカートにハイヒールでね。『いかがわしい商売とちがうか』と言われてねえ」と、

和義は当時の笑い話となったエピソードを語る。男のいない街では、限られた商売ではあったが、女たちが仕事を続けていたのである。

政次は南方戦線へ送られ、ソロモン諸島のブーゲンビルで終戦を迎えた。帰国は昭和二十一年であった。終戦後一年以上を収容所で過ごして帰って来た。聖子は当時を思い出して、「病院船で帰って来はった。そのまま入院しはったんです。骨と皮でした。今は二十二、三貫になったはるけど、十一貫になったはりました。顔は黄疸で、栄養失調でした。見る影なかった。小そうなってはりましたで」と言う。

政次が帰って来た頃の戦後の錦は、闇市同然であった。疎開で空き家になっている店によそ者が入り込んで、錦の人たちは家に戻れず、商売もできなかった。売れるものは何でも売る、という商売が当時の錦で行われていた。力があり品物を持っている人なら誰でもが商売をしていた。

「やくざみたいな人が入ってきて、ここらにはびこってたんです」と和義は言う。「親父は、『錦を守らなあかん』と言うてね。『あの戦争から生きて帰って来たのやから、やくざと喧嘩して死んだかて何ともない。恐いことない』と言うてね。やくざに掛け合って、空き家から追い出して、錦を守ったらしいです。」兵隊帰りの人たちは、やくざに負けなかった。

占領軍総司令部（GHQ）の京都支部が錦を潰しにかかった。全国的に闇市が横行し、戦後の経済統制の一つの政策として、闇市が全面的に禁止されたのである。錦もとり潰しの対象となった。「よそには物がないのやから、闇市に見られるわねえ。統制経済の時に、あるはずのない物を売ってるのやから」と政次は言う。「終戦のあくる年に帰って来ましてね、それから闇市が終わるのに二、三年はかかった。ブラックマーケットの廃止の指令が昭和二十二か二十三年に出ました。大阪の梅田あたりにも闇市がありました。こっちにもありました。錦もそば杖くらって、ここも廃止や、取り壊す、と言われてね。」

政次は錦栄会の会長をしていた。「京都のGHQの指令官にモッサ大尉という人がいはりました。そこへ話をしにいった。一回目は門前払いをくいました。通訳してる人に関係をつけてね。まあ魚心あれば水心。モッサ大尉に錦の歴史とか、生業とか、いろんなことを話してね。『それだけ古い歴史がある市場なら、元へ戻るかもしれん。闇市として発生したものではない』ということになったのです。」錦は取り壊しから免れた。

政次は、毎日のように錦の店を見てまわった。闇をしていると見られて、錦の人が警察に引っ張られるのだった。「話をつけてあげて、警察へ貰い受けに行ったり、没収される品物のいくらかでも手

元に残してやるように交渉もしました。」

聖子も、自分の店の商売を切り回しているだけではすまなかった。「闇は魚屋がいちばん多かったね。『今、主人が引っ張られた』『冷蔵庫押さえられた』と言うて来はりましてね。朝早くから、『引っ張られた。おやっさんちょっと来て、五条署へ引っ張られた』と言うてかけ込んで来はりました。お父さんが、没収をなんとか話つけたげはるの。『半分にしてくれ。色つけてやってくれ』と頼んであげはるの。『お父さんは留守です』と言うと、『奥さんでもかまへん。来てくれ』てね。わたしが行って、『お父さんが今電話かけてはるからちょっと待って』とか嘘ついてね。助けてあげたことも何度かありました。」帰国後の政次は、錦のために働くのが仕事になった。

税務署対策も政次の仕事となった。聖子によると、政次は毎日のように街を見て歩いて、「『毎日歩いてると、いい店とあかん店がよく分かる』と言うたはりました。税金がどんどん上がりますやろ。かわいそうに、取れんとこでもぐーんと取ったりね。白色申告の間はずっと見て歩いて、税務署と掛け合いました。この頃は青色になって、そういうこともないけど。」政次の税務署対策の仕事は、錦の商店が会社組織なって青色申告に切り替わる最近まで続いた。

政次は戦後に設立された錦市場振興組合の理事長に選ばれ、現在

もその職を務めている。「昔は錦栄会と言うたの。主人がもう辞めると言うと、『錦を潰す気か』と皆に言われてね。言うて悪いけど、主人は相当に錦のために活躍したはります」と聖子は言う。

政次は戦争から帰って来て、闇市同然の錦の危機と闘い、市場として立て直し、現在の錦を組織した。その間、カク正の商売は聖子が切り回してきた。「商売なんて何にもしたはらへん。主人が帰った時、わたしはもう商売じゃんじゃんやってました。主人は商売のこと分からしません。『お金の桁が違うし、怖い』と言うて、手を出さはらしませんでした。『命がけで帰って来はったんやさかい、何にもしてもらわんでもええ』とわたしは言うてね。いっしょに兵隊に行った中で、四十何人しか生きて帰ってない。帰ってからでも、病気でどんどん亡くならはってね。主人には、ただもうお役だけして貰いました。」何しろ体だけが大事であった。「主人にはお役がたくさんありますの。錦だけとちがうのです。あちこちの会長をいろいろしはってね。十四、五ほど会長を持ったはりますの」と聖子は言う。

聖子は、漬物屋だけでなく、佃煮屋、鮨屋を開き、京都中に十四、五軒の店を持った。大きくした商売は、息子に譲るにあたって、錦の三軒の漬物屋に絞ってしまう。次代への継承のために、大きく育てた商売を、息子が切り回しやすい商売へと転換していくことにな

る。創業から継続へと商売の方針を変えていく。

3．家の創設

1）終戦

「うちが錦に入ったのは昭和二十五年です。今年で二十八年目です」と、魚問屋で錦に三軒の店を持つ桐田久治郎は、「自慢話しみたいでかなわんなあ」と言いながら、自分の半生を語り始めた。

戦後に錦に入って来て店を持ち、「これほど成功した人物はいない」と桐田は錦の人たちから言われている。彼の成功は、単に商売を大きくしたということだけでなく、錦の人々から人望をも得ているということでもある。つまり、戦後に初めて店を持ったよそ者であるのに、錦のために貢献し、その結果、錦の人々が彼に大きな信頼を寄せるようになった。商売を大きくし、金儲けをしたということだけでは「立派になった」とはみなされないのである。

「わたしは、昔、満州におりましてね。現在のマルハ大洋漁業、当時の林兼商店に勤めて、軍納ばっかりやってました。満州に十三年いたんです。」第二次大戦の末期、現在の中国東北部で、「現地召集」された。「兵隊にも行きました。戦車隊に入って、兵隊で終戦です。」

敗戦の混乱期に桐田は満州にいた。ソ連の占領によって、シベリア抑留という多くの日本兵の経験した敗戦の苦難を舐めるはずであった。しかし、「前の日に逃げました。中隊長に言うてね。友だちと。

現地の召集兵といっしょにね。そのまま潜ってしまいました。」逃亡兵となって、シベリア抑留を逃れた。

「逃亡兵ですのでね、早く帰ったらばれますしね。パスポートも持ってませんしね。それで、引き揚げ者のお手伝いを最後までしてました。」「援護局の局長に言うて、居住証明を貰い、最後の引き揚げ船で帰って来ました。昭和二十一年の十二月です。」

桐田は、明治四十四年、丹波の亀岡に生まれた。十三歳で大阪の魚屋へ丁稚奉公に出た。「わたし、学校を出てしません。十三の歳から丁稚奉公しましてね。行ったのが魚屋です。板店で、丁稚奉公から叩かれましてね。そこで兵隊検査までやってました。まるまる十二年間です。」丁稚奉公からのたたき上げで、魚屋としての腕は確かだと自負する。料理屋に奉公したのでなく、板店に奉公したということを強調する。まな板一枚で魚だけを扱う店で修行したのである。

明治末から大正という時期、義務教育を終わるとすぐに奉公に出るのが、当時の日本人の若者の多くがたどった経歴であった。桐田も、亀岡から近くの大都市である大阪へ出て、「板店の奉公」で手に職をつけようとしたのである。十二年間の奉公のあと、二十一歳で兵隊検査を受け、兵役の義務を終えて一人前となった。その後、林兼商店に入り、満州へ渡っていた。

「満州から引き揚げて帰ってね、当時本社が下関やったから、帰って来たという報告に行きました。昭和二十二年でした。」戦後の混乱は続いていた。引き揚げ者に仕事などあるはずはなかった。会社は、「『ご苦労やった。遊んどれよ』てなことです。『何かすることないんですか』と聞いても、『ない』」という答だけだった。

「生まれた所が丹波亀岡ですし、『京都に何かないか』と言うと、会社は、『そのうちに京都も考えよう』ということで、三ヶ月ほど遊んでました。」扱う品物がなかったから、仕事もなかった。

京都に会社が営業所を作ることになった。「どさくさで、荷受機関が作れませんでね。」戦後の流通は混乱していた。会社は京都の市場調査をすることにした。

昭和二十二年三月、桐田は京都へやって来た。「京都へ来ましても、仕事がないもんですし、毎日ごろごろしてました。市場調査と言われても、引き揚げて来たところですし、何にも分かりません。物資が何もないんです。闇物資が横行してました。まさか、マルハが闇をするわけにもいかんしね。」遊んでいてもしたかがないので、営業所長と相談し、「闇でもなんでもええやないか、ぼちぼちやろうやないか、ということなって、とりあえず闇にならないものを扱おう」ということになった。

「京都には品物が何もない。何か入れてやろう」というので中央

市場へ行ったが、戦争中の統制経済のあとには荷受機関が一つ残っているだけだった。「うちの会社が品物をぼちぼち送り出していても、うちが荷を受けるわけにいかん。それで、直売店を作って、そこで送ってきた荷物の少しでも売って、市民の人にちょっとでも喜んで貰える配給方法を考えたらどうか」ということになった。正規ルートで来るマルハの品物の一部を扱うのだから、「闇ではない、ということです。」

「京都市の経済課長とも相談すると、『そらええことや。やってくれ』ということでね。その直売店が今の大都漁業の前身です。」大都漁業は、桐田も参加している中央市場の魚の卸会社である。

昭和二十二年の秋、錦、北野、川端、七条に、三軒から五軒の直売店を作った。「その道その道に入ると、古い魚屋がどこにあるかすぐ分かりますしね。北野やったらここ、上京やったらこの人、七条はあの人が」と協力者を見つけていった。入ってくる荷物の三分の一を直売店でとり、残りの七割を正規ルートで流すことになった。

「市場から帰ってくるのが朝の七時頃ですけど、長蛇の列でした。夜中三時頃から並んでおいでになる。わたしらが市場に行く時分には、もうお客さんが並んだはる。なんとなあ、こんなに食料に不自由しておいでになる、と思いました。」

翌年の四月頃まで、この状態は続いた。「『あんたどこから来た

はる』と尋ねると、『わしは伏見』、『わしは深草』、『わしは山科』ということでね。『もっと直売店を作れ』と言われましてねえ。」京都の郊外からも、魚を求めて商人がやって来て列を作っていたのである。

三軒を七軒に増やしたが足らなかった。直売店の募集を始めて、「河原町の京都ホテルの所に事務所がありまして、直売店の希望者の皆さんに来ていただいて、人選しました。あまりええかげんな人にも頼めませんしねえ。」直売店は増えていった。「最後は三十五ヶ所でしたか。公設市場に地域の市場。大津の膳所まで行きました。」流通はまだ配給のままであった。要求のあるままに、直売所を増やしていった。

当然、「『マルハさん。何を考えておられるんです』と流通業者の方が言い始めはりました。」「『とにかく会社の命令でやっていて、京都市の方もやってくれと言うので』と説得して、結局は一年半ほど直売店を続けました。」「知らん間に、地所を固めていってたんですなあ。それが怖かったんでしょう。」当然、品物がある直売店が流行り、直売店でない地元の業者は圧迫を受けていた。

昭和二十三年に荷受機関を作ることになった。統制経済の解除後に一つの荷受機関しかなかったところへ、一度に七つの会社ができた。「これは京都市の政策でね。魚市株式会社、カネ庄、うちの大

都漁業、京栄水産、北海水産、京都水産株式会社、それにもう一つ何でしたか、一挙にできましてね。それぞれがしのぎを削ってね。」仲買も必要であった。「荷受機関だけではいかん、仲買を復活さそう、ということになった。もう一人仲買の人が入って、入札が始まり、配給でなしにね、そこで正規のルートに乗って、ふつうの商売ができるようになった。昭和二十四年からでした。」それまでは、闇市のような状態が続いていたのである。

桐田は品物を集めるために、各地へ出かけた。「昭和二十四年は、出張で日本中をまわってました。」マルハの傍系会社が全国の港にあり、引き揚げ者がその会社に入っていたから、かつての関係をたどると品物は入って来た。「仙台へ行っても、北海道へ行っても、名古屋へ行っても、鹿児島へ行っても、うちの会社があるし、直接の船はあるしで、不自由はしないんです。引き揚げて帰った人が、わたしが京都へ来ていたように、自分の故郷に帰って、マルハの下請けに入ってるんです。青森へ行けば青森の、下関なら下関の、長崎なら長崎のね。それで一年ほどは出張ばっかりでした。順調に、うちは荷受機関としての現在の基礎ができたんです。」

2）独立

「独立したのは昭和二十五年です。三十九歳の時やったかなあ。

会社にいても、出張要員で年中歩きまわって、家にいられないのではねえ。」自分で魚屋を始めようと考えた。正規のルートに乗って品物が流れ始めていたため、それまでの直売店は閉鎖され、すでに自主運営となっていた。

「一軒だけ不都合な店がありましてね。そこのけつ洗いもせないかんし。幸いや、そのけつ洗いをするのに辞めてやれ、と思いましてな。十六年きばったら定年の齢、それまでになんとかなるやろ、と決心しました。」

下関の本社へ出かけて、辞職願いを出した。「わたし、本社の人間ですので、京都で辞めさせるわけにいきませんのです。」人事課長に会い、社長に会って辞職を希望すると、引き留められた。「『使うてくれと頼みに来るのはいるけど、お前みたいに辞めさせてくれと頼みに来る奴があるか』と叱られました。」会社にいるままで自分の店を開いてもいいとも言われたが、「『温情主義はけっこうでございますけど、決心がつきません。とにかく他人の目がありますから』と言うてね。二股膏薬は嫌いやから」と会社に残ることを断った。「『あの店の借金があります。わたしが引き受けますから、あとの人を責めないでください。わたしが責任持って後始末をしますから』と言うて会社を辞めました。」「というので、錦へ出たのが昭和二十五年の八月からです。」

錦はまだ闇市の状態だった。「まだ闇なんかでね。錦の半分くらいはね。ふつうの品物はルートに乗っていましたけど、自由にはなってませんでした。わたしの行った年の暮れから自由になったんです。少しの差です。自由になったら何でも売れましたしねえ。」開店当時、「昔からの錦の人はこそこそと闇でね。段梯子の下に魚を隠したりでね。」

「直売店の時には迫害も受けました。その頃は闇市でしたし、入れ墨いれた人もおりましたしね。強い者の勝ちでした。」「殴り込みはなかったですけど。『品物まわせ』と言うてねえ。『あんた方にまわす品物と違う。お客さんに喜んで貰うためのものや。欲しかったら並んだらええやないか』てね。」「わたしら引き揚げ者で、満州にいたから、どっちかいうたらわたしらの方が強いです。『何言うてやがんだ』と言葉が荒い。『こいつは京都の奴とちがうな』というようなことでね。一人に対する分しか品物は渡さなんだ。」「お客さんが割り込んだら、怒りますしね。わたしも向こう意気が強かった。むちゃくちゃやったかしらんけど、怖いもんなかったです。」

昭和二十六年に「魚清」という会社を作った。高級品が統制をはずれて、そのはずれた部分で自由な商売ができるようになったのである。「今まで直売店で使っていた人と相談してね。最初に直売店

をお願いした人です。出町と、錦と、田中と、梅津と、もう一ヶ所、どこやったかいな。五人で始めたんです。正式に発足したのが二十六年です。」

「錦は、京都の商売人は、閉鎖的ですし排他的です。よそ者を入れようとしません。」直売店で商売をしていた時にはそれほどの抵抗はなかったが、個人で錦に入って自分の店を持つと、錦の人たちの排他性閉鎖性は強く感じられた。「『桐田なにするものぞ』てなとこですわ。『よそもんが来て、大きな商売しよって』てね。」

警察への密告もあった。「統制時代には、ずいぶん経済警察に引っ張られました。投書があるのです。あんまり投書があると、『桐田君ちょっと来てくれへんか』と呼ばれましてね。四、五回引っ張られました。『うちは正々堂々とやってるから、帳簿を見てください』と言うてね。売上日報があって、毎日会社に報告してましたから。」直売店でも妨害はあったのである。

直売店の時にあった抵抗は、個人の開店でさらに強まった。「その時分、よその店はやりたくてもできんでしょ。プライドが許さんのでしょうなあ。『どこの馬の骨か分からん奴の傘下に入れるか』ということでしょうなあ。わたしは、何かというと『あのよそ者が』ということでしたから。」

「わたしのやり方は、奉公していた時の親方に教えられたように、

押してきても押し返したらいかん、というのです。押し返したら必ず敵ができる。『押して来はっても、押されんようにしとれ。押し返したらいかれるし、頭上げたら頭叩きよる、背伸びしたら足引っ張りよる。要は自分に力を付けることや』と親方がよく言いました。若い時分に聞かされたことが身にしみていて、敵もできなかったんとちがいますか」と、たたき上げの時代に身につけた処世の哲学で、錦の反発に堪えたと言う。

桐田は、よそ者でありながら、錦の中心的人物となっていった。まず手がけたのは、錦小路の通りを覆うアーケードであった。「昭和二十七年でした。たしか日食があった。ぼろぼろのアーケードでした。いや、アーケードとちがってテントでした。その前はすだれでした。日食があって、破れたテントの穴から見えました。夏は涼しくていいけれどね、雨が降ったらお客さんが傘さして通らはる。商店街としてみっともないから、アーケード作ろういうことになって。」

桐田が、官庁をまわり、町内を説得してまわった。商店街としてアーケードを作ろうとしても、町内会がそれぞれの町の組織として別個にあり、町内が賛成しなければアーケードは作れなかった。商店街としての組織の背景には、それぞれの町の住民としての町内会が区域ごとにあり、町内会の同意が得られなければ「改革」は難し

かった。

桐田の店がある町内は、ようやく説得できた。「それまで、テントを猫釘で家に付けてました。最初は、アーケードの柱を建てさせないんです。『柱で店が狭くなる』、『うちに柱を建てるのはいや』、『樋はどこに付ける』と言うんです。それで、軒先を切らない、樋になる柱にする、というので、ようやくできました。」「結局はうちの町内だけでね。麩屋町と御幸町の間だけでした。西の方もいっしょにと言うたんですが、全部反対ですわ。はじめは、遠山さんも反対でした。」新しいことをしようとすると、錦の反応はいつも遅いと桐田は言う。

「その年の十二月、暮れにね、大雨でした。土砂降りでね。西の方へお客さんが行かない。皆東へ来て、東の方は魚が足らん。すべてのものが、足らなくなるほど売れました。それで、西の方も作ろうということになった。」目に見えてはじめて、ようやく動きだした。「京都の人は、石橋を叩いても渡らないですねえ。人が渡るのをじっと見ていて、人も渡ってはじめて、俺も渡ろうというのでね。」「わたしら、どっちか言うと、思い切りがええというか、損したら自分がしたらええ、責任は持ち合い、という気持ちでね。」京都は保守的なのである。

昭和三十三年、桐田は錦に三番目の店を持った。「富小路の店で

す。遠山さんの町内です。わたしの店、麩屋町と柳馬場に店があったんですけど、これが三番目です。麩屋町も柳馬場も借家でね。富小路だけがわたしの名前になってます。誰にもぜんぜん言わずに、誰が買ったかも分からんようにして、表を閉めたままで中を全部改造しました。」秘密裏に事を運ばないといけない雰囲気があった。新しいこと、目立つことは禁物である。

新しい店は、「大仙」という魚問屋の家であったが、貸家になっていたものである。「そこへ、共産党が入っていて、けつまくって出て行きよらん。大仙のおっさんとは心安くしてたんです。それが言うのに、『あれには困ってるのや。わしもええ齢になったから、あれを売って山科に土地を買うて、家建てて、そこへ行きたい。売ろうと思うのやけど、こいつがおるから売れん。こんな所に居るのはかなわん。商売もしてないし』と言うのです。『いくら要る』と聞いたら、『六百万円あったら、土地を買うて家を建てられる』と言う。昭和三十二年ですわ。『おっさん。わしに売ってくれ』と言うと、『あんたにやったら売る。けど、あとは知らんで』とね。『あとはまかしといてくれ。わしが話する』というので、当時の京都の府会議員であった有馬大五に話を持って行きました。」

「有馬大五というのをご存知ですか。山科のゴルフ場問題でくびになりましたわな。共産党を除名になりましたなあ。あの男です。

あれが共産党の親分でね。その子分が入ってましたんです。それで、『あの店をわしが買おうと思うのやが、あれをのけてくれ。仲へ入って話をしてくれ』と頼んだ。『あんたに百万円出すから、受けてくれ。何も言わんから、百万円出すから、やってくれ』と。そのままおいておいたら、『赤旗を振る』と言うてるんです。錦でそんなことさせられしませんわね。」

当時の百万円というと相当の金額である。「立ち退き料と、有馬大五への手数料ですわね。魚問屋のおっさんに六百万と、有馬に百万円、あわせて七百万でした。銀行から七百万円借りて、わたしの名前を出さずにあの家を直してね。三十三年にぱっと開店しました。立派な店ができてました。錦の人はびっくりしましたで。」

麩屋町の店は大口の客、細かいものは柳馬場の店、中間の旅館などは富小路の店、というように、客の規模と業種で得意先を分けている。「もともと薄利多売主義でね。広告もしません。新しく店を持った人は、どこで聞いてきはるのか、必ずうちへ来はります。錦へ来て、『魚清さんてどこです』、『大将のいはる店はどこです』てね。場所と仕事に応じて、柳馬場、富小路、麩屋町に振り分けます。」店を三軒持って、現在の商売ができるようになった。

昭和三十四年に新しい食品条例ができた。「冷凍機と冷蔵庫を持たないことには魚屋ができなくなったんです。新しい店にはちゃん

と設備ができてある。新しい店を作る時、大阪から神戸の百貨店をまわって、どないしたらええのか見てまわりました。うちがはじめてではないですか。京都中の魚屋さんが皆見にきはりました。『桐田めがやりやがったな』というところですわ。」時代の先を読んで三番目の新しい店を準備していたのである。

この食品条例ができるまで、魚屋は注文のあるものだけを買っていた。「それまでは冷蔵庫一つなかったです。その日のうちにその日に売るのですから。錦の人は売れるだけしか買うて来ません。注文以外のものは買うて来やしません。もともと消極的でしたなあ。」保守的で消極的な錦は古い商売の仕方を守っていたが、古い商売の仕方では魚屋が続けていけなくなった。桐田は新しい変化をいち早くつかんで準備し、積極的に売り込む商売へと転換していった。

錦のために働かないと、自分の商売も大きくはならないと桐田は言う。「わたしら自分の店も可愛いけど、錦自体を愛する気持ちを持って、錦を大きくしないとあきません。錦をよくしないと、自分も具合がわるい。」錦の外にも店を持って大きな商売をしていても、錦とともに成長することは大事なことであると言う。

昭和三十三年、阪急電車が大阪の梅田から四条大宮までであったところ、四条河原町まで乗り入れる計画を発表した。「あの時、四条通りから各商店街は皆が反対しました。一晩中寝んと赤鉢巻で反

対でした。うちはね、錦はね、賛成しよう、と言うてね。『茨木、山崎、そのほかの沿線の方がこっちへ来る。今までは大宮で止まってた。今度はここまで延びて来る。錦に必ずプラスになる。阪急さんがおやりになって、こっちはお客さんに来て貰えるのだからプラスになる。河原町に相当の数の人が来る。京都市内にとってもプラスになる。人が来んのに発展があるか。それも、上を通らずに下を通る。こんな嬉しいことはない。賛成しようやないか』ということです。」

「四条商店街は反対。堀川も反対。京極も反対。寺町も反対。『それで錦だけが賛成してもいいのか』という慎重論もありました。」「錦は錦や、よそは放っとけ」と桐田は主張した。それでも「地下鉄が来て、商店街を作ったら、錦が食われる」という反対があった。京都全体が、新しいことへの対応が遅い。

賛成派は臨時総会を開いて多数決に持ち込んだ。「わしらの方にはグループがございますからね。『おい。今度の場合、賛成しろよ』『はい分かりました』という具合でね。総会というのは半分も来たら上等で、臨時の総会でしたら三分の一くらいしか来ませんしね。すぐ決まります。」この頃にはすでに、桐田を支持するグループが錦の中にできていた。

市役所が各商店街の代表を呼び出して、順番に賛成か反対かを問

うた。「新聞社も皆来てましたしね。阪急のえらいさん、市のえらいさん、議員さんも皆いましてね。『四条繁栄会さん入って下さい』『河原町さん入って下さい』『次は寺町さん』と、呼んだ時間はいっしょで、待たしといて順番に呼び入れる。うちは、遠山さんとわたしが代表で行って、『錦は賛成します』と言うてね。」よその商店街が反対するなかで、錦だけが賛成した。「それで、阪急さんはものすごく喜ばれましてね。『錦は、いの一番に賛成してくれた』てね。」錦が賛成しても計画がすぐに動いた訳ではない。「三十三年はそういうトラブルが続きました。市は、市民の声を聞かないといけないというので、大事を踏んだんです。ようよう決まったのが三十四年でした。」

「遠山さんとは何かうまが合うんです」と、戦後の錦のリーダーであるカネ正の遠山政次を高く評価する。錦市場商店振興組合も遠山と作った。「商店振興組合を作ったのは、京都で二番目か三番目かです。早い方です。水産物協同組合、これもわたしが作った。と言うと語弊があるけど、まあわたしです。ずばり言うてね。」新しい動きには、いつも桐田が関わった。「市会議員で川中治郎というのがいましてね。民社党の。姻戚関係になるんです。あれが『どうでも組合作りなはれ』と言うてね。振興組合も、『桐田君。作れよ』と言うて来てね。」それ以来、役員を二十七年間務めている。

「遠山さんが錦に入って来て五十何年ですか。わたしが来た時で二十三年目とか言うたはりました。昔は遠山さんもずいぶん苦労しはりましてね。わたしよりも苦労したはるのとちがいますか。」錦に入って、溶け込んで成功するのは本当に難しいと言う。「今では副理事長とか言うてまつりあげられて、組合の仕事してますけど、昔のこと考えたら馬鹿らしいですよ。排他的で、こんないじめられた所で、何でこんなことをせないかんのか、と思うことがありますねえ。」この苦労も、店が栄えるためには錦が繁栄しなければならないからだと言う。

錦には、振興組合ができる前、錦栄会という組織があった。「それは任意組合であってね。その中に、魚屋さんばっかりで作った錦盛会というのがある。今年で六十七年ですか。」「錦盛会と水産組合とは別個にしてあります。ほとんどの方が入ってられます。懇親会で遊びに行くのと、組合の仕事とは別個のものにしています」と組織の役割は分けてある。「錦盛会は、遊びに行くのと、取引関係との交流のために残してあります。戦前からの、先祖が作ってくれた遺産ですしね。これは絶やしたらいかん。そのままお守りして、この名前は消したらいかん。錦が盛える会ですしね。」錦の伝統として残してある。「錦栄会も、振興組合のほかに残してます。錦青年部というのが錦栄会の中にあって、みこしやらの関係の仕事があ

ります。わたしは錦栄会の副理事長をしてる。『どっちもやって貰わんならん』と言われましてね。」「組合の方は、官庁関係、市役所とか府庁とかの交渉です。組合は組合の仕事、交流は交流と分けてあります。」商売に関わる部分と人的交流の部分とを分けて組織しているのである。

阪急電車の延長工事が完成したのが昭和三十七年である。「わたしも交渉委員の一人でした。遠山さんと組合の事務長とね。阪急さんの課長さん、担当重役の人と懇意になりましてね。井水対策をやりました。工事で井戸が出んようになったのです。」「阪急は全部で二十四ヶ所の井戸を掘りました。錦には三ヶ所掘りましてね。錦の場合は、あとあと使えるように本工事にしてくださいと頼みました。強硬にお願いしたんです。『錦さんにはお世話になってるし、鋭意いたしましょう』と阪急さんはね。『あんたとこが撤去したあと、市が残してもかまわんというだけの本工事をしておいて貰わないと、仮設ではかなわん』と頼みました。『費用がかかるなら負担してもかまわん』とも言いました。阪急さんは、『錦さんのためなら、仮設と本工事では金額が違うてもやりましょう』と言うてくれはりまして」と、錦だけが阪急の延長に一番に賛成したことの結果がうまく出たという。「阪急さんに作って貰って、阪急も撤去しなかったら具合が悪いですからね。物品として残っているから。帳簿

を消さないといけない、ということで、三十万円で分けて貰いました。三ヶ所で三十万でした。」安い買い物であった。

「今でも井戸水は出てます。どんどん出てます。この水のおかげで錦は発展したんですわ。その交渉を全部わたしが引き受けた。阪急とのおつきあいは三年間でした。いろいろお金も使いましたけど、きちっとやってくれました。」「阪急が、『市の方の許可は組合さんにまかせますよ』と言うので、わたしがやりました。川中治郎がいますからね。一席設けてね、『今度こうしようと思うのやけど』てね。『阪急が引き揚げた場合、この水が使えなくなったら錦はあかん。この水を使えるようにするのはお前の腕にかかってる。頼む』と言うてね。」この交渉で、桐田の錦における評価は定まっていった。

阪急との交渉にあたっていた頃、錦のある人から「桐田。いつ尻尾を出す。わしは見てるのやが、お前はなかなか尻尾出さんなあ」と言われた。「『わしは尻尾を持ってない』と言うと、『錦の役員には皆尻尾が付いてるのや』と言うたねえ。『悪いけど、おっさんが死ぬまでにわしが尻尾出したら、わしが先に死にます』と言うたった。『人に尻尾つかまれるようなことを、わしはしたことがない。言いたいこと言うかわりに、することはきちっとします。まかして下さい。わしはとことんやります』と言うたら、『あほちゃうか』

と言われましたで。」

錦に三番目の店を出し、阪急との交渉にあたっている頃から、錦の人たちの間に信用ができてきた。「あれから店も大きくなってね。三十三年頃からですかねえ。ものすごう変わりました」と桐田は言う。「わたしも油がのりきった頃で、五十歳前後でしたかねえ。やっぱり、人に信用されるようにならんといかん。『あの人が』と言われるようになったら一人前ですわね。『あいつが』と言われるようになったらいけまへん。『あの人やったらまちがいない』と言われるようになったら一人前ではないですか。そのかわり、うっかりとしたことは言えません。」「六十歳をすぎた頃から、七十、八十のおじいちゃんやおばあちゃんが相談にみえます。息子さんに相談せんと、わしとこへ相談にきはります。財産の分配とか、保証人になってほしいとかね。」

昭和五十年頃、大手スーパーのダイエーが錦への進出を計画して、土地を買い占めにかかった。「結束しましてねえ。土地を買い占めにかかってる場所のど真ん中に土地を買いましてね。通りへ抜けられんようにしたんです。ダイエーが来るというのでね。いつも矢面に立つのが遠山さん。ラッパ吹いて走るのが遠山さん。わたしはいつも口説きですわ。コンビがええというのかねえ。」桐田と遠山の指導力で錦を引っ張った。一夜にして何千万という金が集まった。

「『桐田はんが言わはったら、何がなんでも付いて行く』と言うてくれるのが十四、五人います。『あのおっさんにまかしといたらまちがいない。あのおっさんの言うことはまちがいない』と言うて付いて来てくれはります。」買い取った土地は、現在、錦全体の駐車場と冷蔵庫になっている。

3）店の主人

店は皆にまかせてある。「この頃は、わたしが若い者に月給を入れてるというよりも、若い者がわたしに月給を呉れてると思うてます。わしよりよけいに持って行きますがな、若い者が。去年なんか、若い者がわたしの倍くらいボーナス持って行きました。皆よろこんでくれます。『すまんことで』、『ぎょうさん貰うて』と礼を言いにきます。『お前らきばったさかい当たり前や』と言うてます。」主人だからと、「こっちが先に取ったらいかんのです。」

「会社は、若い者が勝手にやってくれます。放っといたらよろしい。じっと見てたらええのとちがいますか。まちがいのないようにね。お客さんさえお守りしてくれたらええのやから。販路は確保してありますし、商売は波に乗ってますしね。息子や若い者が悪いことをしないかぎり、順調にいくのとちがいますか。また、悪いことするような奴はおりません。」商売の自信は働いている者への信頼

となっている。

店に「わたしが出て行かなくても、勝手に皆が商売してくれます。」働きぶりは、「雁首見て、目見てたら、分かります。」「話をしてる時、横向いたら、わたし怒ります。『おいこら。お前何考えてる』てね。」商売も、「買うた品物は売らないかん、と言うて責任を持たせてます。だいたいは、細かい物を買う者、青い物を買う者、沖の物を買う者、マグロを買う者というように分けてます。」商売の仕方が「皆違いますからね、息子の顔といっしょで。」

従業員は三十四人である。「全部が子飼いです。いちばん古いので二十八年います。わたしが商売を始めた時からのが三人います。」「二十年以上勤めているのが十七人、十五年以上いるのは半分以上」になる。「うちの子は終始一貫変わりません。『わたしはあんたとこで勤めるために生まれてきたみたいなもんや。おやっさんお願いします』と言うんです。」

従業員は、福井県、和歌山県、新潟県と各地からやって来る。「学校から言うて来ますし、うちの息子を頼む、と親御さんが言うても来はります。」「来て貰う時、『必ず親御さんもいっしょに来て下さい』と言います。わたしが迎えに行きます。本人を目の前に、得心がいくまで話をします。『こういう店でよかったらうちでお預かりしましょう。そのかわりこれこれの条件をうちは付けます』と

前もってはっきりさせておきます。」

従業員の教育は、「五年おろうと七年おろうと、自分勝手なことをする奴にはぴしっと言います。呼びつけましてね、『あんたこの頃自分のやってることをまともやと思うとるのか。人間一人というて一人ではない。うちは、兄貴から預かるか、親から預かるか、あんたを預かってるのや。嫌だったらいつでも辞めなさい。そういう人はうちでは必要ない』とはっきり言います。」

若い従業員は住み込みである。「今は四人います。富小路の店で寝てます。若い子のことですから、酒も飲むし、夜遊びもします。けど、門限には帰って来ます。けじめは付けます。」

「この間、一人が結婚しました。仲人はほとんどがわたしです。所帯を持てるだけの月給をやって、独立させます。こうなったら、もう出て行きません。」店は、親子のように家族的であるという。

「二十五年いたのが、このあいだ店を一軒持ちました。『ええ店があるし、おやっさん、辞めさせてくれ』と言うて来てね。」分家というわけではない。「のれん分けは今はないです。そのかわり、退職金積立制度があって、店を持とうと思うても案外不自由しません。『出て行くのなら、計算しましょう』というので、退職金やらなんやで、おおかた四、五百万になりますやろ。」

これまでに独立した者が三人いる。「一人前以上にやってます。

そこの地区で役員もしてますしね。亀岡に一人、右京に一人、もう一人は南の方でね。『錦の魚清さんで働いてたのやったらかたい』と言うて貰うてね。『魚清の出やったら安心して買える』というので、かえってＰＲしてくれてます。」よい従業員を育てると、結局は自分の店に跳ね返ってくる。

「桐田さんとこ、なんでこんなによく店員が続くのや」とよその店の主人が羨ましがる。従業員に厳しいだけではなく、主人の方も、従業員に対して、しめしの付かないことをしてはいけない。「わたしは、ばくちしまへん、ゴルフしまへん、競馬やりまへん。毎日、魚で勝負したらよろし。」商売を一生懸命することが従業員に対するしめしとなる。「ゴルフも二十年ほど前、やれやれと勧められましたけど、若い者が働いてるのに、おやじがゴルフバッグもって遊びに行く、という恰好の悪いことできまへん。そんな思い上がったこと嫌いです。」店の若い者にしても、「『おやじ、今日はゴルフ行きよった。ええかげんにしといたれ』てなもんですわなあ。」主人が遊んでいたら、従業員に影響する。

主人の態度が「若い者にあたります。これ、いちばん肝心なこと」だと言う。「大きな何百人も使うような会社は別ですけど、わたしらみたいな魚屋商売してて、ええかっこしてゴルフでもおへん。」小さい店では、主人の姿が従業員に直接見えている。「見てますが

な。わたしは絶対ゴルフはやるまい、と思うてね。二十年前、上加茂ゴルフ場ができた時、支配人に友だちがいましてね、入ったらどうやと言うてくれたけど、わしは玉ころがしなんかせん、と言いました。」

「大きくなろうと思うたら、辛抱です。」「じみちに辛抱して、努力しないとあきません。バーへ行ったり、お茶屋へ行ったり、店を放っぱらかしてゴルフへ行ったりでね、お金を使い過ぎはりますのや。店の子が見て、おもしろいことありませんがな」と言う。「一生懸命汗水たらして働いたからというても、自分一人で大きくなったんとちがいますやろ。若い者の努力もあり、若い者の援助があって、今日ができてるんですからね。若い者を放っといておやじがゴルフ行くというのはねえ。」

従業員への慰問会を年に二回する。「今までは夏に海水浴へ連れて行ってたんです。バス二台でね。この頃、お客さんのシステムが変わって、皆がいっしょに休みをとれないんです。料理屋さんと鮨屋さんがものすごく増えましてね。町なかの鮨屋さんと、離れた所にある鮨屋さんと、経営状態が違うんです。それで、現金を従業員の家族ごとにあてがいましてね。二泊三日、四泊五日と、交代で休みをとって、子ども連れで行かせます。旅費と泊まり賃は会社で見てやって、あとの飲んだり食うたりは自分もちです。皆勝手に当番

作って順番に休んでます。けっこう皆喜んで行きます。」

新年会は土曜日の夜にある。「店に関係ないですから。日曜は休みですし。」「日曜日は当番の者だけが店に出てきます。お得意さんには日曜に休まない料理屋さんがありますしね。」交代で休みをとって、日曜日にも店は休むことはない。

新年宴会には、得意先の料理屋を使う。「お得意さんに対して、少しは返さんとね。何やかやと儲けさせないといけません。ぜひ使うてくださいと頼みに来るとこもあるしね。」株主総会も得意先の料理屋でする。「お客さんは儲けさすもんであって、こっちが先に儲けたらいかん。薄利多売ですしね、そんなに儲ける必要もない。余分に儲けたら、余分にいらんことしますさかいね。欲が出て。」

「がりがりして儲けるということは、抜けてるからがりがりして儲けないといかんのです。どこか抜けてるんですわ。どこかにロスがある。」無駄があるからよけいに儲けようとすると言う。「うちはおかげさんで、お婆ちゃんがしっかりしてます。」よけいに使うこともない。「月給は、『はい、お婆ちゃん』と言うて手渡して、わたしは封を開けたことがない。三十何年間、月給袋の封切ったことおへん。」家も錦には持たずに、錦は店だけでにして、通勤している。

錦では、女の人が店を手伝い、主人といっしょに商売する。主人

を「旦那さん」と呼ばせる。「わたしは、あの考え方、どうも臭うて。」「従業員が一人しかいないのにね。店の子、女店員が二人か三人しかいないのに、『うちの旦那さんが』てね。『旦那はんてどんな人や』とわたしは言うんですわ。小さな店と比べたら、わたしらは大旦那さんですわなあ。そんなことは思うたこともないし、そんな身分とはちがいます。」「昔は、旦那さんいうのは、大旦那さんのことを言うた。わたしらの年輩の者で、今、旦那はんと言えるような者は一人もおらんです。旦那はんというのは、人集めて、働いて貰うてね、物を与えてる方です。働かして月給やっとるのは、旦那はんとはちがう。働かさんと物をやるのが旦那はんです。」

たかが小商いの「おやじ」だと言う。従業員は「おやっさん」と桐田を呼ぶ。「『おやっさん』『社長』です。それ以外は、わたし怒りますねん。『おやじでええ。親代りなのやから』とね。お互い、それだけの信頼感がなかったらいかんのです。」「遠山さんにも言います。『何が旦那はんや。漬けもん屋のおやじやないか』てね。」錦には「そういう古いとこが残っているのです。」

「老舗と言うて、たいした老舗はおへん」と、錦が古さを誇ろうとすることに批判的でもある。「あの雰囲気が嫌いでね。何と言うか、思い上がった気持ちというのかねえ。わたしにもそういうとこがあるかもしれんけど、あれが嫌いでね。皆さんのおかげでここま

でになった、という気持ちをいつも持ってないと。」「一人でできることとちがいます。野郎一人ですることというと、みみっちいことです。皆の力でこそできることなんです。店の者、外のお友だち、皆の力でね。けっして一人で大きくなったとは思いません。」自分に対しても、錦が古さを誇ることに通じる自惚れを戒める。

京都の「老舗」によくあることなのだが、「一見(いちげん)の客」、初めての客、を断る店がある。「あります。錦にもあります。あまり言うとなんですけど、ほんまに鼻持ちならんことがある」と「老舗」意識を批判する。「わたしらね、『皆から大きくして貰うた。皆のおかげで今日がある』という気持ちを持たないとね。それさえ持ったら、思い上がる気持ちも、旦那はんと言うのも、出てこないと思います。供給する人、需要する人、いろいろあってはじめて世の中の仕組みができてるのとちがいますか。『うちは売ってやってる』『面倒みたってる』というような魚屋がおります。そういうところは、そのかわり、いつまでたっても発展しません。」

料理屋の板場の職人にも古いしきたりが残っている。仕入れに来る職人にリベートを渡す店がある。職人にもそれを当然のことのように要求する者がいる。「板場が代わる度に、『これもっていけ』とお上手しますわねえ。あんな商売はええかげんなものと思います。板場に儲けさせるのやったら、その親方に儲けさせた方がええ。う

ちは、板場はんが来ても買い物させません。はじめて来はった時には、『おやじに来て貰うてくれ』と言います。板場が、『わたしがまかされてます』と言いますわな。まかされてるということは、リベートを呉れということです。『うちは出せません』と断ります。『よそでは貰うた』と言うんです。『そこへ行かはったらよろしい。うちは出せません』と言います。もってのほかや。『そんな人には、わたしとこは売りまへん』てね。『たくさん買いますがな』と言いますがな。『うちは別や。うちの帳面にはそんなんを付ける帳面がない』と言います。『変わってますなあ』と言いいますわ。『うちは変わってます』とはっきり断ります。」

「取引しませんやろ。そうすると、親方から電話がかかってくる。『なんで売ってくれへんのや。信用がないのか』てね。『信用はございますが、ちょっと腹にはまりまへん』と言います。『信用があるのなら、売ってやったらええやないか』と言わはります。『お宅のやり方がちょっと気に入りませんので売れまへん』と言いますのや。しばらくして、値を訊ねてくる。『えらい安い。なんでそんなに安いのや、お前とこは』てね。『うちはこれでよろしい』と答えます。」

そういう職人は、しばらくすると、きまっていなくなる。「すぐばれますわなあ。そんなことして売ってると、板場にはいくらか金

をやって、それで魚を高く売ってるのやからね。結局、金を払わん、ということになる。少なくとも、支払いを延ばさはります。『板場と組んでぐるになってたな』と言われますわなあ。あとで喧嘩するのやったら、はじめにしといたらよろしい。」

「そらね、盆暮れの小遣いはね、こっちの気持ちですからね。お店にはお中元とお歳暮を送ります。これは当然です。また、一生懸命やってくれたら、その板場に対する気持ちは渡します。それ以外はぜったいに渡しません。」「残ってますのや。古いとこがねえ。」

京都の北、鞍馬に「歓喜園」というホテルを持っている。「昭和四十五年、万博の年に買いました。鞍馬寺の管長が、本堂を立て直すのに金が要るから、と言うのでね。わたしお寺の相談役でした。『あんたしかやって貰う人がない。面倒見てくれ』と言わはるので引き受けました。赤字です。あんまり儲からしません。」経営は直接にはせず、専門家にまかせてある。「魚屋とは経営がちがいます。専門家がおりますし、信頼してます。その男に、『悪いことしたら、ブタ箱行きやぞ』と言うてます。わたしは口が悪い。『俺を裏切ったら、世の中で息ができんようにしてやる』てね。はじめから脅してあります。『ちゃんとしてくれたら、一生懸命やってくれたら、お前にやる』てね。」毎月の経理報告を見るだけで、ホテルへは出て行かない。

このホテルの従業員にも、「『ぜったいにたかったらいかん』と言うてます。『俺の顔があるから、買い物をする店にはぜったいにたかるな。金が欲しかったら、俺のとこへ言うて来い。よそへ行って言うな。俺の金をやる』と言うてます。『おまえがよそでたかるということは、俺がたかってることになる』と言いきかしてます。』

京都にはこういう「古い」やり方が多く残っている。「とくに組合ね。何々組合というのがたくさんあります。奉賀帳みたいなものをもって来よってね、たかりが多いのです。『これこれですので、お宅の旦那も一つ』という具合にね。ぜんぜん取引がないんですよ。取引がないのに、奉賀帳をもって来よる。取らな損、貰わな損、というのでね。それで集めた金で組合の総会を、大きい顔してやりよる。あれは、ちょっとまちがってると思いますなあ。金を貰わないとやれんような会は止めたらええ。」

古くからある錦盛会もこういう組合だという。「会費が二千円です。賛助会員というのがあります。中央市場の出入りの業者が賛助会員でね、月に二千円、年で二万四千円です。年に一回総会をするんです。二万四千円から二万五千円の料理にお土産付けてね。そうしたら、持って来るんです。こっちから『呉れ』とは言わしまへん。この頃は、競争で持って来る。むこうで申し合わせてね。『おまえとこなんぼ出す。おれとこは五千円。おまえとこはたくさん買い物

してるし一万円出せよ』というようにね。勝手に決めてね。三十万も四十万も持って来る。むこうは経費で落ちます。うちはうちで出してるから、むこうは余分にその時に入ります。そうすると、もう一つ返さんならん。多い目に返します。それで、錦盛会は得、ということになる。『飲ませて貰うて、お土産貰うて帰る。錦盛会は積立貯金してるのといっしょや』とこうなる。」

「『よそはどうや』と聞くと、『よそは取るだけ取って呼んでくれない。錦だけは呼んでくれはる。錦にはいくら持って行ってもかまへん』とね。持って行ってもかまへんはずです。むこうさんは経費で落としてるのですから。自分の帳簿は痛むことないのですから。うちのは得です。そうすると、うちも入れて、わたしとこも入れて、この会に入らんがために、魅力があるから、よけいに買い物してくれはる勘定ですわ。」

魚清の株主総会も同じようにしている。「うちの会社、はじめは五人でした。中央市場の株主さんが入ってね。それが今は二十二人です。魚清と取引したいがために、株主にしてくれ、と言うて来はります。わずか二十万円ですけどね。買い物が大きいから、まあしょうがない、と言うてね。株を持たせたら、配当をやらんならん。うちに入った以上は、たくさん買い物してくれ、というのでなく、『お宅がいかに良心的にうちの品物を売るか。うちの代わりに荷受

から買い物してくれるか。うちの代行や。売ったらええ、儲けたらええ、というのでなく、魚清の代行で品物を買うという気持ちで商売するのなら株主になってくれ』と言います。」「皆さん承知してくれはりましてね。魚清が品物を取るまでは、よそに手を出させないようにしてくれます。『一銭でも安い品物は魚清に売ったらええ』という気持ちを持って貰うことになってます。」

「ここまで来るには、苦労しました」と桐田は言う。「仲買の方のおかげさんです。年に一回かならず仲買さんを呼んで懇親会をします。喜んで来てくれはりますし、喜んで協力してくれはります。」

魚清の「おかげで」延びた、大きくなった、という仲買がいる。だが、桐田は、「わたしらにしたら、皆さんのおかげ、会社のおかげだと。わたし自身は会社のため」と思ってやってきたと言う。

4）家族

三人の子供は中国で生まれた。「中国には十三年間いました。結婚する前からいて、結婚してからも行きました。昭和十五年に結婚して、また行ったんです。子供は三人で、一人はハイラーテンで生まれました。ソ満国境です。一人はハルピンで、もう一人は白城市です。勤め先の出張所、営業所が変わる度に、転々としました。そこへ行っては工場を作りました。お婆ちゃんが苦労してますねん。

一番下の子は負うて日本へ帰って来ました。」

家は錦には持たない。「わたし、錦に住むのが嫌いでね。仕事場だけです。」奥さんには、戦後の直売店の頃には帳簿つけを手伝って貰ったこともあったが、それだけだという。

京都の西の方にある円町に住んでいたが、十二年ほど前に現在の嵐山に移った。「円町は方角がええんです。錦がちょうど巽の方角にあたります。方角を選んで、こっちへ来ました。」商売には縁起のよい方角が大事である。円町の家では、「うちの息子が嫁さんを貰うのにちょっと狭い」と思って嵐山に引っ越した。ところが、今は二人きりである。「兄ぼうずが富小路にいます。うちの家内の兄貴が住んでた家にね。そこのお婆ちゃんが具合が悪くなって、その家を出ましてね。そこへ留守番に入りました。『おっちゃんの代わりに錦に行かんならん』と言うてね。この大きな家に、お婆ちゃんと二人きりです。もったいないことです」と言う。二番目の子供である長女は、近くに嫁に行っている。次男は隣に住んでいる。

長男が嫁を貰う時、「『嫁さんぐらいはわしの好きな人を貰わせてくれ』と言いますので、『好きなんを貰え』と言いました。こっちにしろ、と言うたら反発しますやろ。『おまえが責任を持て』てね。しょうがおへんがな。老いては子に従え、ということがありますからねえ。」

店を継ぐについても、子供には何も言わなかった。「継ぐのがいや、とは言いませんでした。出て行ってもかまわないと言うてあります。うちには若い衆がたくさんいて、息子よりも頼りになる人がいます。」わざわざ息子に頼んで跡を継いで貰うことはないと言うでのある。息子の父親に対する不満は、「『これ以上は店を増やさないでくれ。面倒をみきれない』と言います。わたしは商売が好きで、もっと増やしたいとも思いますのやが。息子は、『増やすな』と言います。」

「わしはほんまにけっこうな男です」と言う。「どこに魅力があるのかねえ。けちなくせに、人からは腹の太い男やと思われてます。『あのおっさんに頼んだら何でもやってくれる』と言うてくれはってねえ。太っ腹に見えますのかなあ」と信用を集めていることを喜ぶ。

家も「さずかりもの」と言う。「嫁はんといっしょで、さずかりものです。背伸びしたらあきまへん。」「もうちょっと小さい家でよかった。息子たちがいっしょに住むというので大きい家にしたのやがね。結局はいっしょに住まんようになった。」「もう一軒はどうしてでも店を作ろうと思うてます。隣の次男坊のをね。そうしたら、次男坊も隣から出て行きますのやろなあ。お婆ちゃんと二人きりですわ。この家ももういりませんし、また売ってしもたらええ。」

前庭のむこうに嵐山の山が見え、後ろの方には、はるかに愛宕山が見える。

休暇を年に十日とって、海外旅行によく出かける。海外に出ると痛風が出る。「十五年ほど前から出てます。贅沢病やと言われてます。最初はアメリカへ行った時でね。ニューヨークからワシントン、ずっとまわってね、最後のハワイで出ました。足をくじいたと思うた。気が付きませんでねえ。その頃は、痛風てな病気は日本になかった。その後、東南アジアへ行った時、バリ島で出ました。日赤の関係で行ってたので、お医者さんがいっしょでね。はっきり痛風ということがわかった。うちのお婆ちゃんがいっしょでね。皆さんが観光旅行で出てはる間、ホテルで寝てました。三日間。お婆ちゃがいたから帰ってこられました。」いざとなると、奥さんが頼りである。

日赤の常任理事をしているので、その関係で毎年一回は海外へ行く。「今年は、サンフランシスコ、ロスアンジェルス、メキシコまで行ってきましてね。グランドキャニオン、ヨセミテへずっとまわってきました。言葉が分からんから、往生します」と言う。「台湾やったら、長いこと向こうへ行ってたから、支那語は分かります。向こうへ行ったら、思い出しますのやねえ。テレビを見ても分かるし、人に会うと言葉がつぎつぎと出てきます。昔、中国で商売してた関係ですなあ」と昔を懐かしむ。

闇市同然の錦に来た時、魚屋の丁稚奉公をした者から見れば、「ろくな魚切ってる人がない、我流でやってる。この錦の商売の中でなら、やっていける」と思ったという。「これならやれる、と会社を辞めたのが運がよかったんです」と当時を振り返る。錦の人は「会社にいた人間に何ができる。荷受機関にいた者が商売やって」と思っていたにちがいないという。

ある時、映画の撮影で魚を切るところを撮りたいと言って来た。「その時、わたしはじめて包丁もってね、さしみにしたんです。皆びっくりしよった。『桐田はん、あんた何者や。魚を切らしたら一人前。店は大きくする。何やってもすることがあたる。怖い人や』とびっくりしてましたで。」

「今さら、わたしが言うと、おかしいんです。自慢話になります。」「言わんほうがよろしい。人さんに勝手に想像させておくほうがね。お店へ来て貰って、見て貰ったら分かることです。自分から言わんでもね」と、半生の歴史を締めくくった。

第二部　女たち

4.男が見る女の世界---二代目の女性像

「ぼくも古いのかも分からんけど、お母はんの力というのは偉大です」と、カク正の二代目である和義は言う。

近頃、大晦日の錦は早くに店を閉めてしまう。「昔は、『除夜の鐘を聞くまでは』と言うてましたし、除夜の鐘を聞いても客でいっぱいでした。」「下手したら、店を仕舞うのは朝の四時でした。それが、何代も続いてました。近頃何であんな早くに店を閉められるのか。ええ調子やなあ、と思うてました。」「おもしろいことに気が付きましたんや。何やと思うわはります。文化が変わった、てそんなんと違う。紅白歌合戦ですねん。」「アルバイトの学生たちが、紅白歌合戦が始まると、お客さんどころやない。もじもじして、テレビを店に出しとかんならん。紅白歌合戦ももう過渡期に来てるけど、あれがはしりの間は、音楽のもとでしたやろ。エスカレートしてだいぶ変わってきたけどねえ。あれですのや、錦の大晦日を変えたのは。」「何年も気が付かなんだ。『おかしいなあ。だんだん早う寝んならんけど、ええ調子やなあ』と思うてました。」大晦日の買い物客の動きが変わってしまったのである。

「正月の献立を誰が考えはるのです。奥さんですやろ。自分も紅白歌合戦見たかったら、それまでに正月の用意を済ましてしまわんならん。これですのや。」「お母はんの力」が錦の大晦日を変えて

しまったのである。「もっともね、買物が上手にならはりました。それでも、気持ちはあっても、きっかけがないとね。そのきっかけが紅白歌合戦です。いかに女性が強いか、ということですわ。」紅白歌合戦の人気をきっかけにして、にぎわうはずの歳の暮れの錦が早仕舞いできるようになった。伝統の錦の大晦日は、女性がテレビの人気番組を見たいために、変わってしまったと和義は言う。

商売でも女性の力は強い。「わたしら、大学で習うた経営というのは、事務所がすっきりしてる、とか、いくら大きな店でもじじむさいところは将来性がない、とかでした。」実際は違う。「うちのお母さんが言うてました。集金に行っても、『ご主人の言うてはることと奥さんの言うてはることと、どっちが本当かと言うと、奥さんの方が本当や。女の人はやっぱり違う。現場をよく知ってはる』てね。ご主人との社交辞令はあってもね、内容はやはり奥さんがしっかり握ったはる、ということになります。」

和義の友人である中小企業をみても、奥さんの力は強い。「錦でも、奥さんがしっかりしてる店は伸びる。家具の街の夷川でもそうです。お母はんが切れる人かどうかで決まる。男が少々ぼさっとしててもね。」けれども、「女の人がいくら切れるというても、京都の女の人はあまり表へは出はりません。上手にもっていかはる。芯のしっかりした女の人やね。」男を押しのけてまで前へ出て来るこ

とはない。「表では黙ってて、後ろでつねらはりますねん。怖いです。ほんまに。」裏では女が家を握っている。

表の商売は男のものである。「ほんとうの商い、表だった社会的な商いは、わたしら男がやってる。商いを守っていく方は女の人です。家の守りが大事ですから。守っていくというのは、商売が大きくなるほど大変です。」

「組織になると話は別です。女の人はいらんわねえ。昔の商いは、組織を作ることをよしとしなかった。組織を作ったら、老舗が老舗とは言われなくなります。」「百貨店なんかに店を入れたら、店があかんようになる、と言われました。一流とは言われなんだ。家業やからね。これは業なんです。」「業」をしている錦には、女の力は不可欠である。

「自分の嫁さんを商いに入れるのやったら、はじめから店に入れないとあかん。中途半端はいけません。絶対タブーです。何にも知らん間から、商いの流れを知り、いろんな商売の仕方を知って、それで意見を言うのはよろしい。途中から入ってきて、どうこう言うのがいちばんいかん。」「でしゃばり」な女ということになる。

「いっしょにスタートしたら、それは女の方が強いです。女の方が商売はうまい。けれど、商いの方法が違います。」「商売を大きくしたり、店の外での取り引き、そして組織化するということは、

男の世界の商売です。錦のような、京都の伝統に根ざした、いわゆる中小企業の商いでは、家業を守るという点で女の力が偉大です。」伝統は女によって守られる。

男たちが振興組合やロータリー・クラブで店の外のつきあいをするように、女たちも家の外でのつきあいを持つ。「ロータリー・クラブにも奥さんたちの集まりがあります。」「京都ロータリーには、女の掟というか、女性で決めた家の決め事がありますのや。女性同士でね。夜はよそで泊まったらいけない、というような女性だけの家風みたいなことをね。」

「封建的なことと思わはりますやろ、外の人から見たらね。」女だけに堅苦しいルールがあることを、「外の人」であるわたしが不当なことのように思わないかと、和義は次のように説明する。「要は、隠れて誤解を招くようなことをするな、と言うことです。陰でこそこそ喋るのやったら、広い運動場の真ん中で大きな声で喋れ、ということですわ。」人と人とのつきあいのマナーである。「女性に出すのに手紙はいかん、葉書にしろ、とかね。手紙程度のことで、ご主人が気にしはるということもないのやけどね。まあ、女性に対する思いやりですわな。マナーです。」

こういう「封建的な」ことを、「今の若い人が真似るのか、と思いましたら、嫁に行った娘が、それがいい、と言うらしい。男の感

覚とはまた違いますなあ。」「ええとか悪いとか、そういうことを抜きにして、皆で決めてるのです。こういうふうになってる、こうする、と言うことを、子どもの頃から肌で覚えるのです。」結局は、「心構えがきちっとしてないとあかん。」

「きちっとした心構え」は、商売人の心である。「誤解を招くような喋り方をしていたのでは、商いがおかしくなります。『あかんものはあかん。いけるものはいける』とはっきりとね。いいか悪いか、いつも判断する物差しを持っていないといけない。肌で感じて、はっきりしたものをね。」小さい頃からの躾が商売人の心構えを作るのである。

話し方も身に付いたものがいい。「京都弁は柔らかい。とくに語尾が柔らかい。はっきり話していないように思われるけど、わたしら、商いに地方へ行ったら、京都言葉でやる。『柔らかい』と言わはる。そやけど、『言いたいこと全部言うてる』とも言われます。『うまいこと、言いたいことけっこう言わはりますなあ』てね。古いものは全部が悪いということはないです。いいものは残さないとね。下手な中途半端な言葉を使うよりも、あえて身に付いている京都弁を使います。」言葉は伝統の運び手でもある。

カク正は東京の紀ノ国屋に店を出している。そこの客からクレームがついた。「生しば、というのをご存知ですやろ。今流行りの、

きゅうりの古漬けを主体にした、しば漬けみたいなのがありますやろ。みょうがとかしょうがが入ったのが。東京の人はあれをしば漬けと思うてはるのです。しば漬けと思うて買わはったところが、生しばと違って、本当のしば漬けですのや。秋茄子でいちばんおいしいのですけど、袋をあけたら独特のしば漬けの臭いがしますやろ。蒸れたような。そのお客さん、『こんなのはしば漬けと違う。京都へ行ったらいくらでも売ってるのに、紀ノ国屋で何というものを売ってる』とクレームです。」

「うちの若い者が紀ノ国屋の人と一緒にお客さんの所へ行って、『うちはそんな安物は売ってない』と言わんばかりに喧嘩してきよった。それで、わたしが東京まで謝りに行った。謝りに、というて、商品が悪いという誤りではなしに、誤解を招いたという謝りですわ。商品が悪いのやないから、誤解を招いた、という誤りにしておかないと、わたしもかなんし、紀ノ国屋さんもかなわん。」

「若い奴は言いますのや、自分の商品をけなされたように思うてね。かっときてね。分かりもせんのに分かったような講釈を言いよったら、若い者はよけいに腹が立ちますやろ。『それはいかん』とわたしは若い者に言いますのや。こっちの方が分かってる、と思うてね。」

老舗意識が商売の邪魔をする。「『光は自分から出したらいかん』

てね。その人が判断しはるのやからね。それでも、ついあぐらをかいてしまいますのや。『京都はこんなんです』と言うていたのではいかん。よくありますやろ、京都の老舗と言うてるところで。それではいかん。相手の人の気持ちになって、相手を傷つけないように納得して貰わないといかん。相手を認めてあげないといかん。物差しが違うのやから、次元が違うということを訴えて、その上で、『なるほど。京都のものはこういうものなのか』と分かって貰わないといかん。」何よりも、人と人との関係が大事である。

「あれを、関東弁でやってきたら、喧嘩になります。京都弁がよろしい。むこうも聞いていて、よく分からんけど知らん間に、気が付いたら、分かったような気持ちにならはって、『よく分かりました』てね。結局、言いたいことを全部言うて帰ってきた。そのお客さん、『えらそうなことを言うてましたけれど、京都の文化の素通りでした』と言うたはりました。そうしといたら、また来てくれはります。」

「紀ノ国屋もそのお客さんに怒ってますのや。明治屋と同じように紀ノ国屋を比較した、と言うてね。紀ノ国屋の部長さんが来て、『すまないが、カク正さん、東京まで来てくれるか』と頼みに来はった。わざわざここまでね。話の経過を聞いて、『わたしが行きます。けど、言いたいこと、きついこと、言いまっせ。わたしの店の暖簾

だけならかまわんけど、紀ノ国屋さんの暖簾もある。もしわたしが行ってもあかんときは、それでもこのお客さんをとらはりますか』と訊ききました。『このお客さんを守りたいのなら、紀ノ国屋さんでやってくれ。放かしてもかまわないのならわたしが行きます』と言うた。結果は、『あれだけ柔らかく言って貰ったのだから、まちがいはない』ということでした。『京都というのはいいですねえ』とも言うて貰うてね。」身に付いている京都弁で、皆が納得したのである。

女の京都弁はもっと巧みである。男の京都弁と比べたら、「女の人の京都弁はもっと響きがええのやろねえ。」錦が東京へ売出しに行った時のことである。「錦のしっかりしたおかみさんに交渉させてみなさい。むこうのバイヤーがうっとりして聞いてます。わたしらが行くよりよろしい。じわっと締めてかからはるし、かりかりしてても、知らん間にペースにはまってしもて、商いがみなまとまってしまいます。えらいもんです。」ただ柔らかく響くだけでなく、商売の言葉でもある。

錦のある店で、祇園町からお嫁さんを貰った家がある。「そこの奥さん、純粋の京都弁ですしね。ああいう祇園町の京都弁は、本当に残っている京都弁です。女の世界で苦労してはるし、きついと言うときついです。悪く言うたらね。ええ意味では、しっかりしたは

る。女性の世界というのはどんなに厳しいものかと思います。男には、あんな器用なことはできません。本音と建て前とをきちっと分けて、なおかつ自分の思うてることを全部喋らはる。そら女性の方が強いです。」男の京都弁など、女の京都弁には太刀打ちできるものではない。

錦の男の地域活動の一つに、地区の小学校の育友会長がある。小学校の区域がいくつかの町内でできていて、育友会長は一町内よりも広い地域を代表する役職なので、会長に選ばれるのは名誉なことであり、地域で活躍していくためにも重要な一歩でもある。

「去年、育友会長をしました。男の世界で、これまでいろいろな会長をしてきたけど、育友会長は初めての経験でした。」「それまで、女の人は組織に弱いのかと思うてました。上手に組織を教えてあげたら、女の人の方がしっかりしたはる。男の方が横着です。教えるまでは大変でしたけど、いったん教えたら、形にはまったら、女性の方が組織に強い。男は理解度がよすぎて、右や左にすぐ妥協するけど、女の人は妥協しません。組織の縦割りと横割りとをはっきりさせておくと、絶対にまちがわない。組織運営は上手です。」「男の場合は、まあええやないか、とか、かたいこと言うな、とかでねえ。」男の方が、融通をきかせてだらしがない。

「歴代の育友会長が言います。女の人に、『会議で喋って下さい』

と言うても、『なかなか喋ってくれない』てね。『拙い意見でもいいから、喋って下さい』と言いますわね。まあ社交辞令で。遠慮したはります。ところが、ほんまに喋らはったら止まらない。社交辞令で止めておけばいいのに、つっこんで掘り出そうとしはります。女性はあんまり喋らないと思うてると、ね、わっとなったら、収拾がつかしません。あれも難儀でっせ。」男なら融通をきかせて、ある程度で止めておく。「押さえていはるものを押さえたままで置いとかないかんのに、それをいったん掘り出し始めたら、いっぱいものを言わはる。それを知らんと、ね。はじめは奥ゆかしいから、言わはるのもぼつぼつでしょ。『そのままでええのかなあ。後で言うて来はるのがかなわんからなあ』と思うて、男と同じと思うてね、腹を割って話をして貰おうと思うでしょ。そうしたら、腹割って話をしはるのはええけど、とことん行って、あとに尾を引くんです。かないませんで。」男よりも、女の方が手強かった。

「育友会では、性が二つあるんです。女性という性と、母性という性とね。女性の間はええのですけど、母性になって、子供のことになると、ね。こうなったら、男なんて弱いもんです。」「どこまでで止めとくかが問題でね。このあたりで、ここから出たら大変なことになる、という一歩手前で止めないとね。えらいことになります。」女は優しいが、母は強い。

育友会長には男がなり、女が副会長を務めることになっている。表が男、内が女、という家業の分担がここでも生きている。「男が一人いると、異性やからいいのです。女の間でぐちゃぐちゃ言うても、男に面と向かってくることはめったにない。」男はたてるものとなっている。役員がすべて女なので、「副会長さんがいちばん気の毒です。その人が根回しをしてくれはってね。『いいことだけ聞かせて下さい』と頼んでおくんです。『いやなことは、聞かさないようにして、自分で処理しておいて下さい』と頼んでおくんです。」「女房といっしょでね。これは、ということだけ聞かせ貰う。あとは聞かして貰わないようにね。商売人の奥さんは分かります。」商いをするものの阿吽の呼吸がある。「たとえ一理あっても、都合の悪いことをご主人に聞かせてみなさい、頭にかっときて、その人と次に会うた時に喧嘩になります。『育友会の一年間は家庭といっしょ』と言うてね、副会長さんに女房役を頼みました。」「女の人は使い分けをして、上手に男をコントロールしはります。男は、都合の悪いことを知らんだけでね。その方がいい。うまいこと行きます。一旦聞いてしまうとあきません。『頼むから、聞かさないでくれ』と頼んで会長を務めました。」どこでも通じる男と女のつながりである。

和義は見合い結婚である。「『恋愛ですか。お見合いですか』と

訊いてくれはるのは、まあ社交辞令ですやろ。わたしは、商家から貰うてます。商売は違いますけどね。サラリーマンの家から貰うたら大変ですよ。」育った環境は同じである方がよい。

「嫁さんの問題になったら、わたしは必要条件と十分条件という話をすることにしてます。好きであるということは必要条件です。しかし、それだけで結婚したら大変なことになる。生活していくのですから、十分条件が揃うてないとね。封建的かも分からんけど、難しい話をすると、家柄が違うとか、ということになる。」「全然環境の違う人を貰うたら、その人が苦労しはります。それを、あえてかまわんのなら結婚してもええですよ。人間二人だけで暮らすのならかまわんけど、いろんな関わり合いがあって、人という字と同じで、お互いが関わり合いの中で、集団の中で生活していくのですから、必要条件だけで結婚するというのは、女の人に酷です。相手の幸せを願わないような結婚であったら、愛とは言えんでしょう。相手の運命を考えないような愛では、本当の愛とは違いますやろう。」

愛情は、結局は、家の存続と商いの心髄に及ぶ。「相手の本当の幸せを考える愛でなければ、それはエゴです。大事なのはエロスです。エピキュミアという自己愛と、アガッペという絶対愛と、エロスという愛と、愛には三つありますやろ。結婚とか、いわゆるヒューマニズムにつながるのはエロスでしょう。エピキュミアという自

己愛では、自分さえよかったらという自己愛だけでは、いかんでしょう。絶対愛でもね、これはもう信仰で、合掌という信仰につながる愛。愛には三つあって、そんな基礎的なことを見誤るようでは大変です。」結婚も商売の哲学に、人間関係の哲学に広がる。「こういう基礎的なことを、いつも勉強しておかないと、後継者とか、そのほか商いのいろんなことは、見抜けない。そのぐらいの自覚がなかったら、信念がなかったら、ましてこういう商いはやってゆけません。」嫁を選ぶのも、商売の哲学の内である。

「わたしは見合い結婚です。お見合いですか、恋愛ですか、と訊かはること自体がおかしい。」「恋愛結婚で結ばれた人は、必要条件から入って、十分条件が整って結婚しはる。わたしは、十分条件から整えて、必要条件を満たした。出会いが違うだけで、どっちから始めるかが違うだけです。お見合いですか、恋愛ですか、というのは、必要条件から入らはったんですか、十分条件から入らはったんですか、ということですわ。恋愛ですか、お見合いですか、と訊かれたら、わたしはいつもどっちから入ったかと問いただします。」

結婚についても、哲学にまで及んで徹底的に考えるように、「わたしは凝り性です。食べ物商売は職人的なところがある。何でも凝る。こういうセンスがないと、生き残れない。わたしのセンスが時代に合わなければ、今日あって明日のない商売です。このくらいの

覚悟がないといかんと思います。」常に自分を磨いていないといけない。「よその店の人は、後継者が育たないといつも文句を言わはります。後継者を作るのは大変なことです。それをいつも頭に置きながら、姿勢を正していく。自分の考えがすきっとしてなかったら、誰がついてきます。息子どころか、嫁さんもついてきません。まして、他人を使おうと思うのなら、時代性とか、自分がそこにあるということの存在性をはっきりさせていないと、これからの時代を乗り切れますか。」正しく嫁を貰うことは、正しく生きることにつながる。正しく生きることは、店と家の繁栄につながる。

女が女を作る、と和義は言う。男にはできない。「昨日も言うてました、うちの家内にね。『女の教育は女性やないとあかん。嫁と姑の間でもね、知らん間に、自分が嫌いと思うている人に似てしまう』てね。もし引きつける何かがその人にあったら、似てしまいます。知らず知らずに、染まってます。」「わたしは、養子やないかと言われてます。うちの家内、近頃、顔までお婆ちゃんに似てきたと言われてます。」「家内に言いますのや。『うちのお婆ちゃんときたら』とあんたはよく言うけど、近所の人に訊いてみろ、『この頃お婆ちゃんにそっくりなこと言うてる』と皆が言うてはる、てね。『お婆ちゃんとそっくりな言葉を使うてはる』てね。」姑から嫁へ、「女主人」は乗り移っていく。

和義の母親は、父親が戦争に行っている間でも、商売を切り回してきた。「親父が戦争に行ってる間、三法という統制経済になって、うちのお婆ちゃんが、京都市の食料の総元締めをやってた。京都市全部のですよ。三井、三菱、住友、全部のね。工場の物資係の係長さんが頭を下げて、お婆ちゃんところに来てました。」「四条烏丸の丸紅のビルの最上階に事務所があってね。皆がモンペをはいてないといかん時に、スカートにハイヒールで行ってた。変な商売してはるのと違うか、と言われてね。」「終戦直後、統制経済が終わる頃、お婆ちゃんはここで鮓屋をやった。すごいですよ、十四軒ほどの店をやってた。南座の舞台のお弁当の注文を、全部ひきうけたりね。そういう女傑ですわ、うちの母親は。」

そういう母親が嫁を教育し、嫁は姑に知らず知らずの間に似てゆき、後継者となっていく。新しい女主人が生まれて代が替わると、家のしきたりも変わっていく。「正月のしきたりも、今切っておかないと、このまま放っておいたらずっと続いてしまう。お母はんの元気な間に切っておかないと、ずるずる続いて、『お母はんの時はこうやった。いや、ああやった』ということになって、これはかなわん。うちは、今が切る時ですやろ。それで、正月には人を呼ばんようにしました。そのかわり、松の内に、兄弟を呼んでいっしょに食事をする。年に二回呼びます。」新しい世代が始まっている。

大晦日の錦の店仕舞いが早くなって、長い間続いてきた京都の年越しの光景が変わるように、カク正の女たちも次の世代へ移ろうとしている。この女たちが、街を変えていく。

5.家を作る女

1）結婚まで

和義の母、聖子は、大正二年、奈良県新庄町に生まれた。大和高田市の近くである。本家は村一番の土地持ちの農家であった。聖子の家は、祖父の代に分家した。父は二町四反の土地を持ち、主として畑作を行い、換金作物を作っていた。大阪から近くにあるという地理的条件を得て、大勢の人を雇いかなりの現金収入をあげる農家であった。

「大和というと、地所がよろしい。畑ところ。よそみたいに、米や麦だけと違うんです。スイカ、カボチャ、いっさいが全部ができる。カボチャも、今と違うて、こんなんができた」と両腕を大きく広げて作物の自慢をしながら、聖子は自分の生い立ちを語り始めた。

「大和スイカ。ちょっとあたったらピッて割れるくらいの、皮の薄い甘いスイカでね。大和スイカと言うて、名が通ってた。」「大和沢庵。ものすごく素性のいい大根ができてね。わたしが娘の時分のことでっせ。今は違うところから来て、細い。昔は、漬物にする前から、大阪からどんどん買いつけに来てねえ。樽一丁が十円でした。伊勢沢庵のひねたのが五円。一桁ちがいでっしゃろ。」よい作物ができて、高く売れた。

父親は近所の農家からたくさんの人を雇い、野菜を作って漬物を

漬けていた。「自分のところで人手が足らんから、よそから雇うの。物のできない所があります。ちょっと離れた所ではね。米と麦だけの所がありますの。わたしの村ともう一つの村だけがよくできるの。大和というても、全部が全部できるのと違うの。」とくに聖子の村あたりだけが、すいかも大根もよくとれて、換金性の高い作物を盛んに作っていた。

「五町と一口に言うけど、どれだけの広さやと思わはる。二町でも村で指折りでっせ。」村の中でも、聖子の家はとくに大きく商売が盛んであった。

「うちらの方では、金肥(かねごえ)と言うて、肥料を買いますの。昔は小便でね。土がさらさら。高田の町が近いでしょ。紡績工場があって、そこへ汲み取りに行って、それを畑に撒かはるの。味が違うのやね。栄養がよすぎると、木ばっかり肥えて、実が数成らないんです。あれね、難しいの。」もともと土地がよいだけでなく、肥料を買い入れ、耕作技術も高かった。

村が違えば、作物の値段が違った。「同じ大和でも、土地の名前を覚えてはってね、仲買の人が。問屋でも知ってはってね。お客さんが味を覚えてはる。」大阪の市場に直結していた。名の通った村の作物は、その村の名前で高く売れた。聖子の村もそのうちの一つであった。

聖子の家は農家ではあったが、「お父さんがものすごう商売人」であった。本家は「村一番で、何町と持ったはった。」村の有力者であった。「うちのお父さん、人に頼まれたらいやとよう言わんで。あの時分、町会議員やらやってはってね。人助けしたはった。それは商売人でね。わたしの主人よりも肥えたはった。『わしは百姓はようせんけど、そのかわり頭使う』と言うてね。」「百姓さんがよそから集まって来はって、村に市が立ちました。台の上に乗って、手をどないやしはってね。それをお父さんがやったはった。」「わたし、商売人の筋を引いてます。商売が好きでね。」父親の血を引いていると言う。

聖子が小学校五年生の時に母親が死んだ。「今で言う癌でね。三年間寝たはった。」「学校は休んだり、行ったりでね。『かわいそうやなあ』と皆が言うてくれはった。わたしがいちばん姉でしょう。ご飯炊いたり、洗濯したり、学校から帰って来たら掃除してね。」継母が来るまで、一人で家事を引き受けた。「田舎やしね。五十年も前、女中さん置いてはる家はなかった。町みたいなことはなかったです。」助けなしに、小さな子が一人で家を支えていた。

嫁いで来た継母もよく働いた。若い継母には次々と子どもができた。「屋敷も広いしね。お母さんがつぎつぎと子ども産まはるでしょう。年子でね。六人産まはった。一人亡くしたはるけどね。お母さ

んを楽にしたげないかん、手が届かないといかん、というので、わたしが生まれてきた子どもをとって育てたげたの。」乳母の代わりまでしていた。

「結局はわたしが笑われるから。野良から帰って来て、暗くなってても、屋敷をずっと掃いてからでなかったら、寝ませんでした。朝から、よその人が仕事に出かけはる頃には、もう一仕事すましてました。」継母に負担をかけないように、継母の分まで聖子は働いた。「男まさり、と名がついたくらいに気張ったの。お母さんが違うのやから、二倍三倍気張って当たり前。」「義理のお母さんもなかなかの気張り手でね。口八丁手八丁でね。なかなかの男まさり。よう気張らはった。わたしは、『仕事をせん』と言われて叱られたことがなかった。」京都へ嫁いでからも、腹違いの妹が遊びに来て、「『京都の姉さんを見習え』と母に怒られます」と言っていたという。「気張る」というのは、小さい頃からの聖子の生き方であった。

嫁入りするまでの九年間、聖子は身を粉にして働いた。「何べん座敷で泣いたか。便所で泣いたかねえ。けど、口ごたえはこっから先もせなんだねえ。」と爪の先を指しながら言う。「口ごたえして、喧嘩したら、中に立ったはるお父さんがかわいそうでしょう。子どもやのに、何でそんなことに気がまわったんでしょうね。」

母を失って懸命に働く聖子を見て、大阪からやって来る得意先の

商人たちは、「弟の嫁に」とか、「息子の許嫁に」とか言って来た。「母親が亡くなって苦労してるのを分かってるから、『漬物屋なんかには絶対にやらん』とお父さんは言うたはった。それが縁のもんで、こっちへ来てしまいました。」

逆境でよく働く聖子を見て、縁談がたくさん来た。「大阪の大きなお漬物屋さんで田村万というのが今でもありますやろ。そこの縁談もありました。漬物屋の全国の会で、今でもそこの人と会いますの。むこうも縁談のあったこと知ったはるさかい、おかしいて。」

「お医者さんの縁談もあったし、大阪から車で来はった相当ええとこのおうちの話もありました。」結局は、「商売人がよかったの。わたしは財産も持っとらんし、相手はしっかりした商売人やったらええ、と思うてました。気張って何するつもりの自身があったさかいね。新所帯でも何でも、裸一貫でもええ。本人さえしっかりしたはったらね。縁談の中には、何十万と持ったはる人もあったけど。財産なんかあってもねえ。」嫁ぐ前に、すでに独立心のある一人前の商売人であった。

結婚するといっても、「本人がどんなんか知りません。縁というのはそういうものでね。」むこうの家でも、「わたしのことを占いで見てもらわはった。ここの家は、よう見てもらわはるの。わたしのことを見てもらわはって、『これは苦労してるさかい、所帯をポ

ンと渡したらええ。結婚した明くる日から所帯を渡してしもたらええ。よう気張る』と占いの人に言われはったらしい。」この家とは縁があったのである。

2）新所帯

結婚は、昭和十年のことであった。番頭と、昔の中学を出た若い子があわせて三人、それに手伝いの女の人が、主人の妹も含めて、二、三人いた。「結婚したのは、わたしが二十四で、主人が二十七でしたな。四つ違いでね。」「占いで、方角が悪いと言うて、一年おいて明くる年にここへ来ました。」

「ここへ来たらすぐに所帯を渡されました。新所帯やから苦しいですわな。こっちかてお金がない。ポンとぎょうさん貰うて所帯をやるのやったらええけど、お父さんも裸一貫から気張ってはるのやさかい。」「お父さんの家が老舗を買うてくれはったの。大きなことやもんねえ、一千何ぼて。昔でいうたらそら大きいお金です。」店を買って貰って、分家したところへ、嫁に来たのである。

「そのお金は返しました。主人が兵隊に行ってもまだ借金があった。電話は取られる、その他のものも取られるでね。商売はできんし。けれど、うちはお漬物の配給がちょっとあった。」新しい店が軌道に乗る前に、戦争が始まり、商売はうまく行かず、そこへ主人

が兵隊に取られてしまったのである。「主人が兵隊に行かはる前に、『三法』というのを始めてはって、わたしが、なにくそ、と思うてね。」聖子はなんとか商売を続けた。

商売を始めた頃、錦はよそ者にきびしい街であった。「大きな漬物屋の老舗があってね。うちの三倍くらいもあるような店がね。うちが一年間で気張ってやることを、そこは千枚漬けで一冬でやらはるような老舗。なにくそ、と思うて、主人と一緒にね。品物を一生懸命気張って、小売りではうちほどの所はない、と言われるほどになりましたけどねえ。進物ではかないまへん。相手は何十年という老舗やもんねえ。うちはリヤカーを引いて二人で気張りました。」

錦の競争は品物と値段でする。「ちょっとでもよそより勉強して、ええ品物を作って、値段を勉強してね。それが競争やもん。大きい店やさかいいうて、圧力をかけたり、邪魔したりはしはらへん。」商売にかけては厳しい錦だが、不当な争いはなかった。「気張る」商売人には、生きがいのある街であった。

「主人は、その時分の大阪の一流の大きな問屋に入ってね、頭を坊主にして一から仕込んで貰うてきはった。そのままずっとその店にいはったら、ええとこまでいかはったのに。十九からいはったのやさかいね。こっちへ店を買うて貰わはったさかい、京都へ帰って来はったの。」主人の経験と技術からして、品質では負けるはずは

なかった。だが、新参者には、錦はきびしい街であった。

若い新参者ということでは、いやな目にもあった。「はじめは、今思うとあほらしいけど、隣の魚屋が馬鹿にしてね。昔は荷造りは縄でしたわね。今みたいにセルロイドのはあらへん。その縄でも黙って取りに来はるの。それで、下駄の鼻緒をすげたりしはるの。お父さんは、『ああいう人は』と言うて歯ぎしりしたはった。『このかたきを長崎で』とか、『なにくそ』とか言うてね。『そんなこと言わんとこ。黙ってよ』とわたしは言いました。」新入りへの嫌がらせは、いくつも経験した。

「はじめのうちは、そういうこともありました。どこの人や、てなもんでね。主人が相当の出の者ということを知らんのです。そんなこと、いちいち言えしませんしね。」「今は水洗便所やけどね。主人が会長の時に水洗にしはったの。昔は、こえ汲みに来たはった。西京極あたりのお百姓さんがそこまで来はりました。そしたら、うちの主人のことが話に出ますやろ。だんだん、主人のことが分かってきた。」自然に知れてしまうのである。「お爺さんが死なはって、何さんが亡うなったいうくらい人がぎょうさん来はったの。それで皆がびっくりしはった。主人はほら吹くようなこと言うのが嫌いやしね。」「今ではもう皆の頭が上がらへんようになったけどねえ。」

だからこそ「実家は大事やの」と言う。「実家がへたれかけて、

どこの何か分からんようなんではねえ。やっぱり、昔からでーんとした、恥ずかしくない家柄でないと。家柄というのは昔からの家柄でね。今成金で銭で家を建てはったところとは違いますのや。」歴史のある家は少ない。「そうやから、親元を大事にせんといかん。」

「主人の家はよろしい。田畑を貸して、地主でした。戦争で皆無くなってしもうて。」「兄さんが校長先生したはってね。大学は東京で、卒業して先生したはった。校長先生までならはった。弓削でね、亀岡のむこうの。」戦後の農地改革で、不在地主の田畑は取り上げられた。「田地を作ったはらへんから、皆戦後に取られました。皆やられたんどすわ、地主は。兄さんがどこへも行かんと作ったはったら、どうもなかった。七反かな、を貰うて、あとは全部取られはった。」自分で農業をしていれば取られなかった。「うちは弟やしね、三法ばっかりで、田地作ってないし。取られるのが分かってたら、わたし七、八反は作ってました。七、八反いうたら大きいでっせ。」

次男にも財産分けがあった。「うちも五、六反は貰うた。そやけど、分家にあげたのでは財産が減ったのといっしょやしね。あと、お婆ちゃんがね、たった一人のお婆ちゃんを大事にしようと思うたら、それ返してあげたら、お姉さんかて気持ちがちがいますやろ。親を大事にして貰うても、親はたくさんはないのやさかいにね。お父さんに、『それは返してあげなさい。うちはどうにか商売してい

けるのさかい』と言うてね。」本家に土地があって続いてこそ、分家も続いていけるのである。

「主人の兄弟さんはたくさんいはりましてなあ。はじめは九人いはった。小さい時に一人亡くなってはってね。一人はお寺さんに行かはって、六十近くで亡くなった。上のお兄さんの次の姉さんは嫁入りして、六十四、五で亡くならはった。今、男二人と女四人、皆で六人いはります。」「皆、ええとこへ片づいたはりますけど、わたしところだけがそんな財産を貰うたらねえ。誰かて欲しがらはります。本家が大事やからね。」兄弟の手前もあって、財産分けは断った。

「本家というのは大事やから。結婚の聞き合わせというと、一番に本家へ行かはる。うちの娘の時も、もう済んだけど、まず西京極の本家へ聞き合わせに行かはります。そのあとわたしの里。親方から行かはる。どこから来たはるのか、てね。訳の分からんところとは、誰でもかなわんしね。親がしっかりしたはったら、ああいうところから来たはるのならまあまあ、とかね。そうやさかい、親方を潰したらかなわん。」「田畑を形見にいただいたのやけど、うちだけというのはかなわんしね。もし、うちの商売がよくなっても、それで盛んになったと言われるしね。『返してあげよ。やっぱりお婆ちゃんを大事にして貰わんならんし』てね。」一時の財産分けで豊

かになっても、結局は自分のためにはならない。

「うちかて苦しいわ。お金かて不自由でかなわん時もある。けどね、『一生懸命気張って、はりきったらええのやさかい。返してあげましょう』と言うてね。後にも先にもお婆ちゃんは一人なんやし、大事にして貰わんならんしね。兄さんがいはらなんだら、次男がお婆ちゃんを見んならん、と思うてますがな。」長男が本家を継いで、親の面倒を見て貰わなければならない。「長男は本家で生まれて、財産も貰うてはるのやから、お婆ちゃんを見るのは当たり前ですがな。こっちは分家で、家は買うて貰うたけど、財産はごっつうは貰うてない。新所帯で頑張っていかんならん。何ぼでもお金は欲しいところやけど。それは欲しいけどね、それだけではねえ。親の財産を減らすとやら言われたり、後々聞き合わせにということもありますやろ。」本家を大事にしておくことが、分家自身を大切にしていくことになる。

家柄がいいのは宇津の家だけではない。「わたしの実家もね。本家は村一番で、田地が何町とあった。それでも、息子が死んでね。わたしのいとこ、ものすごいもんでした。外国へ行ったりして、出世してね。それがねえ、息子さんが亡くなったら難儀なことやねえ。持ったはった財産が減ってしもうてね。そういうことが起こってしまう。家というものはねえ。」跡継ぎが亡くなれば、不思議と家の

存続は難しくなる。

聖子の長男が生まれて半年の時、聖子の父親が死んだ。「わたしは一人娘で、兄が一人と弟が二人いました。四人兄弟です。兄と弟とは戦死ですがな。結局、私一人が残ってしもうてね。あとに来たお母さんが若いし、男の子二人と女の子三人できました。わたしがここに来るまで、九年間いっしょにいましたやろ。次から次ぎと子供ができてね。わたしがとってあげたの。」「ここへ来てからでも、戦争中、大阪空襲の次は京都や、と言われて。疎開しようと思うてもね、親がいるのと、兄弟しかいないのとでは、違いますわなあ。お父さんが生きてたらよろしいのやけどね。」実家といえども、実の父がいなくなれば気を使う。

「兄が戦死ですやろ。女の子を一人残しました。先へいってもめたらいかん、というので、お父さんの兄弟が四、五人いて、それが寄って相談しはりましてね。母親の方もまだまだ若いですやろ。それで、分家さしました。今は仲良くやってます。その子どもが、わたしをお母さんと言うてくれます。」小さい時から面倒を見てきたつながりは、義理の仲を越えて、親子のような親しい関係にもなっている。

継母の男の子の一人が、奈良で市会議員になった。「高校の時から、うちに手伝いに来てたんです。大学は立命館を出て、病院の事

務に勤めてました。それが、選挙に出る、と言うてね。母親は、『そんなものに出るのやったら家に入れん。勘当や』と言うて怒ってねえ。」「こっちが何もせんでも、病院がちゃんとしはるのですわ。それが、二十九人選挙に出はった中で、七番目で当選しましたの。二十七歳でね。若いのに弁が立ちますのや。『若いのにあんなもんしょうがない』と言う人と、『若いのに市長をふらふらにさせたのは先が頼もしい』と言う人と二通りですわ。それが、奈良の高田市に、里にいますの。」

選挙運動は「病院がちゃんとしてくれはってね。全部あれですやろ。」錦の保守的な体質と合わない。「うちのお父さんが嫌いですの。うちのお父さんはものすごく怒らはるしね。そやけどしょうがない。向こうへ行って、一生懸命に挨拶もせんならん。お父さん、怒りながらでもね。ややこしいことですわ。」「お父さんは、あれが嫌いですねん。今の知事の林田はんね。うちはあの系統ですし。自民党でしょ」と、里からとんでもない者が出たと言う。

政治的傾向がたとえ違っていても、家族は力を合わせなければならない。「家というのは、貧乏でもね、子供らが『気張らないかん』と言うて、子供が皆そろうてよくなるもんでね。このあたりでも百万長者にならはった家もある。」皆が力を合わせて頑張ると、家は盛んになる。「この年齢になって、世間を見てると、金があるのも

ねえ。無茶苦茶なお金を子供に残さないでもええと思います。借金があっても、それはそれでね、子供がまじめに気張ってくれたらそれでええの。」親が子供に残してやれるのは、力を合わせて頑張るという生き方である。

「うちは、男の子三人でしたやろ。ここらにあるお金を持って行こうと思うたら、ね。お金は店にあるし、ね。けども、うちの子はそういうこともしなかったし。お金でもめたということも、自分の子ではなかったしね。おかげさんで。」親の日々の努力が子どものよい手本になる。「気張らなあかん、気張らなあかん、てね、やってきました。」

「錦でも道楽する人はあります。女狂いしたり、夜遅くに帰ったり、朝帰りしたりね。お父さんと息子さんが競争で遊ばはったりね。遊んでる先から、『小切手持って来て』て。嫁さんがかわいそうにね。齢いかはって、『夫婦やししょうがない』と言うて世話してはったけど。知らん間に、家まで売ってしもうてあるの。女手で縫い物してね。しっかりしたはった。髪でもひっくくって、お化粧ひとつするでなしね。頑張ってはった。何ぼ泣いたか分からん、と言うてはった。それでも、遊んではる先へ迎えにいかはるの、小切手持ってね。」「そんな道楽はかなわん。」

「あまりない話やけど、とくに今はね。それでも、ちょっと金が

できたら、男さんは誰かて遊ばはるねえ。まあ、ある程度の年齢になったら止めはるのやけどね。それでも、いったん道楽したらもう遅いわねえ。家中がごちゃごちゃになりますわね。そらひどいわねえ、家あけて遊びまわらはる。そんなことしはったら、奥さんは怒らはるわねえ。」道楽にも程度というものがある。「まあ、ある程度はね。分からん程度にうまくやらんといかんわ。知ったら、誰かて腹が立つ。」男の遊びは甲斐性などと言われるけれど、女にすれば腹の立つことである。

「男さんでも、奥さんが男作ったら、『そうか。えらいなあ』なんて喜ばはらへん。男は女以上にやきもちやきでっせ。ちょっと男の人と話してるくらいで、やきもち焼かはる。えらそうに言わはるわりに、男はんがやきもち焼かはるのおかしい。」「女は、しょうがない、と思うてますのや。」女は堪えているのである。

3）戦争

主人政次は、昭和十八年に戦争に行ってしまった。昭和十二年に生まれた長男和義は小学校一年生、次男は四歳、それに生まれて半年の男の子を残して、兵隊に取られた。「わたしが二十九の年やったかねえ。」そのまま政次は昭和二十一年まで帰って来なかった。

戦争に行ってしまった後の商売が女手一人では心配だと、政次は

友人に店を頼んで行った。「太秦と五条と七条に三法の食料を入れ始めてはったの。そのお友だち、ミシン屋さんで、商売に関心がない。ある時、向こうさんに話をしに行って貰うたの。話が合わん。それでわたしが行った。わたしやったら、商売人同士で話がよう合う。わたし一人ですることにしました。」男だというだけで、商売が上手というわけではない。商売人でなければ、務まらない。

「一回目の仕入れで、主人といっしょに三法の仕事を始めはった人が三人で産地へ買い付けに行かはりました。香川県からあっち、四国の方へね。わたしがこっちで一人で引き受けて買うてね。男の人、警察が怖いということもないのやろけど、『宇津さん。警察の方を持ってくれ。わたしらが産地へ行く』と言うて買い付けに行かはりました。そのうちの一人が西京極のお酒屋はん。もう一人の人が銀子元で、向こうで費用を持たはる。わたしが書類をこしらえて警察へ行って、電報為替でお金を送る。責任はこっちが持つ。店に、三法配給所という大きな看板をかけてね。」「結局は、ややこしいので別れたの。」聖子一人でやっていくことになった。

「はじめはね、福神漬けに味噌漬け、大根の味噌漬け、それに芥子漬けでした。貨車でどんどん入って来るの。夏に腐るのをわたし知りませんがな。こっちに着いたら七分目になってるの。大損でね。」

「昔の五千円というと大きいです。もう止めてやろうかしら、と

思うたけどね。『いや、止めたらいかん。主人が戦争に命がけで行ったはるのやさかい、わたしもお国のために気張ろう』て思うてね。『お金儲けるのもお国のため。わたしもこっちで活躍しよう。気を取り直して、なにくそ』と思うて。」

戦争が激しくなるにつれて、錦から男が消えていった。「主人が戦争に行ったのは、うちの店の者の中では最後でした。番頭さんやらはすでにいませんでした。主人が戦争に行ったら、すぐに統制経済になってね。どこの店も何にもないようになる。ぴゃっと品物が止まった。見てる間でした。通りのテントを張る鉄の棒も取られてね。」人だけでなく、鉄砲の弾の材料も供出しなければならなくなった。「皆兵隊に取られて。ここらに残った人も、近所の木工所とかへ徴用で取られてね。女中さんまで取られてしまいましたがな。もう誰も達者な者は残ってしませんでした。あとは病人と女ばっかり。」錦は商売のできない街になった。

「わたしは三法で忙しかった。女中に、『今日からあんたが奥さん。わたしが旦那さん。二人で気張らんならん』と言いました。『食べ物は心配ないようにするし、子供だけはちゃんと見てやってね。お嫁に行かんと主人が帰って来るまではうちにいてね』と頼んでね。その娘は、戦後、このうちから嫁入りさせました。」聖子は女ながら家の主人となって店を切り盛りした。

「食べ物という食べ物はぜんぜんないの。買おうにも、売ってない。お肉なんか、五年間ない。かしわ屋はんで、かしわが棚に置いてあることはなかった。お茄子でも一世帯に半分。大根はちょっとの配給。行列しても、一つもええものはあらへんの。ええものは、皆闇でやらはる。着物と交換、とか言うて。八百屋はんでも、アカザとかイモのつるとか、食べられないものばっかり。錦と言うたかて、食べられるもの何にもおへん。端から端まで何にもない。店にあるのは、食べられんものばっかりですわ。皆疎開で田舎へ行って、晩には錦に誰もいはらへん。」錦そのものがなくなってしまった。

「この家は主人が留守の間に買うたんです。向かいの店が、わたしがここへ来た時の家です。ここは倉庫でした。誰も住んではらへんでね。戦争で商売もできんし。それで、わたしが買うたんです。」聖子の店は、戦争の中でかえって隆盛に向かった。

「産地から、船やら汽車で、どんどんと品物が入って来るの。お醤油が船で来たら、三百丁、五百丁やしね。日本電気へ百丁、島津製作所へ百丁とかね。警察から配給してね。注文の品物が入って来たら、品物の山ですわ。」

「いちばんはじめの取り引きは、太秦へだし粉を入れました。おじゃこそのままはあきません。軍隊にしか入らへんのです。おじゃこの粉末がトラックにいっぱい。仕入れた人が自分で捌けないので、

わたしに頼んで来はった。それを、太秦に入れました。喜ばはってねえ。何にもない時でしょ。」

「主人が太秦、五条、七条を始めはって、わたしが松原、川端と広げました。品物をどんどんと入れてね。貝柱もこんな大きいのが、樽で百丁、また百丁とね。貨車で、一車、二車と入って来るの。」聖子の店にだけ、食料があふれていた。

「入ってきた品物を、四丁、五丁と、抜き取りよるんです。『いたんでる』とか言うてね。食べ物がないから、何やかや言うて、途中で荷を抜くんです。持って来はる運送屋はんに、『これは三法やさかいにちょっとでも抜いたら引っ張られまっせ。警察のものやさかい』とわたしが言うたの。そうやって、ちょっと言うておくと、大事に扱うてくれるの。『大事にして下さい。わたし個人のものと違うのやさかい。抜いたら引っ張られます』て言うておきますとね。」世間では食べ物がまったく消えていた時代である。

「品物がどんどんと入って来るのを、量ってあげるの。警察の女の子ではあきませんのや。白菜でも干してあるのは、十貫目と書いてあっても、乾いて減ってるの。『三法は商売でやってるのとちがうから。皆さんの便利をはかってるだけやからね。見ててくださいよ。十貫目て書いてあっても九貫しかおへんやろ。一貫目やったら九百匁で見て下さいよ』と言うてね。警察の事務の女の子に、『ちょっ

と数字を入れといて』と言うておくのではあきませんのや。」商売は人任せにはできない。

「お醤油、四斗樽やったら、こんな大きい樽で口銭が五円ですわ。産地へ二円五十銭送って、わたしが二円五十銭取るのどす。口銭が四斗樽でたったの五円でっせ。」大きく儲かる商売ではない。公けの品物を扱うのである。「五円というのは、マル公やさかいに決まってある。そのかわり、貨車ひとつ来ると大きいわねえ。七、八百円になる。七、八百円と一口に言うけど、その頃は三千円あったらちょっとした家が買えたの。」

「いちばん売れたのがお海苔でした。貨車でどんどんと入って来てね。二千貫くらい入りました。お醤油もうちがまわしてますやろ。工場へまわすと、佃煮を炊かはるの。工員に食べさせはるのやね。蕗、山の蕗ね、これもよう売れました。乾燥したのがどんどん入って来て、お醤油も船でどんどん入って来るし、それで佃煮にしはるの。」

「この前の通りに、馬力が二十台も並びました。いっぺんに樽が百丁も入って来たら、えらい行列です。馬車が石畳ですべりますのや。曲がり角で馬が足をすべらしてころびますのや。」火の消えたような錦に、ただひとつの活気であった。

「わたしらまだ若かったし、力が強かった。大学生やらが手伝い

に来はるのやけど、力が弱いのですわ。一樽をよう持ち上げへんの。後ろと前を持って放り上げますのや、と言うてね。わたし、後ろ向きになって、ひのふのみい、言うて上げますねん。」「わたし、若い時には、米一俵かついだ。田舎で。菰に入ってるのをね。漬物樽でも、二十四、五貫あったんを、主人と二人で動かして店に入れてましたから。」若くて、体力にも自信があった。

「マル公は終戦まで続きました。そら軍隊か警察にしか入らへん品物やもの。とにかく、品物をよそに入れたら、手が後ろにまわります。『横流ししたら、いっぺんに手がこれでっせ』と言うて横流しさせへん。わたしら闇してたらごっつう儲かってたやろうけどねえ。マル公でっさかいね。」聖子は、正しい商いを通した。

戦争がさらに激しくなっていった。「大阪、神戸、明石と、皆空襲で焼け出されはって。大阪に四百機から飛んで来た時ね、ぐるっとこっちまで来たの。鴨川へ子供連れて見に行った。照明弾を落として、どんどこどんどこ爆撃です。」

京都も空襲に無縁ではなかった。「京都かて落ちてますのやで。東山に落としてますのや。焼け跡、トラックにいっぱいに放かしてはった。それから、京都にモンペの上下というもんが流行ったんどす。」「夜の十時頃、ビビーいうて来たなあ、と思うたの。夜で寝かたがちゃんとしてませんやろ。モンペの上下をはいてなかったら

死骸は運ばん、と言うことになってね。それでモンペということになった。モンペ上下に頭巾でなかったら、歩けないようになった。」「中立売にも落ちましたで。主人の妹が嫁に行ってる先で、よう分かるの。一家六人即死いうところもあった。京都では二ヶ所落ちてますねん。」[1)]

「いつ落ちるか分からしまへんやろ。いつ何時、神戸や大阪みたいにやられるかもわからん。皆が親戚をたどって、田舎へ田舎へどすわ。学校もあらしません。毎日モンペ上下をちゃんと着て寝んならん。自分の部屋だけ一つ残しておいて、焼けてもええように大事なものを運んだの。三法をやってる航空機会社に電話して、『すぐに車一台来ておくれやす』と言うてね。里やらよそやらへ分散しました。」昭和二十年三月の大阪大空襲以後、京都でも疎開が始まった。[2)]

「うちの子はわたしの田舎へ預けました。女中をつけてね。そうしたら、和歌山から上陸して来ると言うので、またこっちへ引っ張って帰ってね。」「雲ヶ畑に『畑かく』さんという料理屋さんがあって、今でもありますやろ、どこかに貸そうと思うてはったんを借り

[1)] 田村恒次郎（59）に、昭和二十年一月十四日に東山線松原に爆撃があり、二七十、八十名の死傷者であった、と記録されている。二回目の空襲は、島原瓦斯会社であった。

[2)] 同上（79）。大阪の次は京都だという噂で、京都の人たちは先を争って疎開を始めたという。

ました。ポンと千円でね。あの時分、千両いうたら大きい金でっせ。二、三千円で家一軒が買えた時代です。その千円が現金ではなかなかない。それを二、三日で千両用意したの。」

「雲ヶ畑は山中三里でね。夏は涼しいてええけど、冬はもう寒くてねえ。横着な男の子三人やさかいに、言うことときかなんだら外へ放り出す、と言うてよう怒りました。」錦にいると、「空襲情報、というてラジオがやりますのや。『和歌山上空に敵機』とラジオが言うと、『行って来ます』と言うて、戸は開けたままで自転車乗って逃げるの。戸を開けといても、あの時分はものを盗られへんのどすわ。戦争が終わるともうあきませんでしたけどねえ。加茂まで逃げたら、そこに知り合いがあってね、そこまで行ったら、なんとか山の中まで逃げられるしね。町の真ん中でうろうろしてたら、やられますがな。」

疎開先の子どもの顔を見によく行った。「雲ヶ畑まではバスで行きました。一時間あったら終点まで。『バスが止まるたびに子供さんがのぞきに来たはります』と『畑かく』の人が言うてました。」「あの時分、お醤油を一升瓶であげといたら、喜ばはったの。四斗樽一つあげたら、炭やら柴やら十六、七俵くれはった。疎開先は料理屋はんやし、桧でできた四角のええ風呂がありました。お醤油あげたら、トマトやらいろいろまわしてくれはったの。米やらも交換

してくれはったしね。そやから、食べ物にはあんまり苦労してない。」子どもを疎開させ、聖子は商売一筋に「気張った」。

4）戦後

終戦の時は雲ヶ畑にいた。「しばらくは家へ帰って来ませんでした。やっぱり怖いさかいねえ。天皇陛下様のお言葉は、ちょうど雲ヶ畑で聞きました。」「『あっちが入って来たら、皆どうなるか分からへん』というような怖いこと言わはるの。帰られしまへん。男の人は皆怖がってはるの。支那事変で、むこうでいろんなことしてはるさかいにね。見て来てはりますやろ。それで、『あっちが入って来たら日本人もやられる』と言うてね。女は見てしませんわなあ。堂々としてますねん。男の人は、『女をかくまわないかん。顔に墨をにじくらないかん』なんて言うて恐がったはるの。えらい目にあわせて来た人は、自分らに覚えがあるのどすやろ。女は知りませんから、堂々としてます。」いざとなると、女の方が強い。

戦後の混乱はあまりなかった。「京都へ入って来た人は紳士的でした。進駐軍が紳士的なええ人を送って来はった。娘はんやらに悪いことする人なかった。よそでは、ひどい目に遭うた人がいはりますがな。聞いた聞いた。ものすごくひどい目に遭うたと聞きました。ここでは、子供にチョコレートあげようとかね、わりあいと紳士的

なええ進駐軍でした。京都はひどい目に遭わんでよかったと言うてますけど、端々では『おかしいのが来て怖わおした』と言うたはります。子供らはチョコレートを貰うて、進駐軍てええ人や、と言うてます。」

「世間が落ち着いてきたので、わたし、子どもを疎開先に迎えに行ってたんです。その間に、この家を見に来はった人がある。女中さんが言うのに、『家主さんと男の人が来た』てね。田中伊助さんというて、京都一の貸家主さんでね。戦争が終わったあとも、ずっと頼みに行ってたんです、『この家を譲ってくれ』てね。『主人が兵隊に行ってるだけで、店は何ともない。どんなことがあっても、売らはるのなら、わたしに言うてくれ』と言うてました。それを、子どもを迎えに行ってる間に、男の人と家主さんが見に来た、てねえ。」

「家を見に来た人は、高倉通り上がったところの桶屋はんです。弟はんの家を買おうと思うて来はったと言うの。子供を連れて帰るなり、ぱっと向こうへ行ってね。『今日帰って来たら、男の人が見に来たはると聞きました。それは何どすのや』てね。すると、『男と男の約束で、二千円の手付けで売りました』とこう言うの。『あんまりや。女やと馬鹿にしなはんなや』と切り返したんどす。あんまりむかついたしね。『終戦後、すぐにお願いに上がりましやろ。

どんなことがあっても、一応は耳に入れていただくようにと。それではわたしとてもよう買いませんと言うようなら、それはそれで結構です。それを、一言もなしに何ですか』てね。『そんなひどい家主さん、一般の新聞に出したる』とまで言うたの。『世間一般の人に聞いて貰います。よそのお方に聞いて貰います。命かけて、三年間、この家をちゃんとしてきて、一言の断りもなしによそに売るとは何ですか。倍返しにしましょ。手付けを倍にしましょ』てね。『そんなら、向こうへ言うて行ってほしい』と言わはるの。」

男に伍して、いや男以上にやってきた者に、あまりに軽い扱いであった。「その足でむこうへ行って、『あんたは知ってはりますやろ、うちの主人がどこへ行ってるか。知らんはずはない、同じ錦に住んではるのに。一言もなしに、あんまりなことしなはんなや。女や思うて馬鹿にしなはんなや』と言うたの。『三万や五万や十万の金を持ってないで、商売はやっていけしまへん。女やと思うて馬鹿にしなはんなや』てね。」

「田中はんは、『女で子どもがあってはそんなことはできんと思うて。恥をかかしたらいかんと思うて』と言うてはったけどね。『そんなん思うのはおうちの勝手です。前から、耳に入れてください、とお願いに上がってますのやさかい、ちょっと言うてくれはったらよかったんどす。女や思うて馬鹿にしなはんなや』と言うてね。

大きな用心棒と、息子はんと、三人でいはって、『まあそんなに怒らんと』と言うてはったけど。」

「そら興奮してますわなあ。そらもう命がけや。なにくそ、と思うてますもん。『錦でわたしのこと知ってはりますやろ。誰が女で一人錦にいはります。男でも錦にいないのに』てね。『警察の三法で、お国のためやと頑張ってきましたのや。子ども三人かかえて、里が帰って来いと言うても、命がけでこの家をお守りしてますのや。それを、一言の言葉もかけんとよそさんに売るとは。この家、三年も四年も守りせんとほっておいてみなはれ。家も腐ってしまいます。ちゃんとお守りしてるから、家もちゃんとしてます。倉庫にして守りしてますのや。あんまり馬鹿にしなはんなや、女や思うて』と興奮して行ったら、『さあ、そんな興奮せんと。まあまあ』と言わはってね。」大の男を相手にして、一歩もひけを取ることはなかった。

「奥さんが出て来はって、わたしこんこんとお願いして帰りました。『ちょっと声をかけてくれはったら。女やと思うてあんまり馬鹿にしたはる』と言うてね。それで、すぐに倍返しで、主人のものにしました。」「そら、持ってるものを持ってなかったら、言えしません。今の四千円とは桁が違いますしねえ。手付けだけで、端々の小さな家が買えた時代です。」

当時としては、相当の金を動かしていた。「子どもの小遣いに八

円や十円やというと、ええお小遣いでした。もう忘れてしまいましたなあ。想像もできん時代です。」「これだけの地所をね。家の中もこみいって作ってあって、ちゃんとできてたからねえ。それは高いもんでした。」「以前は鰻屋はんと聞いてます。鰻のへたったのも置いてあった。二階の食堂にしてはったところにね。それでも何年も放ったままでしたし、地所だけの値で買うたんです。その分、安く買えたんです。家もちゃんとしてあったら、もっと取られてますやろ。なにしろ百坪ですしね。」金はあったが、大きい買い物であった。

通り庭が家の奥まで続く、京都の典型的な立派な家である。「二階に上がって見たら、うちがいちばん深いのどす。隣は店の次の間で終わりです。両隣が、横の通りからこっちへ入ってきたはる。隣組は表の六畳しかあらへんの。表だけの店の人は皆、店と家と二軒持ったはります。」錦小路から南の四条通りへ向かって奥深くつながって、京都のいわゆる「鰻の寝床」の作りの細長い家である。通りをへだてた向かいの本家も、一つ北の通りである蛸薬師通りへ向かって奥深い。「角がかしわ屋はん。通りを曲がって、喫茶店、ガレージ、電気屋はん、ハンカチの問屋はん、お医者はん、そこまでがうちの奥」と聖子は言う。蛸薬師通りから、やはり大きな家が入り込んでいる。「りっぱな蔵が三つ四つありますの。そこまでうち

の座敷が入ってます。」大店の作りの家二軒を、聖子は自分のものにした。

夫は昭和二十一年にようやく帰って来た。「たったの十一貫。見る影あらしまへん。骨と皮。背も小そうなったはった。ソロモンのむこうのブーゲンビルでね。全滅ですわ。四十何人しか帰って来てはらへん。病院船で帰って来はったの。顔は黄疸。栄養失調でね。帰って来はったと言うので、京都駅へ迎えに行ったの。小そうおしたで。」政次はそのまま入院してしまった。

「兵隊から帰って来はってからでも、お友だちはころころ死なはった。『ジャングルの中に入ったはったのやから、赤ちゃんを育てるみたいに面倒をみないかん』とお医者さんに言われてね。十日や二十日やなしに、三年間もジャングルの中やしね。」「胃がこないに小さくなってるの。食べる物があらへんなんだし、草を食べてはった。お腹を手で押さえて、体を二つに折って死んでいく人が多かったというの。人でも食べようか、というくらい食べ物がなかったのやもんねえ。」悲惨なジャングルの持久戦で生き残って帰って来たのである。

政次は「若い間、柔道したり、相撲とったりで、体鍛えてはったから丈夫でね。」「西京極は、相撲が盛んで。今でも言うて来はったら、寄付したげる。若い時、優勝五回貰うてはるのよ。齢が若う

てもね、ええとこあったんや、なかなか。百姓が嫌いで、大阪へ奉公に行かはったけど、百姓の子やさかい、草でも木でも何でもとって食べはったんでしょう。町の人やったら、そんなものはよう食べん。皆お腹通して、ころころとね。」

「せっかくここまで命を持って帰って来はって、ここで死んで貰うたら困る。夜昼おかゆを作って、ほんまに一生懸命に看護しました。」ブーゲンビルで生死を共にした仲間とは、政次が連絡係となって、今でも年に一回の戦友会をやっている。[1]

元気になって感謝していることを、「主人は、わたしには何にも言わはらへん。親戚には言うてはるのね。喜んだはる、と親戚がわたしに言うてくれはる。同情されたら、と主人は思うて、わたしには言わはらへんのです。」「こっちも恩に着せしまへん。戦争は命がけ。わたしかて、子ども抱えて、食べる物はろくにあらへんし、こっちかて戦争以上ですがな。子ども抱えて、家の守りしてね。食べ物はお金出してあるものと違うのやもんね。」「配給所で、お肉というても、三遍で一遍もあらへん。お魚でもおへんがな。かしわもおへんがな。食べられるものを何か欲しいというても、店は皆、戸を閉めたはる。えらいひどいことでした。」[2]「皆が買い出しに

---

[1]高橋三郎によると、戦争末期に南方戦線にいた多くの部隊が全滅状態になった。悲惨な戦争体験を持つ戦友たちの方が、戦争を思い出させないような、しめやかな会合を持つ。

[2]田村によると、昭和十九年になると食料事情が悪化し始めた。

行ったはったの。わたしは買い出しに行く間がなかって、行かへんなんだけど。」戦争に行った夫だけでなく、家に残った聖子も国内の戦いを戦っていた。

「子ども三人。一年生、四つ、それに生まれたての子。これを抱えてやっていかんならん。女やさかい、なにくそ、と思うてね。男の人やったら家庭の日々(にちにち)のことに慣れてはらへんし、とてもやっていけんでしょう。女はそういうことに普段から慣れてるから、案外やっていけます。」「男の人は奥さんが死なはったら、続いていかしません。慣れてはらへんでしょう。女は日々(にちにち)のことやさかいね。」「主人がいはらへんなんだら、世話をせんでええから、気楽な。うるさい主人がいんで、自分だけでやっていったらええのやさかい。」女一人は強い。

主人が帰って来るまでに、商売は軌道に乗っていた。「第一回の商売がうまいこといった。よそさんは商売をようしやはらへなんだけど、わたしは産地との取り引きがありますやろ。つながりがありますわなあ。」「経済封鎖があって、お金が皆一列になったわね。たしか八百円やと覚えてるのやけど。」[1]「産地が新円をつかもうと思うて、品物送って来たんですわ。わたし、旧円握ってね、三井銀行の裏から入って、びゃっと送ったの。むこうは泣きましたで。

---

[1] 新券切り替えの金融封鎖は、昭和二十年二月。世帯主に三百円、家族一人につき百円であった。（有沢広巳・稲葉秀三、44）

『そんなこと言うても、新円でという話はできてない。あんたとこが品物を送って来たさかい、わたしはすぐにお金を送った。新円で、なんて聞いてない』てね。頼みに来ましたで、ここまで。」「わたしは旧円を持ってたからね。持ってなかったらできんこと。時間ぎりぎりに三井銀行から送ったの。むこうは新円で取ろうと思うてた。第一回の商売はうまいこといった。わたしは新円でとってしもうた。」終戦直後の経済的混乱は聖子に有利に働いた。

「主人が帰らはった時には、商売をじゃんじゃんやってました。主人は、『商売がもう分からん。お金の桁が前とは違う。怖い』と言うてね。『命がけで帰って来はったのやから、もう何にもして貰わんでええ』とわたしは言うて。ただお役だけしてはったらよろしい」ということで、政次は商売を聖子にまかせて、体調が回復すると錦のための活動を始めた。

「ここ十年ほど前まではお役だけ。お役がたくさんありますねん。錦のだけと違う。会長をいろいろ持って、十四、五ほどですか。あらゆる会長を持ったはったの。」戦後、錦のために働き始めた政次は、そのまま錦の範囲を越えて、京都全体の活動をしていくことになった。

まず、錦が闇市のようになっていたのを、政次が中心になって整理した。「そらいろいろありました。闇で引っ張られる人もたくさ

んでね。とくに魚屋はんが多かった。わたしらのところは、味噌やら沢庵やらが主で、闇はない。魚屋はんは毎日です。『今、五条署に主人が引っ張られた』と言うて駆け込んで来はるの。『どないかして』てね。お父さんが行ってあげたはった。『何とか頼む。色つけてくれ』と交渉して、没収を何とか話し付けてあげはったの。」「ある時、『お父さんは留守です』と言うたら、『奥さんでもええ。ちょっと来て』と言わはってね。行ってみたら、冷蔵庫を押さえたはりますの。『今、お父さんが電話かけてはるし、ちょっと待ってね』と嘘ついてね」と、聖子は思い出すように笑った。

「税務署もです。白色申告の間は、税がどんどん上がりますやろ。かわいそうに、取れないところからでもどーんと取らはりますやろ。取れるとこでも、いろいろと事情はあったさかいね。『錦の様態は毎日歩いていたら分かる』と言うて主人は歩いたはりました。『ここはもうちょっと何とかしたらなあかん。あっちはこれでもええけど』て、税務署とやったはりました。青色申告になってからはもう知らんけど。」

「主人は、言うて悪いけど、錦のために相当活躍してはります。」最近、齢がいったので「理事長を辞める、と主人が言うたら、『あんた錦を潰すのか』と皆に言われました。」政次なしに戦後の錦の復興はなかったのである。

戦後いち早く、聖子は鮨屋を始めた。政次は帰国早々で、三年間は寝ているような生活を送っていた。「この南側の店は倉庫にしてました。もう買うてあったわね。はじめ喫茶店にしたのやわ。スター食堂のえらいさんに来て貰うてね。氷をかいたりしてね。ちょっとの間やったけどね。お漬物屋もちょっとしてたのかな。」そこへ友人が「『お鮨屋をしやはらへんか』と言うて来はった。わたしのお連れが看板を持ってはったの。三条の井筒屋さん、八ツ橋の。そこが鮨屋をしないでいると、看板を組合に返さんならん。取られてしまうんどすわ。組合の規則があるんどす。看板をお返しになると言うの。『慣れんことをして失敗するのはかなん』と言うたのやけど、『わたしになら譲る』と言わはるもんでね。」

芝居小屋や映画館がある繁華街、新京極通りには食べ物の店にかぎらず、店というものが一軒もなかった。「わたしのところが始めた時には、新京極にもおへん。店が何にもなかった。どんぶりもうどんもない時でした。戦後で、昭和の二十三、四年でしたかなあ。戦後三年くらいは闇でしたわな。」

店の前に「行列ができて、切符を渡しました。わたしのところ奥行きが深いですやろ。切符を渡して並んで貰いました。」表だっては食べ物屋はできなかった。「お米との交換で、加工賃だけしか貰うてなかった。まだ時代がねえ。お米が公けに売れん時です。まだ、

うどんやどんぶりを売れない時です。持って来はったお米を炊くのどす。滋賀県とかね、米の本場のを持って来はるの。」交換でというのは「看板でね。食べるのは、向かいのお漬物屋で食べて貰うてね。」南店で加工賃をとって物々交換をしているようにし、北側の本店で客に食べさせた。

「人手はありました。新聞広告を出してね。板場はんも伝手があって、まわして貰いました。京都はあきまへん。大阪の一流の食べ物屋はんからね。板場はんを紹介する場所がありますのや。そこの親方がええ人でね。どのくらいの給料で、とわたしが言うておくと、人をまわしてくれはるの。そこへ頼んで、大阪の一流の指折りの人を頼みました。ものすごう味付けが上手でねえ。」職人たちは仕事をしたくても場所がなかったので、いくらでも大阪からやって来た。

錦の外ではマーケットを作った。「北大路の『錦マーケット』というのがはじめてでね。北大路の大宮。あそこが京都でいちばん最初にできたマーケット。主人が段取りして、ちょっとくらい奉仕してもへたらん人を寄せて始めました。錦と一緒というので、『錦マーケット』と名前を付けてね。品物は新しいし、値段は安い、というのをね。ものすごい評判でした。ぽーんとはやったんす　。」

「白川からも呼びに来はった。主人に来てくれ、と言うので引っ張られましてね。『白川マーケット』と言いました。」「五条にもで

きてね。五条のどの辺やったかな。わたしは店出しには行かなんだし、覚えてません。百万遍にも出しました。」「北大路では鮨屋に漬物屋を、白川には鮨屋と漬物屋を出しまし。百万遍は佃煮屋と漬物屋。五条にも出しました。それに、ここですやろ。向かいの本店。錦の中にもう一つ支店。何軒やったのか分からへん。山科にも出しました。十一、二軒の店を切り回したんどす。」

北大路が京都でのマーケットというものの最初で、それからあちこちにマーケットができ始めたと聖子は言う。「いちばんはじめは主人の北大路ですねん。何年やったか忘れた。昔はだいぶはやったんどすえ。今はもう、古くなってね。どこも建て替えはらへんしね。北大路も古くなってね。なにせいちばん古いのやさかい。」マーケットが古くなるとともにスーパーが新しくでき、マーケットもスーパーに変わってきている。

聖子の商売はますます大きくなっていった。「職人さんと店の者とで、四十人から五十人位いましたかなあ。」ある時、南座の観劇会のための大口の注文があった。「山科の大きな会社から注文に来はってね。まだ闇の時代でしたかなあ。砂糖やら米やらを呉れはりました。南座に入らはる分、千人前以上でした。お店がちょうど七軒あったさかいね、鮨屋と漬物屋を合わせて。板場はんがそれぞれのお店に二人ずつとしても、六人ですやろ。下職の人もいはるしね。

漬物の方にも人があるし。晩の十時から始めて、明くる日の三時に納めるの。徹夜です。あんまり長い時間かかったら腐ってしまうしね。よそやったら、小さいところでは三百とか四百とかずつしかできないので、四、五軒に割らんならん。うちは構えができてるし、道具が揃うてるからね。扇風機まわして、だーっとやった。」当時の京都に、それだけの人数分の弁当を揃えられる店はなかった。

世の中が落ち着いてくると、新京極にも店ができ始めた。「三、四年後には、儲からんようになってきたの。どどおんと儲けが落ちてきた。錦は晩が早いでしょう。一軒だけここにあっても、ものが出んようになってきてね。」店は集まってないと人が来ないと言う。「新京極にあちこちに店ができてきてね。統制が解除になったら、何でもできるようになったから。うちが新京極にあったら、お鮨屋をやっていくんですけどなあ。」

「昭和二十五、六年頃には、何でも売れるようになって。どんぶりでもうどんでも、鮨屋もできるようになった。わたしところだけがやってる時分には、おもしろいように儲かったけどね。せめて寺町にうちの店があったらよかったのやけどね。」

鮨屋に見切りをつけることにした。「昭和二十七、八年くらいまで、鮨屋をやってたかなあ。中央市場が復活して、ここらの問屋はんが向こうへ行かはるようになったと思います。うちも、小売りと

問屋と両方でしたけど、小売りだけにしました。」世の中が落ちつくと同時に、拡大一方の商売の安定を考えるようになった。

5）家を続ける

子どもが店を継いでやっていくことも考え始めた。「あの時分は支配人とか、そういう者は誰もいなかった。わたしが第一線でやってました。細かいところまで目が届かんようになってね。」「お父さんにも言いました。『こんな細かい商売ではあまり儲からへん。とくに端々の店は細かい商いであかん。』人手もだんだんと無いようになりました。大きいところに取られてね。端々の店を放かして、錦三軒にまとめよう」ということになった。

鮨屋は「子どもが若いから、板場はんをよう使うていかん。板場はんというのはなかなか難しいんです。子どもが継いでいくのに何かいい商売はないかなあ」と考え始めた。

「わたしがここへ嫁いで来た時、千枚漬けだけで食べていける、お爺さんの代からやったはる古い漬物屋はんがありました。そことは闘うたけどねえ。千枚漬けだけは、何十年とやってはるだけあって、負けました。それが、終戦後、ご主人が体を悪くしはって。嫁さんが引っ込んでしまわはってね。それで、わたしとこが勝ったの。三法でわたしとこはちゃんとやってましたさかいね。」主人がいな

くても、商売を切り盛りできた聖子の努力が実を結んだ。

店を続けていくためには「子どもでもできることを考えんといかん。続けられないということは怖いなあ、と思いました。それで、進物に切り換えました。進物だけでいけるように、千枚漬けだけでも食べていける店に変えました。」太刀打ちできなかった古い漬物屋の商売の仕方を継いでいくことにした。

店の主人役も代わらなければいけない。「わたしは、息子が嫁を貰う時に、ぱっと手を引きました。店はまかしてね。親がいつまでもいたら、親を頼りますやろ。」「何かあった時、突然に息子にまかしたら、子どもはあぶつきます。」

「わたしはずっと商売をやってきたさかいに、主人が五年間戦争に行ってる間、何も分からんということなかったでしょう。主人が今までお役をたくさん持ってはったのは、わたしが第一線で、主人を放ったらかしにしてあったさかいです。主人がずっと商売をやってたら、わたしは商売ができませんでした。」「あの時分、ご主人が一生懸命商売をやってはって、兵隊に取られたとたん、奥様、奥様、と言うていたところは、『明くる日から商売をようやらん』と言うて困ったはった。わたしは、主人が兵隊に行ったはる間、子どもを抱えても、商売の分からんということがなかった。それを自分で体験してますやろ。そうやさかい、子どもも自分でね。」「お婆

ちゃんがいつまでも店に出ていって、子どもにやあやあ言うて、ということしてたら、何かが起こった時に子どもが困る。遠くから見てやってたらね、いざいう時に子どもは困らんでもええ。」「わたしはわざと体をかわしてしまいました。」商売は、自分の力で覚えて、自分の才覚で続けていくものなのである。

長男和義は自然に跡を継いだ。「『学校が終わったら、よそへ見習いにやる』とは言うてたのどすけど。『学校へはやってやるだけで、終わったら見習いやで』と言うてました。」「店の手が足らしませんでした。それで、そのままずっとお店を手伝うことになりました。」「お兄ちゃんは、『よそへ行く』とは言わしませなんだ。月給取りになっても、子どもを大学へあげたりとかがなかなか大変ですもんねえ。」「商売は気張ったら気張っただけのことがあります。えらいですけど。二倍も三倍も気張らなあきまへんけど。やったらそれだけのことはあるからねえ。『よそへ行く』とはあの子は言わしませなんだ。ただ、漬物屋をするかどうかは心配しましたけどなあ。」「わたしも、『継げ』とは何にも言わしませなんだ。自然とね。」跡継ぎは作ろうとしてできるものではない。

次男正次郎は婿養子に行った。「弟二人も同志社大学です。上の弟は、ぜんぜん畑が違うのやけど、婦人服の問屋さんへ養子に行きました。夢にも思わなんだけど、養子に行きました。」

三男高雄は和義と一緒に店をやっている。「下の弟は、小さい頃、あまりかまわなんだ。店がこれだけ手広うなってくると、忙しいので子どもに手がまわらしません。」店を継ぐとか継がないとか、悠長なことは言っていられなかった。「手伝うて貰わなりまへんのや。東京の売り出しに来てくれ、とかね。ハワイに店出す、とかね。手が足りません。」「去年、ハワイに店を出しましたの。ちょいちょい来てくれはるお客さんが、何というのやったかいなあ、いちばん大きい百貨店の人でね。現金で先に送って来はりますのや。むこうの店の子には、『一ヶ月しか行ってあげない』と言う約束で、品物を先に送っておいて、一ヶ月で帰って来ました。今は、東京の店へ行ってます。」三男は、錦から出て、自分の商売として店を広げていく。

政次が戦争から帰ってから、長女が生まれた。「お父さんが帰って来はってから、女の子ができたの。淑子。錦をずっと向こうへいった室町に嫁に行ってます。」

次男は、商売が違うとはいえ、京都にある店に婿養子に行き、娘も近くの室町の繊維問屋に嫁いでいる。長男と三男は家を継ぎ、商売を盛んにする。二代目の世代は、京都の世界に確実に定着していく。

「お兄ちゃんはここに住んでます。わたしらは向かいでね。」長

男は南店の三階に住んで、北側の本店に住む両親と同居同然の生活をしている。長男として、家についた後継者である。

「高雄は嵐山に住んで、ここへ勤めてます。正次郎は下鴨にいます。植物園の電車の停留所を下がったところで、門構えのある、瓦の青い三階建の家にね。」「あのあたりはよろしいなあ。ええ家ばっかりですなあ、加茂川沿いの。」

三男は、東京の店の世話をするだけでなく、家も錦には持たない。「嵐山の家をちょっと前に買いました。坪四十万円か四十五万円かで買いました。ええ時に買うたわ。五十坪ね。地所だけで二千万。そこへ家を建てたら、三千五百万もね。下鴨は一坪が百万円もするてねえ。」「松尾神社から嵐山へ行く道がありますやろ。表通りからちょっと入ったところ。景色もええしねえ。そこを買うてあげたの。二十五坪か三十坪に切って売ってたの。それでは車が置けしませんやろ。角地で、ちょうど大きい地所があって、そこやったら二、三台車を置けます。お父さんが、『しょうがないなあ。村の中へ入ったら、大きい家や小さい家と背比べでかなわんし』というのでぽんと買いました。」

「ここからも近いしね。タクシーに乗ってちょっとで行けるし。」「学校も新しいのがあるし、公園もあるし、環境もええ。座敷から見たら、山がきれいに見えるしね。表通りやったらほこりもあるけ

ど、ちょっと入ったらほこりもあらしまへん。外の音も聞こえないしね。」「川のむこうは環境が悪い。藤原堤のむこうね。地が悪いと聞いてますの。環境が悪い所はかなわんし。子供の幼稚園や小学校がかわいそう。」「山の近くは湿気ふくんでかなわんのやけど、ちょっと手前やしね。山の近くは風が入ってこないで、湿気がかなわんの。雲ヶ畑にいたし、よう知ってますの。」錦にある本家からの距離、よい方角、土地の環境までも十分に考えて、三男の家を作ってやった。

孫は十人いる。「お兄ちゃんとこが三人。下鴨が三人。嵐山に二人。娘のところに二人。」「お兄ちゃんは結婚して十一、二年になるのとちがいますかなあ。ハワイに行ったの、結婚式のあれで。そう、新婚旅行。子どもは四年生、一年生、幼稚園です。いちばん上が男で、あとは女です。もう一人欲しいなあ、と言うてたんどすけど、これは仕方がないわねえ。一人でも欲しい子ができない人があるのやさかい。」望めばきりがないが、長男に男の子が一人いれば十分である。

「わたしらは向かいの本店にね。上に六畳が八つある。そこにわたしと主人だけが住んでます。お嫁さんを貰うのに、ここの三階をね。若夫婦が気楽なように。近いところにね。いざという時はすぐに行けるようにね。」別棟ではあるが、近接して同居のようにして

住んでいる。

「子たちは、はじめから別居する、と言うでしょ。水臭うなるんですわ。孫もお婆ちゃんになつかないしね。」「はじめは新所帯で、と思わはるでしょう。間違いよ。子どもが一人二人とできたら、嫁さん一人では大変よ。どんなかわいそうか。お婆ちゃんにちょっと見ておいて貰うたら、夫婦二人で出かけて行ける。」「お婆ちゃんに、ちょっと頼む、と言うてね。おみやげの一つも買うて帰ってあげたら、お婆ちゃんは喜んではる。嫁さん一人やったら、子ども連れてちょっと出て行くのにも、おしめ下げて行かんならん。お婆ちゃんがいはると楽なもの。『頼みます』と言うて、二人でも出て行ける。小さい子を連れて、寒い時なんか、行けませんやろ。」「同居は悪い時もあるかも分からんけど、ええ時もあるの。」親子、孫はいっしょに住むべきだと言う。

「若い人は、はじめは知らんの。婆々抜き、とか言うてはったけどね。今はお婆ちゃんあり、とか言うてはる。若い人ははじめは知らんさかいね。暮らしてはじめて分かる。新所帯、結婚したての頃はええかも分からんけどね、子どもができて同居のよさが分かる。」「わたしのところは、幸い一緒にいるしね。」

「孫はかわいいでっせ。『お婆ちゃん』と言うて来てね。上の二人は、わたしと寝ると言います。上の男の子、四年生のが、わたし

を離しません。下ができたし、上の子をとってあげたでしょう。とってあげると、『一人になって、かわいそう、かわいそう』てしてますやろ。次の子も、三人目ができた時、とってあげましたでしょう。喜んでわたしところで寝ます。お母さんも楽なしねえ。」「はじめに離れていると、どっちも水臭くなるんです。子どもも、『お婆ちゃん、お婆ちゃん』とあまり言わへん。一緒にいることになるのやったら、はじめから別れんとずっといるのがいいわねえ。」

和義の嫁は跡継ぎとして店に入った。「やっぱりお母さんが舵をとっていかんならんのやろねえ。何も知らんお嫁さんなのやからねえ。店の子の前では恥をかかさないようにね。笑われるようなことがあってはねえ。自分の子と一緒なのやさかい。自分の娘やったら、親は理解しはる。娘のない人は、それが分からん。自分の娘が、よそへ行ってこんな目に遭うたらかわいそう、という気がわたしにはあるからねえ。わたしは嫁さんを大事にします。」

女主人の座はすぐに嫁に譲った。「わたしは、いつの間にか、知らん間に、奥へ行きました。けど、赤ちゃんができたら、しばらくは働くのは無理でしょう。三人の子どもがいたら、しばらくは手が離れしません。十年ほどはね。赤ちゃんが小さい間は、どうにもならん。店に入っても、すぐおしめや何やのいうて、店から出て行かんならん。下の子が幼稚園へ上がるようになってからは、ママちゃ

んお店に出て頑張ってくれてます。」

「うちは、嫁と仲がよろしいの。やっぱり、お母さんの方がね、店の子の前では若奥さんをたてるようにしてます。」若くても女主人なのである。

「お手伝いの方が、古いのやからねえ。十年も働いてるのがいます。中には、十七、八年も働いているという古いのがいますしねえ。『おさんどんの方は、あんたらの方が校長先生ですのえ。ここへ来る前に十年習うてきて、わたしとでも十何年やって来てるのやから』と言うてね。『お花でもお茶でも、十年も十五年も習うてきたら皆先生になる。あんたらはもう校長先生なのやから、あんじょう教えてあげて』と言うてます。『言葉使いもきれいに言わないと、結局はあんたらが笑われるのよ。わたしが何と言うても、若奥さんがあとを継がはるのやさかいにね』と言うてきかせてます。」

「嫁には、『ちょっとくらい足らんところがあっても辛抱しなさいよ。今日日(きょうび)、女中さんのなり手というのはあらへんのやから、いないようになったら困るのやから。辛抱しないといかん。上手に使わないとあかん』と言うて。」「『若い者にも気を使うてね。ちょっとした物でも、貰うた物はあげるのよ。ちょっとしたことで喜ぶのやし』と。ちょっとしたことでも、『すんまへんなあ』『いいえ』と言うてね。」「若奥さんはうまいことやったはります。」

気を使い合うのは従業員との間だけではない。嫁姑も助け合う。「朝でも、お互いがちょっとずつ助け合うてます。子どもの着物の洗濯でも毎日してますやろ。それを、わたしがちょっとしておいてあげてね。そうしたら、嫁も、わたしのせんならんことをちょっとしてくれますやろ。」「それを、『わたしが嫁に来てるのに、なんでお婆ちゃんがこんなことをするの』とかね、そういう心使いをもったら、もうあきませんわ。やっぱり互いに助け合いでね。ちょっとした真心です。」「嫁も、自分の子どもをお婆ちゃんにちゃんと面倒をみて貰うたら、嬉しいもんですわねえ。」「お互い」ということが大事である。

人のためは自分のためでもある。「自分が可愛いかったら、嫁や子どもを大事にしないといかん。わたしら、自分の娘をよそへ嫁にやったら、よその子やと思うてる。わたしは、嫁の方を大事にします。」

「嫁さんの悪口ばっかり言うてはる人もいはるしねえ。それは間違いです。嫁に来た子は嫁ぎ先のことは分からんのやから、うまく教えてあげないと。」「『何でも訊いてや。わたしはこんな性格なのやから、気にしなくてええのよ。何でもええから、言いたいこと言いなさいや』てね。」

小言も言う。「『お母さんは、あんたが憎くて言うているのやな

い。よその人に笑われたらいかんから、言うてる。あんたはお店の子と違うでしょう。あんたには、この家の跡を継いで貰わないといかん。あんたが人に笑われたらいかん。店の子とは立場が違うのやから、こうしないといかん、ああしないといかん、と言うのよ』と言うてます。」嫁の教育は、家を続けていくための姑の務めである。

6.家を守る女

1）嫁いだ頃

美子は、錦に三代続く仕出し屋「富松」に嫁いで来た。昭和九年であった。「その時は料理屋。仕出し屋どした。今のこの商売とは違いました。」今は、塩干物を扱う店となっている。

京都には仕出し屋が多い。毎日のおかずの焼き魚一切れから、何十人という宴会まで、料理一式を仕出し屋が客の家へ運ぶ。「おかしいこと言いますけど、京都でも、仕出し屋の富松というと、ちょっと有名でした。」屋号は初代富田松吉に由来する。

「わたしが片付いて来た時には、お婆さん、お父さんとお母さん、それに主人の姉さん、弟さんがいはりました。わたしと同じ齢の妹さんも。」主人は定一郎、舅は定治郎である。主人は定治郎を代々名乗ってきた。この名前は美子の長男に受け継がれる。主人の姉は当時は独身であった。姉は、一生をこの家で過ごすことになる。

「店の者が十人あまり寝泊まりして、通勤が七、八人いました。女中さんも、こんな狭いとこですけど、六人いました。」「台所から店にまで女中さんが寝たはりました。」京都では一流の大きな仕出し屋であった。

「女中さんは、道具出し、ご飯炊き、庭まわり、家の中のことをする人、主人の家族の世話をする上女中、それに雑用をする女子(おなごし)衆

さん、六人でした。わたしらがお嫁に来た時分には、庭に降りられしませんでした。」台所仕事、掃除、洗濯という普通の嫁がする仕事は一切しなかった。美子は女主人になるために嫁いで来たのである。

女中は滋賀県から勤めに来る人が多かった。「同じ場所からです。北比良のあたり。縁故で次々とね。」辞めた後でも、「忙しい時には手伝いに来てくれたり、今でも里みたいに思うて遊びに来てくれはります。」奉公人の出身地とも、またかつての奉公人とも、密接なつながりを持っていた。

「上の女中は、お母さんのしはることを皆やってはりました。足袋が破れたりすると、『はあどん』、お春どんと言いますのやけど、『足袋が破れた』という具合でしてね。」女主人の母親に代わって、上の女中が子どもの世話をしていた。

「お乳はおんばどんがいはりました。わたしがここへ来た頃でも、『ばあやん、ばあやん』と言うてね、主人はもう二十六にも二十七にもなってるのに、おんばどんが遊びに来たはりました。大阪から、『ぼんちゃんどうしたはります』と言うてね、よう訪ねて来たはりました。」女主人は、子どもたちにとってふつうの母親ではなかった。

仕出し屋には「折り詰めなんかの注文がたくさん来ます。また、

婚礼やら法事やら、いろいろの注文が来ますと、毎日毎日、何百という道具が出ては帰って来ます。女子衆さんがそれを洗わはりますと、わたしらは上に座ってて、きよ拭きをしますねん。塗り物は皆きよ拭きをします。わたしらそういう役で、『きよ拭きしておくれやすや』と言われてね。」漆塗りの器を拭いて点検することが、女主人の「見習い」の最初の仕事であった。

「お婆さんには、孫の初めての嫁というので、可愛いがって貰いました。上の女の子が十一年のお正月に生まれて、お婆さんはその三月に亡くなりました。それまでは可愛いがって貰いました。」女主人である姑よりも、先代の女主人である義理の祖母が身近な存在であり、嫁として育ててくれた。「お婆さんは、店の用が済んだら、寝たり起きたりしてはりました。昔のお婆さんというて、今のわたしくらいの齢どした。七十で亡くなってね。三年ほどいっしょにいたんです。今のわたしとちょっとしか齢はかわらしまへんの。ものすごくお婆さんに思いましたけどなあ。わたし、六十四歳と七ヶ月です。大正二年生まれどっさかい。」「この家に片付いて来て、四十三年になります。四十三年になってしまいましたんえ。」この家に嫁いで来てからの時間の長さをあらためて感じる。

姑は健在である。「お婆さんが、主人のお母さんですな、八十八でいはります。まだ元気でね。」「このお婆さんは、嫁入りしはっ

たんやなしに、先代のお婆さん、わたしが嫁入りして来た時のお婆さん、この方に子がなかったんで、お爺さんの身内から十二の時に娘に来はりました。ここへ養女に来はったとこへ、養子を貰わはったんです。お婆さんは内娘みたいな感じどすねん、十二の時に子どもに来はってね。」この家に生まれついての女主人と言ってよい。「お婆さんが何もかも切り回してね。お爺さんは仕事一途の人で。有名なほど仕事一途の人どした。」家付きの女主人が、店を切り回してきたのである。

「昔の仕出し屋いうと大変どした」と美子は昔の商売を振り返る。丁稚が、得意先の地域をそれぞれ分担して、注文の料理を配達した。「丁稚さんを四隅に分けて、東北の人、西北の人、てね。そこへ丁稚さんに配達させはるのどす。番頭が、毎日のお魚を聞きにまわって行かはって、店でこしらえて、配達して、夕方に道具をとって来はります。その道具調べ、鉢調べ、をするのが奥さんの役どす。」きよ拭きが、「見習い」女主人の最初の仕事になるのである。

この「鉢調べ」で丁稚の仕事ぶりが分かる。「毎日、『どこそこさん、何の鉢をとって来ました』と器を持って帰って来ると、丁稚さんを呼んで鉢調べをします。」「お婆ちゃんが、『ちょっと代わりにしといて』と言わはります。そういうことから習うて、わたしらはやってました。」

「ずぼらな丁稚は、『貰うて来ました』と言うて、鉢を貰うて来てないのどす。道具出しの女子衆さんが、蔵へしまいはりますわね。毎日、どこへ何の道具を出したというのは控えてあります。次の日に、前の日と違う丁稚さんをやります。お客さんの家に道具が残ってますわね。ずぼらな丁稚はこういうことをする、ああいうことをする、というのを教えて貰いました。」鉢調べを女主人がして、丁稚の働きぶりを見るのである。

婚礼などの大きな注文は大変である。「道具出しの女子衆さんは、何から何まで全部揃えんなりません。お箸から、お猪口から、お徳利から、ごはんのお茶碗から、おひつにおしゃもじまでね。お湯呑み茶碗にお盆までです。裏に皆『富松』と書いてあります。」道具のすべてに富松の紋が打ってある。

得意先の呉服屋などで客に出す食事の注文も受ける。「ある呉服屋さんは、松竹梅にお膳を分けてはりました。ええお客さんが来たはりますと、『松』と注文しはります。ちょっとしたお客さんですと『竹一つ』と言わはります。竹のお弁当です。おかずが決めてありますの。注文が来たら、丁稚さんが走りますの。お得意先によって、松竹梅が違います。竹は二品、松は三品、とかね。」それぞれの得意先でのお客さんの接待の内容が、符号で決まっていた。

毎日のおかず、魚一切れの注文もある。「室町の呉服屋さんは、

魚日(さかび)と言うて、一日(ついたち)と十五日はお焼きもんをつけはりました。」得意先の奉公人のおかずも、仕出し屋が用意した。家の主人には焼き魚などが毎日ついたが、奉公人には月のうち一日か二日が「魚日(さかび)」といって一切れの焼き魚がついた。あとの毎日のおかずは、家で作る野菜の煮(た)いたものと漬物という食生活であった。

正月も二日から商売があった。「正月二日からお客さんのあるとこは、お商売しはります。」正月の初商いの客のもてなしで、仕出し屋への注文があった。冠婚葬祭、四季折々の客の接待から、毎日のおかずまで、仕出し屋は料理の注文に応じていた。

大きい商いがあった時には、その客を接待するのに仕出し屋が使われた。「万両買いと言うて、一万円以上買わはったお客さんをものすごく接待しはったとこがあります。昔やと、一万円というとええお得意ですわなあ。お爺さんが紋付きの黒い着物着て、注文をききに行かはりました。特別の献立を考えてね。そらまあ、昔の仕出し屋というと大変どしたなあ。何かあると、お爺さんは献立を考えてはりました。今はとてもできしまへん。」得意先の商売の仕方も変わり、家での客の接待もなくなった。

美子は、仕事のこと、家のことを先代の祖母から習った。「わたしはいつも、休んではったお婆さんから聞きました。『ここのうちはああとか、こうとか』ね。喋ってはるのをつい聞いて、というこ

とが多かったんどす。」現役を引退していた先々代の女主人は、見習いの女主人の教育係でもあった。

「このお婆さんが信心者で、あっちもこっちも神さんだらけでした。うちの家も、どの部屋にも皆何かがまつってあるのどす。あんまりたくさんおまつりがしてあるので、今のお婆さんになってから、『あんたらがかわいそうな』と言わはりますのや。『こんなんをお守りしていこうと思うと大変や』と言うてね。『だんだんに減らしていこう』と言うてくれはります。」「『むちゃくちゃに減らしても、またいかん』と言うてね。『わたしが勝手に減らしても、あんたがいやな感じがするやろうし』とも言うてくれはります。『あてがいるあいだに、少しでも』と言うて、減らしてくれはったんですけど、それでもまだ残ってます。」この家には、たくさんの守り神がついている。

「店に男衆(おとこし)さんがいた時分には、七日の神さんというて、裏の部屋に台をこしらえて、お灯明みたいなのをたくさん並べてね。わたしが来たての頃、じっと見てました。何やろこれは、と思うて。豆やらを神さんに供えてね。そこにお稲荷さん、蔵に弁天さん、庭にはいろいろの神さん。二階には、うちにいわれの神功皇后さん。ちょっといわれのある神さんがまつってあるのどっせ。そういうことを、一順習うだけでも大変どした。」嫁いで来た者には、神まつりだけ

でもなじみのない、その家独特のしきたりがあった。

「お供えだけでも、毎日毎日、お餅屋さんが二十箇ずつ持って来はってね。たいそうなお飾り台がありました。仏さんには、毎日お供えどすねん。お下がりだけでもたくさんあってねえ。店の者にやったりしてました。昔は店の者がたくさんいたんで捌けましたけどねえ。今の時代ではとってもああいうことはできしまへん。それだけ一生懸命できたのと、気持ちがあって、手が揃うてたんで、ああいうことができましたんやろ。経済的にも今はもたしません。」「今はもうずぼらになって、心で拝むだけで、物ではできしません。ご先祖の仏さんのご命日だけはちゃんとお供えさせて貰うてますけど。お供えのご飯でも、毎日おかずをこしらえて、きちっとあげてましたけど、今はとても。女子衆さんがそれにかかってはりました。今はもうケンケンどすやろ。」人の心も変わり、万事が簡便になって、とても昔のような念入りのことはできなくなっている。

「戦前は、顔見世には、着物羽織をこしらえて貰うて、子どもは守(もり)さんに預けて、『行っといなはい』というので、やらせて貰いました。せんどせんど、ええ事をさせて貰うてました。」若女主人として、相当の贅沢をさせて貰っていたものである。「今になって、何十万というような着物もちょっとも欲しいことあらしません。手にとってみたら、昔の五十円や百円までで買うた物のほうがずっと

よろしおしたやろ。今、何千万というようなもの、こんなもんいらん、と思います。」着物ひとつとっても、今のものとは質が違った。

舅が当時の少女歌劇のスター、水の江滝子を贔屓にしていた。羽振りのよい商売人は、役者や文人を贔屓にして引き立てていたのである。「あの時代どすわ。お父さんが二日会という会をこしらえたはって、ターキーを応援しはってねえ。南座でした。うちの家まで挨拶に来はった。ターキーくらいは知ったはりますなあ」と昔の人気俳優の名前をあげる。[1]「派手な生活どしたさかいにねえ、先々代やらわねえ。それが、戦争でころっと変わってしまいました。」

仕出し屋という商売は人手をたくさん必要とする。「お婆ちゃんね、『最近の人は使えん』と言わはります。そうやから、人は使わんと、うちでやれるのやったら、というので今の商売にしました。お婆さんは、もう、人を使うのをいやがらはります。」女主人として「お婆ちゃんは、お店のこと、会計から何から、皆自分がやったはりました。」その有能な女主人が今の人たちを使うのを苦手に思うようになっている。

「いつやったか、おふくろの味というもんを聞きに来はった人がありますの。うちはね、おふくろの味というものがあらしません。

---

[1]大きな店の主人たちは、人気のある俳優や役者、文人などを贔屓にし、後援会を作っていた。中野(86sqq.)では、薬問屋の主人たちが、「お伽噺」で有名な巌谷小波たちと交わっている。

うちのお父さんは、おふくろの味を知らはらしません。女衆さんが、何もかもしたはったさかい。」この家には、女主人はいたが、母親はいなかったのである。夫は母親の手料理の味を知らずに育った。

2）結婚まで

父は、美子が十歳の時に亡くなった。家作を残してくれていたので、「お母さんと親子で静かに、お稽古ごとやお針仕事で暮らしてました」と言う。妹と下の弟と四人の暮らしであった。兄は住み込みで働きに出て、姉も嫁いでいた。上の弟は父の妹の嫁ぎ先に養子となって行った。

「姉小路の紀州屋、そばほうろの、あれが伯父、伯母になります。」伯母が母の姉にあたる。親を失って、「姉小路の紀州屋が、わたしの親元になりました。」跡取り息子が早くに亡くなり、妹が養子夫婦となって入った。

伯父は茶人でもあった。「お茶の好きな伯父さんのとこに、いつもお茶のお稽古に行ってました。」お稽古の帰り道に、「『ちょっと映画を見てきてええか』と言うてお許しを貰うと、新京極をのぞいて帰りました。」「今みたいに、ぱっぱ、ぱっぱと出歩いたりてなことはねえ。時間にきっちりせんと、叱られました。」「ちゃんとした娘」は、やたらに出歩いたり、日が暮れて家に帰るというこ

とはしなかったものである。

美子は、この伯父の茶の席で、先代の富松の当主の目にとまった。「お茶のお手伝いに行った席で、ここのお父さん、先代どすな、に会いまして、伯父が『うちの姪にこんなんがあるさかい、うちの娘としてどうや』ということでね。」富松に縁づくことになった。

「わたしは、月給取りさんへ行って、一人で昼中ぽつんと留守番して、夕方に『お帰り』なんて言うのは、そういう生活は、こわがりというのか、寂しがり屋というのか、嫌いどした。わたしの姉は、『月給取りさんが好きや』と言うて行きましたけど。わたしは『月給取りさんは嫌いや』と言うてね。ちょうど、お商売人のお話というので、『それがええ』と言うてね。妹は西陣の織屋さんへ。弟は晒し工場をしています。」

育ったのは、京都の東北の町はずれであった。今は住宅街になっていて、大きなスーパーができている。鐘紡の大きな紡績工場があって、その周辺に晒し工場や染め工場がある地域であった。その中でも大きな晒し工場が生家であった。

鐘紡が盛んであった頃には、各地から働きに来ていた工員が盆踊りをした。「やぐらを五つも六つも建てはってね。福知山の人は福知山音頭、九州の人は九州のを、秋田の人は秋田の踊りを、ね。その日だけは、町内の人も皆工場の中に入れてくれはりました。」

一帯が工場で働く人の宿舎になっていた。「工場の東側は一戸建てで重役さんが、西側が女工さんの社宅でした。社宅と工場の間には地下道があって、道路に出ないでも行けるようになってました。しゃれたことをしておしたえ。」馬車が絶えず通って、石炭や米や豆を運んでいた。

近くの高野川で、小さい時は水遊びをした。「今みたいに車が通りませんしね。あの辺はだいぶ田舎でした。鐘紡の工場に馬車が石炭を運んでた時代です。」「ちょっと北の茶山まで行くと、日暮れには、『怖い怖い。お化けが出る』と言うて、走って家に帰りました。近くに薮があって、墓場がありました。あの時分は土葬でした。『人魂が出た』とか言うてねえ。六つ、七つの頃です。」

「英国の皇太子殿下が京都へおいでやして。わたしが七つか八つぐらいでしたかなあ。何かきれいな自動車が来る、と言うてね。旗をくれはって、万歳を言いました。『自動車が通ったら英語の歌を歌うのやで』と言われて、歌いました。川べりを三台ほどの自動車が通って行くのを、河原から見てました。」水遊びや凧上げをして遊んだ河原の堤防の上の道を車が通って行った。

父が亡くなって小さな家に移った。「東京震災の頃です」。大正十二年であった。やはり近くの、京都の町の北はずれであった。親戚の紀州屋へ行くのにも、「『ちょっと京へ行ってきます』と言う

てねえ。出町に人力車の帳場があって、帰りはそこから人力車でした。人力車を並べて、車夫さんが火にあたってました。行く時は車を呼べないので、出町まで歩いて出て来て、そこから電車でした。」チンチン電車が寺町通りを通っていた時代である。「寺町の丸太町で電車を降りて、紀州屋へ行ったり、京極へ行きました。」今はもう、電車そのものが京都市内を走っていない。

昔の話だと言いながら、「うちのお婆ちゃんの話はもう一つ古い。まだ四条通りに電車ができてないのを知ったはる。この間、電車がとれる時、お婆ちゃんが『見に行きまひょ』と言うて、いっしょに行ったの。そうしたら、『この電車がつく時に、電車がついたついた、と言うて見に来た』とお婆ちゃんが言わはりましてねえ。」曾祖母の頃の四条通りは狭い通りであった。祖母の若いころに四条通りに電車がつき、今またその電車が廃止された。

小学校を終え、「女は針を習うとくとええ、というのでね、手芸女学校というお針の学校へ行きました。三年です。高等な教育は何も知りまへんの。」卒業してからは、「家で手伝うてね。手伝うというても、お母さんと妹と、弟だけですし。」たいした家の仕事はなかった。「外へ出て、社交的なことを、と言われても、ようしませんの。気があかんしね。気が弱いというのか。そのくせ意地っぱりですねんけど。こういうのに、慣れてしもうたんどすなあ。」当

時に望まれていた、おとなしい女として育てられた。

結婚まではお花とお茶の稽古をして暮らしていた。お花は、「うちのお姉さんのお知り合いが北野にあって、そこへ連れて貰いました。そこの親御さんがひらけた方で、姉さんのお友だちやらその弟さんとそのお友だち、うちの妹までついていって、お正月やら天神さんの日に遊びました。そういう遊びでしたなあ。」男女の交際も、大人の監視下にあった。「今の娘さんみたいに、勝手にどこかに遊びに行ったり、というようなことはしたことないねえ。」「いまだに、外へ出た時でも、一人でどこぞに入って食べる、というのはねえ。孫でも連れてるとレストランとかに入りますけど。昔は、家の中で、家ぐるみでおつきあい、ということでした。」「こういう時にはこうしたらいかん、というようなことを、年寄りがいろいろと言うてはるのを聞いて、躾は自然に身に付きました。」教育は、日常のあらゆる機会になされていた。

「今朝も、『仲人はこういう時にはどうしたらええのか』と聞きに来はりますの。そんなことをわたしらに聞いて貰うても、ねえ。まあ、娘を嫁にやって、息子二人に嫁を貰うたので、そこそこのことは知ってますけどねえ。『形式くらいしか知りまへん』と言うてます。」聞き覚えと経験が知識のすべての源泉であった。「年功どすなあ。自然どす。自分でやろうと思うて、それで覚えて、まあ何

とかできます。今さら、これを読め、とか言われてもねえ。習うてないことはできません。やっぱり、一歩あとずさりします。」経験から学んだ智恵はあっても、ひけらかすことはない。

「もっと教育を受けておいたら、とも思いますけど。教育があったら、もっとでしゃばってたかもわからしませんわなあ。生まれつきで、自分のそういう道をたどっていくことになってるんやなあ、と思うてます。」控え目に生きるように、教えられたことを守るようにして生きてきた。

「母親が、『あんたはええ。何も教えてないし。ご飯は炊かいでええ、おかずはせんでええ。こんな気楽なことはないやないか』と、お嫁入りの時、わたしに言わはりました。ご飯は炊かいでよろしいわなあ。仕出し屋はんですし。おかずは言うておくと、店の人が『奥のご馳走』と言うて、すぐにしはります。」将来の女主人には、食事の支度をする必要はなかった。「年寄りもまだ上にいはりましたし。ただ、『ご馳走さん』と言うて、よばれてたらええんどす。そらまあ、楽どすかなあ。」炊事、洗濯、掃除という妻の仕事はしなくてよかった。

仕出し屋をやめた時、大きな転機がきた。「商売をやめたとたんに、お店の人は皆辞めさせるわ、女中さんも一人減り、二人減りして。昭和十九年までは、一人は残ってましたけど。二十年からはも

う何もなくなってしもて。さあ今度は、わたしが一からご飯炊きをせんならんようになってしもて。」それまでの若女主人は、女中の役割をしなければならなくなった。

3）結婚

当時としてはめずらしい新婚旅行に行った。主人の発案であった。「東京で帝国ホテルに泊まってね。帝国ホテルへ下駄履いて行ったんはわたし一人やろう、と言うてね。銀座へ出たら雨が降ってきて。その時分は着物ですやろ。草履を履いていたけど、下駄を買いました。それで帝国ホテルの玄関へ帰って来て。田舎者で」と東京旅行を振り返る。

東京から、日光、鬼怒川、大島へ、帰路に湯河原で画家の竹内栖鳳を訪れた。「波浮の港を見ましてね。帰りに栖鳳さんにお礼にうかがいました。その時は健在で、湯河原に別荘がありましてな。掛け物を描いて貰うたお礼に行きました。」日本画の有名画家のパトロンでもあった。若主人の結婚を祝って、竹内栖鳳も絵を贈っていた。

「もう一つ、こっちの温泉、あの弁天島のあるとこへ行きました。ここまで出てて言われへん。何というとこでしたやろ。そこにも泊まりました。長い旅行でね。一週間ほど。わりかた豪華にして貰い

ました。その時分、新婚旅行へ行くのは、少のうおした。」

新婚旅行の計画は主人がたてた。「自分が皆プランたててね。大島へ行くというのは、家には言わずに、自分勝手に組んどかはったんどす。家に言うと行けしません。」大島へ行く前に、東京から家に電話をかけさされた。「『そんな危ないとこへ』と言われました。」東京でも遠い場所であったのに、伊豆の大島などはさらに遠い海の向こうだった。「あの時分、『波浮の港』という歌がはやってました。勝太郎でね。行ったら、しょうむないねえ。」当時の流行歌に引かれて、わざわざ大島まで行ったのである。

「そのくせ、わたしら、見合いから結婚まで、三、四回しか会うてしません。」やはり家と家との結婚であった。男女の自由な交際はなかった。「そういう結婚どすのやけど、もう四十何年です。」長い時間が経った。

伯父が主催していたお茶の席は「二日会」と呼ばれていた。「十二月二日、お手伝いに行ったんです。主人のお父さんやら、料理人さん、蒲鉾屋さん、姉小路の紀州屋やらが、月に二日二日にやらはる会がありますの。ここのお父さんが、わたしを見つけはってね。五月の二十日に結婚しました。その間、三回ほどしか会うてしません。昔のことどすなあ。」昭和九年であった。

結婚前に二人が会った三回のうち、「一回は大阪へ行ったことが

ありました。主人の姉さんがいっしょでした。三人のデートでした。」お目つけ役がついていた。その日の朝に、富松から連絡が来る。「『今日はちょっと用事があるから来てほしい』と電話があります。『どこそこまで』てね。それで出て来ますの」と当時のデートの約束は、やはり家を通してであった。

見合いは南座の芝居であった。「誘うて貰うて、行ったらね、何やじろじろと見る人が待合室にいはる、と思うてました。あとから考えたら、ここの親類の人がたくさん来たはったらしい。わたし自身は知りません。ただお芝居に誘うて貰うた、と思うてね。」親戚の人たちもお見合いにやって来て、将来の女主人の品定めに来ていたのである。

仲人は、両家をよく知る人がそれぞれに間に入るというものであった。「仲人さんは、ここの出入りの呉服屋さんです。その頃、呉服物なんかは、外へは買いに行かしませなんだ。大丸さんでも、番頭さんがまわりに来はりました。丁稚さんが反物持って、うちでそれを広げはります。昔はそういうのばっかりでした。あっちはあっちで出入りのお人があってね、その人がよく知ってはってね。両仲人でした。」

出入りの商人が縁談の間に入るということはよくあった。「あっちの出入りは、茶道具をやったはって、伯父のお茶の席を用意した

りということでね。わたしが妹とお手伝いにいってましたのでね。そのお方と、こっちの出入りのお方とがいっしょになってね。そのお方に奥さんがなかって、こっちのお方がご夫婦揃うてられたので、正式のお仲人ということになりました。」

結婚式は料理屋で三日間開かれた。「今みたいに、鬘とちがいますやろ。自分の髪で結うのどす。」花嫁の髪は自分の髪で結うのであった。「式は日本式どすさかいにね。一人ずつ、千鳥の盃というて、順番にあっちとこっちへやらはりますの。今みたいに、ずうっと注いどいて、いっぺんにぱっ、というのと違います。大変どした。」向かい合った両家の間を、一つの盃が上座から下座へと交互に交わされた。両家の固めの盃であった。神主や祝詞はない。高砂の謡いで祝った。

「三日の間、帰ってはまた行きますのや。挨拶して、宴会になったら、『お先に失礼します』と言うて帰ります。」家と料理屋との間を三日間通ったのである。婚礼の明くる日は得意先を招待し、三日目は町内の家々を招いて、披露は続いた。六月一日、ようやく二人は新婚旅行に出かけた。

4）新婚の頃

「いったん嫁入りしたら、ここの家はあんたが守るもんで、里と

かそういうもんは一切考えんでよろしい」と度々言われた。里の墓参りでも、「嫁いで四十何年になりますけど、年会とか法事とかで、むこうの人といっしょに参っただけ。一人で参ったことは一回もあらしません。」「一人で墓参りをしたなんてことが分かってしまうと、大変なことになりましたやろう。」たとえ参ったとしても、「参ったという気持ちは瞬間のことで、あとあと言われることが嫌でしたし、一人でお墓参りをしようなどとは思いもしませなんだ。」

もちろん「内緒で、里へ走る」ということは絶対になかった。商売柄、人手はいつも足らなかったし、だいたい「女は四時には家に帰るもの」であった。法事で里へ帰っても、必ず四時には帰宅するものとされていた。妻方の先祖祭だけが、里へ帰れるほとんど唯一の機会であった。

その頃の嫁は、「化粧水やら石鹸やらは、半年や一年分は嫁入り道具として持って来てました。」「明くる日や、たとえ半月たってでも、化粧水がない、とか言うて買いに行ったりしたら、笑われました。」下働きの女子衆もいたし、嫁入りして当分は、道具を揃えて来ているのだから、外へ出る必要はまったくないはずだった。実際、買い物に出る必要はなかった。

はじめての外出は、国防婦人会からの誘いであった。美子が嫁い

で来た頃には、国防婦人会が全国的組織に広がり始めていた。[1] 町の組織はすべて小学校を中心とする区域を単位としている。各町内会は小学校の区域を単位として連合町内会を作っている。国防婦人会もその下部の組織として構成されたのであろう。「学校から言うて来はったし、『いっぺん学校へ行ってきなさい』とお許しが出て、出かけました。日彰校はどんなとこか知りませんでしたけど、行ったんです。」地域の会合へのはじめての参加であった。

国防婦人会の集まりで、「おうちはこのお役です」と言われたまま、入会を勧誘する役を引き受けることになった。「昔の嫁さんて、何にも知らしませんわなあ。わたしら、外へ出たこともないしね。」近所を知らない新しく来た嫁が、国防婦人会への加入の勧誘をしてまわることになった。はじめての集まりからの帰り、「近くですさかい、いっしょに帰りましょ」と十五歳ほど年上の奥さんが誘ってくれた。いっしょに帰ったが、「どこのお方や分からへんのどす。むこうは知ってくれたはります。そしたら、何と隣さんどした。」これほどに、近所とのつながりがなかったのである。

結婚しても、近所の挨拶まわりをしなかった。「町内を全部呼ばはったんどす。婚礼して、明くる日は店への出入りの人を呼ぶ、その次はお町内を呼ぶ、ということをしてね。町内を呼んだ時、ご主

---

[1] 国防婦人会は昭和七年に発足した。美子が結婚した昭和九年には、全国に広がり始めていた。

人は来といやすけど、奥さん方の顔は知らしませんわね。恥ずかしい話やけど、だいぶんたってからでも、お隣さんの奥さんの顔を知らんのどす。」近所の人たちは、新しく来たお嫁さんだと知っていたのだが、本人はまったく知らないままに過ごしていたのである。国防婦人会の勧誘に一軒ずつまわって、はじめて近所の人の顔を見知った。

昔の錦では奥さんは店に出ていなかった。「錦の奥さん、そんなに表へ出たはらしまへなんだ。中で用事してはりました。奥さんが表に出てはるのは、ほんまの小売り屋さんだけでした。ぜんぜん顔を知らんでね。今思うと、『すまんことどした』と言うてます。」小売りが中心になった今でこそ奥さんは店へ出ているが、昔の大きな店の奥さんは家の中での仕事だけをしていた。奥と表は区別されていた。

今の若い人とは違って、「わたしらの娘時代は、こういうようにして、ああいうようになってやろう、というようなことはあらしませんでした。ただ、ぼやっとした娘どすのやなあ。何にも分からん者が、ぽつんとここへ来て、あれを見て、これを見て、習うていくという生活どした。」毎日を、言われるままに、女主人の見習いとして過ごしていた。日々の近所つきあいとか買い物ということはなかったのである。「ここへ嫁に来てから、あれはこうして、いつに

どうこうして、という気持ちがいまだにありません。かないまへんなあ」と自分の性格を語る。

嫁いだ時に、「きちっとした姉さんがいはりました。姉さんは主人と二つ上ですし、わたしとは四つちがいです。わたしは数え齢で二十二でした。主人が二十四、姉さんが二十六。これから、お嫁入りおしやすと思うてました。いずれはお嫁入りしはると思うてました。里の方でもそう聞かされてました。」結局、どこへも嫁がずに一生をこの家で暮らした。「三十何年いっしょに暮らしました。」

「姉さんは、何もかもきちっとしてはりました。そこへ、自分が家の娘やというので、何でもぴっぴっとね。」しっかりした義姉であった。「ほんまのお嬢さんでしたさかい、お稽古ごとばっかりしてはりました。女中さん付きでね。掛け取りにも行ったと言うたはりましたし、お店のことでも丁稚さんにぴしっと言いつけはりました。わたしら見てても真似のできることとは違いました。」女主人としての振る舞いが身に付いた、きびしい義姉であった。

義姉とはいっしょによく遊びに出かけた。「姉さんが、『映画を見に行こう』と言わはると、そこら放っておいても行けます。姉さんが、『この人を連れて行くえ』と言わはると、そこは娘の権利ですわ、お舅さんでも、『行っといなはい』てなもんです。」主人とではそうはいかない。「『ちょっと映画へ行こう』と言わはっても、

『ちょっと待っておくれやす。そこらを片付けんならんし』と言います。『しんきくさい。一人で行ってくる』とよく叱られました。」「やっぱり、皆の顔を見んなりませんやろ。」主人といっしょに出かけるとなると、嫁は気を使わなければならなかった。

子どもができるまでは、主人が好きだったダンスに連れて貰った。「昭和九年頃、ダンス・ホールへよう行かはりますねん。そういう時は、わたしを連れて行かんとね。晩に、用事をしもうたあとに行けます。わたしはちっとも教えて貰わずで。ダンサーと踊ったはりますねん。わたしはいつも見てました。あの時に教えて貰うといたらなあ、といまだに思うてます。」ダンス・ホールやカフエが、モダンな遊びとしてはやった頃であった。

5）嫁修行

「自然に見て、見覚えどすわなあ。前のお婆さんもいはりましたしね。いろいろと話をしてくれはりました。聞き覚え、見覚えでした。」板場の修行や丁稚の見習いと同じに、女主人になるにも見習いであった。

「私はぼやっとしてたさかい、ここまで来られたんどす。自分が何かをしたいと思うとか、かっかとした人間でしたら、ここまで来られへなんだと思います」と言う。言いつけられた通りをしてきた。

「『折りをくくって』と言わはったら折り箱をくくる。『お椀を拭いて』と言わはったらそれをする。何をということなしに、あれをし、これをし、でね。お椀はこういうふうに片付ける、塗りものはこういうふうに手入れをする、ということを一つずつ教えて貰うたんどすな。女子衆さんがやったはりますやろ。そこに同じように混じってやってますの。自然に覚えていきますわなあ。」当時の教育とは、人がするのを見て覚えるというやり方であった。「丁稚さんを見習いと言うたんどす。見て、聞いて、習うんどすなあ。」

季節季節のしきたりも見習って覚えた。「お正月になると、『時候が変わったし、この掛け物出して』と言わはると蔵へ行ってね。この月にはこの掛け物、というように覚えます。手帳に書いてありますねん。」忘れないように記録を作っていった。

「お正月には、円光寺さんのお坊さんが、乞う米と言うてね、お米を貰いに来はるんどす。また、お札さんを持って、そのお礼に来はります。その乞う米のお礼には、いくら包む、ということを習います。当時は、一円あげました。ちゃんと包んで、お礼に来はるのを待ってますの。」このしきたりも、「『この頃は齢がいって、よう寄せてもらわん』とむこうから断って来はります。」お寺とのつきあいも変わってしまった。

「お布施というもんは額をきいたらいかん、と言うてね。この節、

どれぐらいしたらええのか分からしません。バスに乗って来はったら、いままでは六十円どしたか。九十円になったのは最近どすわなあ。千円包んであげても、正味いうたらどれだけになります。バス券と書いて、五百円つけたんです。お車代とも書けませんしねえ。来てくれはると、お菓子を出して、『うちにある生臭いもんでもおあがりやすか』と尋ねてね。『じゅうじゅうと焼いても臭わないものならいただきます』と言うてくれはります。わかめとかちりめんじゃこくらいならつままはるやろ、と思うて包みます。やっぱり何かの時にはお世話にならんならんしねえ。」欠かせない付き合いである。

「することが古くさいことばかりでして」と言う。「昔式にやってますやろ。お医者さんが来てくれはっても、昔はお菓子料というて一円包みました。この頃はどうしたらええのか分からしません。『どうぞ往診料をつけておくれやす』と言うてます。ちょっと来はるたびに、二千円とか三千円とかをいちいち包んでいくのも、何やいじましい、けちついてるみたいですしねえ。どうしたらええのか分からんことがあります。」昔のようには付き合えないこの頃である。

商売人は正月に夷さんにお参りする。「えべっさんも、一月は人気を買いに行きます。御神酒料を納めて、人気を買いに行って、家

に飾る。いちばん若い者に人気が集まると言います。」家の若い者がお参りに行く。「昨日も、弟息子が買いに行ってきました。あんまり寒いので、嫁さんも連れず、子どももここに置いて、一人でオートバイで行ったん。時代が変わりましたなあ。」簡便に、速くなっていく。「あれを買うたら、帰りに喫茶店なんかに寄ってると、人気をそこに置いてくる、と言いましてな。『行く時に喫茶店でコーヒーを飲んで、帰りはまっすぐに家に帰らないかん』とお婆ちゃんが言うたはりました。そういうふうに、ものを教えてくれはりました。なるほどそうかなあ、と思うて、一つずつ覚えていきました。」お寺のことも、神参りも、その月その月の出来事をいちいち覚えていった。

店の盛りの時に戦争が始まってしまった。「主人が兵隊に行ってしまいましたやろ。子どもが二人いました。」子どもと二人で残されて、「このままでええのやろうか、と考える余地があらしません。日々の生活と、留守番と、そればっかりで追われてました。」小さい子どもの他に、齢がいきつつあった両親と姉や弟たちとが、戦争が深まっていく中に残された。

6）正月、法事など

昔は、店の者といっしょの正月であった。「わりかた簡単どした。

お膳とお屠蘇とで、お雑煮を祝う程度でね。難しいことは、ここのうちとしてはしませんでした。」「使用人も、めいめいがかってに早くに雑煮を食べて、さっさと薮入りしはりました。」正月料理で大晦日遅くまで忙しく、正月も早々から注文があった。「わたしらは台所にずらっと並んで、丁稚さんや女子衆さんと交代でね。帰る人は帰る、残る人は残るでね。狭い台所にお膳を出してお正月をしました。」商家は、正月でも今のようには休みをとらなかった。大晦日まで商売で忙しく、除夜の鐘の鳴る頃にようやく店を片付けた。それから、祇園さんに「おけら参り」をして、その火でお雑煮を炊き、新年を祝い、元日は「寝正月」であった。二日には、商売が始まった。

正月を迎えるための飾りを、家のしきたり通りに、お雑煮を祝うまでに済ませていなければならなかった。「昔から、火と、水と、木と、土と、お金とが人間についてまわるものやというので、お飾りをします。この家に対して、火は東から、砂は西から、木は南から、水は北から、てね。それぞれ貰いに行きます。西は車折(くるまざき)さん、南は春日神社、火は東の方の天神さんというようにね。」奥の座敷の床の間に「三方に飾って、正月三ヶ日の間は、感謝の気持ちでお参りをしてました。」「今も、続けさせて貰うてます、それだけは。その他の難しいことはやめてね。」

「以前は全部自分で行ってたんどすけど、この節はお水は店のもんに行って貰うて、砂はわたしが貰いに。おととしまではお婆ちゃんが行ったはりました。」

主人の弟の家でも同じことをしている。「お砂も、お水も、木も、わたしがこしらえて、半分を持って行きますさかい。同じことやったはります。」縁起の飾りは続けられている。

「お金は、毎年々々新しいお金ができると増やしていきますの。かわらけにのせてね、三方に飾ります。古いお金から新しいのまで、珍しいものもありますねん。」明治の初め頃の珍しい貨幣を出して見せてくれる。

「掛け物は蓬莱山を掛けて、置物は清水六兵衛の鶴です。決まったことをしてます。今でも。」季節によって掛け物と置物は変わる。「十月のえべっさんには、えべっさんの掛け軸があります。えべっさんが富松と書いた通い帳をぶらさげてね。万年さんが描かはりました。置物は六兵衛のえべっさん。鯛と飴とおこしを供えます。」おこしは、大阪の有名な菓子である岩おこしである。「鯛に糸をかけてね。はんぺいとねぎのおつゆを食べます。」掛け物も置物も、それぞれが名のある人の作である。「商売繁昌で笹持ってこい」で有名な十日夷には「ただ、人気を貰いに行きます。一月十日のえべっさんは何もしません。」

訳も分からずただ続けているしきたりもある。「お婆ちゃんに聞くのどすけど、これが何でなんかがようわからん。お婆ちゃんも、『昔からのことや』と言わはります。何でなのかは聞いてないらしい。人間が生活していくうえで、『こんなものから皆が恵みをうけてる。それは膾炙しないといかん』というのは分かりますけどなあ。何で、二十五日にこんにゃくで、八日にあらめ、一日にほうだら、これがわからん。」ただ、続けている。

注連飾りを家のあちこちに飾る。「お注連ね。井戸から、蔵の神さん、仏さん、あらゆるお部屋に。暮れの二十八、九日くらいから、売りに来ますの。白川の方からね。自分でくくりますねん。うらじろをつけてね。梅の花には水引をかけてね。戦前は男衆さんや女子衆さんがいはりましたし、皆でやったはりました。」「今は、三十一日、店がしまいかける時分に、ちょいちょい家の中へ入って自分でします。一人でこそこそやります。店のことは皆がやってできることですけど、これはね。嫁さんに伝えていかんならんことなんやろうけど、手が足らんのに、いちいちそんなことねえ。呼びつけて教えるのはねえ。下の孫で幼稚園に行ってる女の子がついて歩いてくれますし、そのうち覚えてくれますやろ。まあ、だんだんに省いていかはりますやろうけど。」

「うちはだいたいが料理屋どしたさかいね。二日、三日からお得

意先にお料理を納めんならんというので、悠長にお正月というものをしたことがあらしません。昔は、どこのお店でもすぐにお商売にかからはりました。」「今は、ぼやーっと、四、五日頃まで遊ばして貰います。」正月はそれだけ気楽な休みになった。

「商売があるので、親戚とかそういう人が来たり、というのはせんといてくれ、という慣わしになってます。ええ慣わしです。」正月の年始の客をもてなすということはこの家ではなかった。「別家さんは、『おめでとうございます』と言うて来はりますけど、よそさんのように、おとそ出したり、ご馳走出したりということは絶対にしません。」ただ挨拶を受けるだけである。別家も仕出し屋で忙しい。

親戚はすべて祇園祭の地域にある。「お祭やというて、うちに遊びに来て、およばれするということは、この家はちっともしはらしません。先代のお婆さんが嫌いどした。商売があるのに、というのでね。」お祭も仕出し屋は忙しい。

お正月のお膳は、「お椀に、お祝いするお米、結び昆布。白味噌のおもちで、お頭（芋）、お大根の五角に、ね。小さい子どもがいるし、それだけはしてやりますけど、もう幼稚園と小学校になったしね。若いお母ちゃんが、『もうたいそうにせんと、うちらだけに簡単にしましょ』と言いますしね。子どもだけにお膳を出して、お

椀とお箸紙はちゃんと揃えてね。他のことはとだんだんとずぼらになってます。」「八十八歳になるお婆ちゃんも、『難しいことはしんどいさかい、せいぜい省いたらええ』と言うてくれはります。」それでも、「ごまめと、かずのこ、たたきごぼうと、ぼうだらと、黒豆は用意してます。よその家は全部したはりますけど、ややこしいもんはやめて、それだけにしてます。お婆ちゃんがくわいが好きでしたけど、『歯に合わん』と言わはりますしね。頭芋は、男の人はお芋が嫌いどす。『戦地でお芋ばっかり食べさせられた』と言うて、絶対に食べはらしませんので、女が食べてます。あんな大きいのはせんと、かわいらしいえび芋のやわらかいのにしてます。つつくようにして食べんならんのはかないまへん。」

「だんだんとずぼらになります。次の代になったら、もうしはらしませんやろう。」下の息子は、「『何にもせんでええ。数の子だけ』と言うて、数の子ばっかり食べてます。」口に合うものだけということになってきている。

七日の七草粥は、「無しでは気が済みません、お婆ちゃんもわたしも。若い人は、『もうよろしいわ』と言うたはりますけど。やっぱり七草をこしらえてます。それに、『十五日には小豆粥をせんならんなあ』と言うてね。」

「昔は、お一日(ついたち)はぼうだらのおつゆ、八日はあらめ、二十五日は

天神さんのこんにゃくのおつゆ。何という意味か、わたしはよう分からんのやけど、何で天神さんにこんにゃくなのかねえ。八日のあらめは、八八のあらめ、と言うて、どこさんもおしやす。あらめをゆがいた汁を表にまく、商売人は人気を呼ぶ、と言うてね。」すでに由来の分からなくなったしきたりを、分からないままに続けている。

正月はほとんどなかったが、かわりにこの家では、「年会と法事は派手にしはりました。」「先々代の法事は派手でした。」大正三年に亡くなっている。「わたしが生まれた頃ですやろ。六十一か二で亡くなってる。若いのですえ。菊を作って並べてはりました。写真があります。人を呼んでご馳走をしてね。昔の人は八十くらいの感じどした。」この先々代の法事が派手であった。

「次ぎに派手にやらはったのは、先代のお婆さんの六十一の還暦祝いどした。弥栄倶楽部、今の弥栄会館、前は日本式どした。そこでえらい派手にしはった」と聞いていると美子は言う。「その時分が、ここの家の全盛でしたやろ。今はもうだんだんと小そうなってしもうて。」

別家もたくさんあった。「皆、富のついた名前を貰うてね。いろいろ資本も出したげはったんどすやろ。矢吉どんやったら富矢とか、盛造やったら富盛とかね。わたしの代になってからは別家はないさ

かい、分かりまへん。」

先代までの別家が、「今でも、お盆とこの十三日、事始めにね、『おめでとうございます』と言うてお餅を納めに来てくれはります。もう少のうなりましたけど、四軒だけがね。」十二月十三日には「事始め」と言って、主人筋の家に挨拶に行くしきたりであった。この日から迎春の準備を始め、「お事多(ことおお)さんどす」と挨拶を交わす。今では、十二月の祇園の珍しい風物誌としてテレビなどで紹介されるだけである。

昔の別家の内、「二軒は仕出し屋さんをしたはります。もう息子さんの代になってます。先代のお嫁さんが、お婆ちゃんになって残ったはります。そのお婆ちゃんが亡くなったらもう来てもらわいでええ、と思うてるんですけど。こっちから、もうよろしい、とも言いにくいですしね。お婆ちゃんがいはる間は来てくれはるのやろし、うちもお婆ちゃんがいはりますしね。」古い関係もだんだんと薄くなっていく。

昔は盆と正月にお仕着せを新しくした。「丁稚さん、女中さんには、着物をこしらえました。丁稚のお仕着せは筒っぽの着物で、中くらいになると長い袂になり、番頭はんになると羽織をつけてやる、というふうにね。」

娘の頃は、紀州屋のお仕着せを作る手伝いをした。「あそこも別

家をたくさん出したはった家です。お針のお稽古に、丁稚の着物、番頭の羽織を縫うてくれ」とよく頼まれた。「身に合うように、一人ずつ丁稚をお使いに来させはりますの。丁稚は、女みたいに袂があいてます。男はつめますやろ。あいているのが恥ずかしいし、『頼みやから番頭なみに袂を縫うてくれ』と頼みはりますねん。『あんたはまだ丁稚やし、それはあかん』と言うのやけど、丁稚は『恥ずかしい』と言うてね。むこうへ行って、『あの人の着物は番頭の型にしてええか』と尋ねて袂を縫うてあげました。」

昭和十年頃から変わってきた。「わたしがここへ来てからは、羽織や着物を貰うても着て行くとこがない、と言われますのやわ。カッターシャツ、ジャンパー、ズボンが欲しい、と言い出してね。それから、着物、羽織をやめました。ズボンやらジャンパーを見立ててやってね。寸法をとって買いに行きました。あの時分、ズボンにジャンパーというのがはやりましたのや。」「お正月に遊びに行くのでも、着物を着ていかずに、ズボンとか上着を着てね。あの時分、嬉しかったんでしょうなあ。今はまた逆に、お正月になったら着物を着はりますなあ。」お仕着せがなくなる頃から、番頭、丁稚と差をつけることがなくなっていった。

6）戦争

昭和十一年の正月に娘が生まれた。「十二年の七月に男の子ができて、その日に、うちのお父さんが兵隊に行かはりました。」夫、定一郎は二つ年上であったから、「兵隊は済んでました。」二回目の徴兵であった。「兵隊に今送ろうかと思うてたら、こっちがもうとてもやない辛抱できんようになって、わたしの方が病院へ走ってしまいました。」「その時は三ヶ月で帰って来はった。それからまた、つぎ行きつぎ行きして、最後は十八年の十月まで、行ったり来たり、行ったり来たりしてはりました。」兵役の済んだ者にも、徴兵が次々とかかってきた。

定一郎の最後の戦地はラバウルであった。「葉書に印をつけてね、ラバウルにいるいうことは分かってたんです。新聞に、ラバウル大空襲、全滅、というのが出ましてねえ。えらいこっちゃ、どこでどうしてはるのやろ、と心配してました。」上の子が七つ、下のは幼稚園であった。

定一郎が戦地から帰って来た時、富松は店を閉めようとしていた。「ラバウル大空襲という時に、先に帰って来はったん。運がよかったんどす。軍の、何とかいう本部に勤めはりましてね。」市内各区にあった防衛隊に軍属で勤めた。「その間、二、三回、赤紙が来ましたけど、そこに勤めてるというので、もう行かんでよかったんどす。うちにいて手伝うたりするとまた召集が来ます。おかしいけど、

召集逃れ。逃れというほどのこともないけどね。」終戦は内地で迎えた。

戦争中、主人が留守の間、父と弟が商売を続けていた。「弟はちょっと小柄でね、兵隊は即日帰郷というのがありました。その頃は、ちょっと体の弱いもんは即日帰されるというのがあってね、それでした。」

商売はしていたが、闇をやっていないかと警察ににらまれたという。「お婆ちゃんが会計したはりましてね。警察に呼び出されて、やられたはりました。」「これではたまらん、ということでね、大きいお商売があったのを全部やめてしまいましてね。わたしらは、そこまでは昔のお商売を知ってます。」

昭和十八年になると、統制経済で商売ができなくなった。「お父さんは思い切りのええ人でねえ。息子は兵隊に行って留守やし、『その留守に親が闇をして警察に引っ張られるということでは何やさかい』と言うて、すぱっとやめてしまはりました。恐しいほどええお得先があったんですけどねえ。お米を買うても、お醤油を買うても、闇でひっかかりますやろ。」商売がやりずらくなっていた。「もうやめた、と言うて、店じまいをしてる日に、主人から電話がかかってきて、『いま京都駅に着いた』てね。『うちは今日何をしてると思わはります。店じまいです』と言うてねえ。今までどこへ行ってたか分からなんだ兵隊から、突然帰って来はりました。そら

不思議なねえ。」大きく商売をしていたから「道具も百人単位でありました。『これを皆売ったら、何年かはゆっくり食べていけるやろ。いやな商売はやめて、また一からやり直そう』と言うて、お父さんは何もかも売ってしまわはりました。」主人はその日に帰って来たのである。

子どもは滋賀県の水口へ疎開した。小学校の四年生と二年生であった。「先代の出が水口どした。そこへ縁故疎開しました。お爺ちゃん、お婆ちゃん、お姉さん、わたし、誰かが代わりおうて行きました。」舅の実家は料理旅館であった。その親戚の造り酒屋の別棟の一階を借りた。「向こうさんが二階で、うちが下のええとこを使わして貰いました。三月頃に行ったんですか、寒い雪の降る日どした。」終戦の前の年の冬であった。京都で本格的な疎開が始まる前である。

「お婆ちゃんだけが行かはってもあかんのどす。食事ができしまへん。三十年前いうとまだ五十代でっしゃろ。今のわたしよりも若いのどすえ。けど、それこそほんまのご隠居さんどしたなあ。何もしはらしません。お爺ちゃんがご飯を炊いたりね。そら、お爺ちゃんは料理ができはるさかい。」女主人には料理は無理であった。

京都から水口まで家族が通った。「軍部に勤めているという定期券を買うて貰うて、水口から通勤しているような顔してね。汽車の切符が買えしません。その定期で、姉さんも、妹さんも、同じよう

な齢ですやろ、一枚の定期で三人がね。途中、汽車の中でぼろが出んように、まわりの人と話をせんように、黙ってました。悪いことしてきました」といたずらっぽく笑った。

舅の里には迷惑をかけないようにした。「大きな料理旅館ですさかいに、何でも持ったはります。けど、若い奥さんやらがいはるのに、お爺さんの親戚の者が来て、『無心した』と言われたらいけまへんやろ。うちから、お米、お砂糖、焚き物まで持って行きました。」「『親類が京都から来て、物が減った』なんてねえ。何年続くかわからん戦争やと思うてましたしねえ。」「二月か三月に子どもは水口小学校へあがって、夏には終戦でした。」思ったより早くに戦争は終わってしまった。

校長先生に京都へ帰る挨拶に行った時のことである。「『京都のおうちはどうですか』と訊ねられて、『空襲にもやられずに皆無事で』と言うと、『それは結構でした』てね。あの校長先生の顔、今でも覚えてます。」

従兄弟になる六年生の子と三人を連れて行ったのだが、「三人が代わりばんこに医務室で寝てはるのどすわ。田舎の学校は労働がきついのどす。河原で石拾いやらしたりね。『京都へ帰ったらお医者さんに見てもらってください』と受け持ちの先生に言われたんどすけど、京都へ帰ったら皆ぴんぴこしたはります。」田舎の生活には

馴染めなかったのだろう。

疎開は子どもだけであった。「大人はここで留守番してました。二階は畳をあげて板の間にしました。町内会長さんが、『天井に焼夷弾が落ちるとあぶないので天井を抜いてくれ』と言うて来はりました。その時分は、そうかなあ、と思いましたけど、今思うと、爆弾が天井で止まりますかいな、ねえ。うちは、最後まで抜きませんでした。それでも、終戦の一週間前に、ほんの一部分ね。抜いたか、抜いたか、とやかましく聞きに来はるし。あれは抜かなんだらよかった、と思うてます。」戦後に修理をしようとしても、昔の物ほどのよい材料が手に入らなかった。「ベニヤ板で柾目に見える、似たのが出てね。それでようやく直せました。簡単な天井ならポンポンと抜けるのやけど、釘がきっちりと打ってあって抜けしません。抜いた釘がピカッと光ってました。明治三十五年六月、と天井板に書いてありました。釘が光ってましたえ」と昔に建てた家のよさに驚いたという。壁にしても、「今はもう直せません。」柱と壁の間に隙間がない。このような塗り方は、今の工事では「恐ろしい値段を言わはりました。」「先々代が木の一本一本を吟味して建てはった家ですさかいねえ。」

「とにかくもう、戦時中は、こんな家はいらん、と思いました。どこかに逃げていこう、と思いました。京都に空襲がないと分かっ

てるなら、あんなことするのやなかったの。大きな長持ちに二杯の荷物を大八車に積んで、北の方の深泥池のむこうまで、運んで運びました。」「大阪の大空襲があってはじめて、急いでやりだしたんどす。」結局は何もなかった。「京都もちょっと落ちたらしおすなあ。ちょっと、と言わはるけど、落ちたとこはきついことやったらしおす。わたしらも縁の下へ入りました。」

「防空演習もありました。梯子に登ってね、『足を組んで途中で止まれ』てね。バケツを屋根へ順番に運ぶんどす。あんな途中で止まれ、てねえ。なかなかねえ。わたしらは三十歳あまり、四十になるかならんで、よう働かされました。途中で止まれ、と言われてもねえ。よう怒られました。町内ごとに防空演習がありますの。町内ごとにえらい人がいはりまして、そこへ学区からまた上の人が指導に来はってね。よう叱られました。」

「食べ物は何かありました。業務用のお米とかお砂糖は、蔵に入れて大事にしてました。魚なんかは配給で、ぞうすいも貰いに行きました。けど、錦には何かしら売りに来はりました。十分に食べてましたなあ。負ける頃に具合が悪くなって。戦後はいっぺんに出て来ました。」

7）戦後

「お友だちとか弟はんやらで、『商売始めようか』と言うてね。闇でニシンを買うたりしました。大阪の税務署から調べに来たこともあります。」錦は闇ばかりを売っていた。「闇市でした。石鹸を仕入れて、通りで売ったりしました。」

ある時、裏庭で餅をついていた。「もち米なんか何ぼでも持って来はりますねん。裏でついてたら、税務署か何か、怖いとこから調べに来はったんどす。闇のニシンがいっぱい積んであったんですわ。預かってくれ、と言われててね。餅つきを手伝うてる人がずらっとニシンの前に並んでね、『閑でしようがないし、虫のつづったような米を餅にでもついて食べようか言うてます』とか何とかうまいこと言うてね。調べんと帰らはりました。冷や汗かいた、というようなことが一回ありましたなあ。」

先代はまだ健在であった。「お父さん、舅さんです、は昭和二十五年に亡くなりました。七十一くらいでした。ただ見たはりました、若い者がすることをね。六十八、九でしたなあ、昔はお年寄りに思うたけどねえ。戦争中に疎開で壊した家の木を拾うて来て、裏に積んでありました。それを割木にこしらえはって、薪でご飯を炊いてました。年寄りには年寄りの仕事がありました。」仕出し屋を閉めて、闇市のような錦では、腕のよい料理人のする仕事がなかった。

昭和二十一年に下の息子が生まれた。「病院に入院してましたら、

『今日は石鹸を仕入れて表で売ったら、ずっと人が並んでたくさん売れた』とか主人が言うたはりました。『うちらの使う石鹸も残しておいて』とか言うてました。」

闇市は昭和二十三、四年まで続いた。店の前を借りて商売をする人が何人もあった。「わたしとこの表がちょっとあいてたので、軒下を貸してくれ、と言うてね。」現在立派な焼き魚屋や料理屋になっている店も、毎日のように違う場所を借りて商売をしていた。「ちょうど食べ盛りの子たちをかかえて。小学校、中学校くらいの子たちがたくさんいはって。お父さんはおとなしそうで、お母さんが、『今日一日、店を出さしていただけませんか。ここをちょっと貸して貰えませんか』てね。あっちの店先、こっちの店先、毎日ね。うちも貸してあげたことがあったん。どこからか魚を仕入れて来て、売ったはりました。ようきばらはって、店を持つようにならはりました。」闇市のような錦から、新しく商売人が生まれ始めていた。

店は閉めていて「仕舞た屋みたいにしてました。昔からの肉屋さんが、『うちにいた若い者がちょっと店を出したいと言うので、貸してやってくれ』と言うて来はりました。同じ横町の古くからの肉屋さんの頼みやし、改造せんと店先だけなら、ということで貸しました。兄弟で、肉を切るもんと台だけ持って来てね、それはもうものすごいこと儲けはった。あの時分一万円てあらしまへん。千円札

がいちばん上でしたやろ。お金が何ぼでもで、しまいに箱に入らんようになって、一斗缶を貸してあげました。そこへお金を詰めこみはりますねん。売れて売れて、ほんのしばらく貸してあげたのですど、成功しはってねえ。晩になると、『お金を勘定してくれ』と言わはるのでね、お爺ちゃんがお金を勘定してあげてはりました。『ご恩は忘れん』と今でも言うてはります。」

「『家賃というて渡すのは何やさかい』と言うて、『かわりにお肉を食べてくれ』てね。毎日こんなお皿にお肉をくれはりました。タン、これはこんなしてタンシチューになる、とかね。この尻尾はこうして食べたらおいしい、とかね。いろいろのとこを食べさせてくれはりました。下の息子が昭和二十一年に生まれましたやろ。ちょうど生まれた時分に貸してました。毎日毎日お肉を食べてたさかい、やっぱり栄養入れた子はちがう。いまだにお医者さんにかかったことがない。はじめは珍しおしたけどねえ。お肉もない時代に毎日々々お肉をよばれてましたねえ。」

闇市が終わった後に、塩干物を扱うようになった。「お友だちに塩干を扱う人がいまして。塩干がてっとり早うてねえ。チリメンジャコとかサケとか、鯖、スルメ、とかね。」そのうち美子も手伝うようになる。「ちょいちょいと手伝うているうちに面白うなって、三十年たってしまいました。」富松もいよいよ商売を始めた。

錦に小さな小売りの店が増えてきたのも、闇市の後である。「昔は小さいお店というのはあまりありませんでした。隣はどちらも中央市場のお魚問屋さんでしたなあ。番頭さんがちょっと商売をしたはりましたけど、細かいお店はあらしません。だいたいは仕舞た屋さんでした。」戦後に、小売りの店が出始めたのだという。

「その頃は、わたしはまだ店の手伝いはあまりしませんでね。わたし一人が動かんならんでっしゃろう。お婆ちゃんは昔からの奥さんで育たはった人ですやろ。ご飯はよう炊かはらしません。おかずはようしやはらしません。着るものでも、けったいな話ですけど、女中さんまかせでした。子どもはおんばはんまかせ。乳母つきでした。いまだに、ごはんもガスの火もよう付けやらしません。」姑はほんとうの女主人であった。

「そのかわり人を使うことはものすごく上手でした。丁稚さんや女子衆さんを切り回すということはものすごく上手でした。わたしらはただ見てるだけでした。」美子は女主人になるところまで行かなかったのである。

「お店が続いてたらどっせ、次の時代はわたしもやったかもわからしません。中途で店がやめになりましたやろ。今度は下働きになってしもうて。」女主人の見習いから、いきなり主婦になってしまった。

「姉さんもお嬢さんで育たはって。お茶のお稽古でも、お針のお稽古でも、どこへ行かはるのでも女中さん付きでね。まあ何にもしはらへんほうどした。」「結局、わたしがね。何でもするのが好きどしたし。おかずをするにしても、縫い物をするにしても好きどした。今の人やったら、とてもできんことやと、わたしは得心してます。」

姑は新しい物が嫌いであった。ところが美子の家事と店の忙しさをみて、電気炊飯器を買えと言ったのである。「うちのお婆ちゃん、ハイカラな物は何でも嫌いな人ですの。コンロをかけても怒らはった。わたしが店を手伝わんならんようになって、薪でご飯を炊いていると、吹く時分にお客さんがあって、またしてもご飯をこがしますの。電気釜がはじめてできた時、『ええ物を売り出さはった。これをお買い』とお婆ちゃんが言うてねえ。『これを買うたらあんたがご飯をこがさんでええ。これをお買い』と言わはりました。テレビは、『子どもが学校の試験を受けんならん時分やさかい、買うたらいかん』と言うてね。炊飯器はいちばんに買いました。」

「わたしは内の仕事が多くなったのと、わたしの主人がきちっとした性分で、自分が何もかもしないと気がすまん人ですので、会計とかは自分がきちんとしはります。だいたいがぱあっとした商売人にはむかない人ですのでね。わたしはもう何でもまかせきりで、お

米が今いくらしてるかいまだに知りません。」家の中のことだけをしてきた。外との交渉は、家計の一円まで知らずにやってきたのである。

義姉は結局どこへも嫁がずに、一生をこの家で過ごした。「主人の姉さんはまたきっちりした人でね。お婆ちゃん以上にきちょうめんな人でね。」美子が布団をひき、ご飯を出していた。「中京のきちっとした人でした。お布団をひくのでも畳の目がいくつくらいのとこに、というほどで。ちょっとでも間違うたら、じろっと見はりますのえ。わたしだけのことにして、誰にも言わしまへんけどね。静かにひいてね。あわててばあばあっとひいたりしたら、えらいことどす。」

この義姉は、美子の長男が結婚して、まもなく亡くなった。中京では伯母のことを「あばちゃん」と言うのだが、「あばちゃんが亡くなるちょっと前に、息子に嫁さんを貰いました。お父さんがちょっと具合が悪かったので、縁が遅くなって、三十になってからでした。婚礼して、姉さんが亡くなりました。」病気になって一年半の間寝ていた。「とにかく重病人の看病ばっかりしてます。」夫の病気に義姉の病、そして姑の老齢化と、つぎつぎに美子にかかったきた。

義姉はとくに次男の秀雄をよく可愛がった。「上の子と九年も離れてるいちばん下の男の子てなものは、何もしませんわ。ほんまの

ぼんぼん。亡くなったあばちゃんが、それを可愛がって可愛がってねえ。いつまでも自分の側に寝させて可愛がってくれたはりました。わたしがつい忙しいもんやさかい、小さい頃から可愛がってくれはったんどす。」

可愛がってくれた伯母が亡くなった時、秀雄はどこかへ「行方不明」になった。好きなオートバイでどこかへ行ってしまった。「三時間ほどして帰って来て、『どこへ行ってたの』と訊ねたら、『どこを走ってきたかわからん』と言いますの。」きびしい義姉であったがやさしい伯母であった、と美子は言う。

この義姉に親しい友人がいた。「御神酒徳利というほどの仲のいいお友だちが、毎日遊びに来はりました。」「うちのあばちゃんと同じようにうちの子を可愛がってくれはりました。この方も昨年六十九歳で亡くなりました。よう遊びに来て、『お婆ちゃん。そんなことしたらいけまへん』と言うて、わたしの味方になってくれはったりね。わたしにも、『そんなことはいかん』と言うてお婆ちゃんの味方になってくれはったりでね。」この二人ともが亡くなってしまった。「寂しうなりました。あばちゃんは厳しい人でしたけど、ええ人でした。今ごろ思い出して泣いてます。」

この姉の友人も独身であった。親が娘を可愛がって手元に置いておいて、一生独身で過ごす女性がよくいたという。「今と違うて、

恋愛結婚でぱあっというような人は少のおすわなあ。ついつい行き遅れて、結局は親の面倒を見てね。」親といっしょに一生を終わる娘がよくいたという。

いろいろの人がこの家に親しくして来てくれることを、「喜んでます。年末には手伝いに来てくれはったりね。何かにつけて来てくれはります。喜んでます。けど、だんだんと寂しくなって。若い人の時代になってね。」「何のかんのと言うても、お婆ちゃんには元気でいててもらわんと寂しくなります。張り合いがなくなります。」昔の人とのつながりが薄くなり、失われていく。

8）分家---義弟の家

主人の弟、吉造は、「実習商業でね。昔は実習商業というのがありましてな。四条商業の前身です。富小路にあったんどす。三年の中学どすな。皆そこへ行きました。」学校が終わると丁稚奉公が待っていた。「何十人という人を使うている家のおぼんさんでも、卒業した明くる日から丁稚奉公です。弟さんは大阪の料理屋へ奉公に行かはりました。」「十七で学校をあがって、兵隊までどすな。兵隊検査が二十一どした。昔は何でも兵隊検査できりがつきましたな。学校をあがってすぐに丁稚に行って、兵隊で帰って来はりますんやなあ。」弟は体が小さくて即日帰郷となり、「家に帰って来て店を

手伝うたはりました。」

弟は昭和十八年に結婚した。「お父さんが帰って来はった時には、もう結婚したはりましたなあ。戦地に写真を送ったことは覚えてますねん。『可愛らしい人やなあ』という返事が来ました。留守の間に結婚しはったのかなあ。わたしは行きませんでした。何にもない時代で、うちらだけでしました。衣装だけ着て、大丸で写真だけ写したんどす。写真にはついていきました、お婆ちゃんと。あれは十八年の夏でした。」戦争が激しくなる前に結婚した。そろそろ品物は不自由になっていた。

家は別にしていたが、弟夫婦は錦に通っていた。「ごはんも皆いっしょにしてね。しばらくはおかずも毎日運んでました。」分家しても、生活はほとんどいっしょにしていた。

分家の奥さん、文子、は祇園町の出である。「育ったのが封建的なとこどした。京都で封建的なとこというと、祇園町と錦どした」と文子は言う。「行儀は、お客さん商売ですし、うるさいんです。下駄の脱ぎ方からうるさいんです。錦は昼の世界ですし、それに、商売人で仕出し屋というか魚屋にしては、先代はお茶人さんでしたし、厳しかったです。はじめは務まるのかと思いました。」

封建的な世界に生まれ育ったが、「わたしは新しかったんです。」女学校を卒業して洋裁学校へ通っていた。「大学生の方なんかとお

付き合いがありました。本を読んでいろいろ知りますやろ。その時分の軍国主義というもんが好かんでねえ。アカや言われて、読んでる本をお父さんに取り上げられたことがありました。」そういう若い時代を過ごしてきて、とつぜんに文子は古い富松に嫁いで来た。「行儀や言葉使いには苦労しませんでした。けど、言うに言われん圧迫感がありました。しんどおした。」

十九歳で文子は嫁いで来た。「お爺ちゃんやお婆ちゃんが、『何をするかわからん』と言うてね。それでずっとご飯も錦でいっしょでした。」新しい嫁は家の監視下に置かれた。

嫁の口答えは許されなかった。「『烏は白い』と言わはったら、『はい。そうどす』てね。黒やのに間違うてはる、と思うても、それを口に出したら、『女はでしゃばったらいかん』てね。『そやかてそれは』というようなことでも、口ごたえになるんどす。」兄嫁と十歳違いであるが、「はじめて錦に寄せて貰うた時、何と古い、うちとこよりもよっぽど古い、と思いました。」

小さい頃からの女としての習慣であったと分家の妻、文子は言う。「小さい頃から、若い頃から、そういうふうに、女はでしゃばったらいかん、てね。けど姉さんと違うて、わたしはちょっと新しいんです。けれども、錦では逆らうことできしません。うちは人形やないのに、うちにも意志があるのに、何でもはいはい、と言うのはか

なわんと思うたこともあります。」代々続いた古い富松で、「慣れたら何でもおへん。恐ろしいもんです。人間は教え込まれたら、若い時に植え付けられたら、それは結局はなくなりません。」「今は、わたしが古いなあ、ということになってしまいます。」

行儀や言葉使いが、今の若い人たちとは違う。夫に対して、「『あれ取って』てなことを言うたことない。『ちょっと。あれ取っておくれやす。これこれをしておくれやす』と言うことになりますなあ。」若い人のように「取って」とか「して」とは文子は言えない。「お婆ちゃんが、『今の人は自分の婿さんに値打ちを付けん』と言うて嫌がらはります」と美子は言う。

分家にとっては、「その古さが、ええとこ」だと文子は言う。「どんなに時代が変わっても、そこが家の歴史、というとおかしいですかなあ。家制度の古いとこは時代によって改革せないかんけど、ええとこは残しておきたいという気持ちはあります。何がええのかは、今の人によっては判断は違うかもしれませんけど。」「礼儀というものがなかったら、親子兄弟、夫婦であってもうまいことといかしません。他人が寄ってますのや。ある程度の節度がないと、生活していけまへん。自分の好きなことを、我か俺かでしてたら、言いたいこと言うてたら、気持ちはすっとしますけどねえ。」お互いがあって自分がある。

「ええとこ、悪いとこ、自分が感じたことはある程度改革していく、と言うてきたわたしが、『古いなあ』と言われます。昔は、新しい、と言われたんです。朱にまじわれば赤くなる、というので染まってしもて。結局は何にもせん、ということもありますわなあ。自分の家庭はなんとか、と思うて努力して三十年来たんですけど、今度はわたしが、古い、と言われる。」

「わたしなんかは抑えてばっかりで、大きくなりました。習慣というようなもんですなあ。無我夢中でやってきましたさかいねえ」と美子は言う。分家の文子は、「家庭というものは自分が住むもんですしね。女によって家風というものができてきますやろ。その生活、その家に愛着があるんです。下手な生き方をしたら、それで家は固まってしまいます。それを何とかしてね、一生を努力してね、そうしないと思うようにはなりまへん。わたしの方法としては、やることはやる、言いたい時には言う。」

「わたしらの育ったとこは祇園町、夜の世界。嫁いで来たここは昼の世界です。世間の風というか、鵜の目鷹の目で見られてます。『祇園町の娘さん、何をしはるやろう』てね。ふつうのことをしてても、『やっぱり違う』とかねえ。」

「今はもう見てはる人はないかもしれません。三十五年前は見てはりました。間違うたことはできん、こういうとこを出してはいか

ん、という努力は大変なもんです。一挙一動に人の目があるような気がするんです。」「まして、錦の富松さん。格式ある旧式のおうちやから、そこに恥をかかしたらいかん、もし何かあって恥をかかしたらどうもならん。母屋があってのわたしの家と思うてきました。」まわりから見られて、自分よりも家を大事にしようとしてきた。

「その母屋がころっと変わってしまいました。昔式のことを錦が放ってしまいました」と美子が言う。

分家からすれば、「わたしにしたら母屋は目標ですやろ、張り合いですやろ。見本であってほしいです。うちは分家ですし、母屋を目標として、そのために生活をいろいろと組み立ててきてます。これを壊されたのでは、うちらの目標がおへん。幹があって枝も葉も花も咲くんですさかい。」あくまで長く続いた本家があっての分家である。

「わたしの家が逆立ちして頑張ったとこで、一代です。錦は四代、五代でしょ。うちはこれから築いていくんです。同じ商売を何代も続けて行こうと思うたら、ふつうの努力ではできんと思います。それを錦はやって来はったのやさかい偉大です。これだけ古いということですさかい、重荷に思わはってもあたりまえ。そのよさは、いまの一代の者には付きまへん。苔といっしょです。それがうちの目標です。」

「わたしがこういう考えやから、古いと言われます。結局、三十五年でこういうようになってしもうたんです。現代的に変わるのもよろしいけど、やっぱりいいとこは残しておいて欲しい。わたしの念願です。」分家にとれば、本家は古いままで残っていなければいけない。

古い家に嫁いだ者は、「動いてる人形みたいなもんです。ただこの家を潰さんように、次の時代へ譲ったらええ、という気持ちだけできました」と美子は言う。「よそから来たもんがこの家を自分のものにして、どうこうしよう、というような気持ちはおこりませなんだ。」「わたしが嫁いで来てしばらくした頃、その頃はお婆ちゃんが何もかもしたはりました。亡くならはったお爺ちゃんがわたしに言わはりました。『おゆきが』、お婆ちゃんはおゆきと言わはりますの、『好きなようにやってるけど、おまえの時代になってもあれはできんで。今からそう思うておきや』てね。」きっちりした性格の主人が、「何もかもやったはります。」結局、「先代が言わはったとおりでした。」

「うちは違います。兄弟で違います」と分家の文子は言う。「締めくくりは全部わたしがせんならん。姉さんとうちとが違うてくる勘定ですわ。」富松が大丸に店を出していたのをやめ、分家は魚屋を始めた。「わたし、商売のことは何にも知りませなんだ。昔、娘

さんというものはお金の値打ちを知らんもんでした。お豆腐一丁がいくらかも知りませなんだ。買い物に現金を持って行かずに、帳面に付けておいてください、という生活でした。」「嫁いで来ても、お婆ちゃんが、『この月はこれでおいき』と言うて百円呉れはりました。食べるのは全部むこうでしたし、そのお金は小遣いでした。夫に、『お父さん。今月はたくさん使いましたなあ』というても十円は残りました。『お母さん。十円残りました』と言うと、『はい』と言うて百円くれはりました。」嫁になっても、家計のやりくりをしない「お嬢さん」のような嫁であった。

魚屋を開店して生活は変わってしまった。「借金がないことは偉いもんと思うてました。それで銀行へお金を借りに行ったんです。貸してくれはりません。借金がないのに何で貸してくれはらへんのやろ、と思いました。」「はじめは利息が高いですやろ。返していって信用ができて、利息も安くして貰える。お父さんが、『利息をまけて貰うてこい』と言わはったけど、それがどういうことか分からなんだんです。その時分、月で三銭二厘でね、半分くらい返したとこで、銀行へ行って、『利息まけて貰うてこい、と言われてます』と言うと、『三銭にしましょう』とかね。銀行は信用度を見たはりますのや。そんなことわたしは知りませんわなあ。」銀行との取引の仕方も分からなかった。「この商売始めていちばん上手になった

のは、借金くらいです。」

「だんだんと上手にならはりました。勉強しはってねえ。えらいもんどす。うちのお父さんは借金が嫌いでしてねえ。性分です」と美子は言う。「お婆ちゃんが、赤い印をつけた通いをどうとかしたはったのをじっと見て、いろんなことを習わんならん、と思うてましたけど、仕事がころっと変わってしまいました。」「同じように嫁入りしても、変わってきます。」自分で家を作って商売を始めた分家の嫁と、代々続いた家を守る本家の嫁とでは、大きく変わってきた。

「うちの息子の嫁さんでも、兄の方と弟の方とでは違います。兄の方の嫁は、大婆さんからわたしから、皆がいる中でねえ。弟の方は別居で気楽どす。」美子自身が、先々代の女主人がいた中で嫁の修行をしたのと、長男の嫁とは、時代が変わってもまわりの目は変わらない。

分家の嫁は弟の嫁ということで、「うちとこといっしょですがな。同じお嫁さんでも、義姉さんがいはるし、その点は気楽どす。そら弟の方が楽どす。人間関係が違います。」嫁入り当時ほとんど同居同然に過ごしても、長男の嫁と次男の嫁とでは、周囲からの目が違った。

分家の息子はまだ結婚していない。「これから嫁さん貰うて大変

どす。別居になりますやろけどなあ。同じ商売をするのやさかい、ねえ、離れているのと違います。わたしの出方が問題ですやろなあ。今度は姑はんになるんやさかいねえ。」跡取りは一人息子である。

祇園町は女の世界である。「うちらは女ばっかりのとこに育って、お婆ちゃんがいはりました。年寄りに対する気持ち、というものが小さい時から自然についてます。これはこわいもんどす。相手の顔色を見て判断する。姑さんのいはらへんとこで育たはると、これが違います。年寄りに対する思いやりがね。」「よっぽどうるさい姑さんはかないまへんで、しんどうて。」「お仏壇があるうちとないうちとではねえ。子どもでも、新しいものを貰うたら、『お供えしとこ』と言うのと言えへんとでは、違いますわなあ。」分家にはまだ拝むべき先祖がいないため仏壇がない。「そのかわり神棚があります。新しいものはいちばんに神棚へ供えるようにしてます。毎日々々何かね。それがその家の家風になります。習慣、性格になります。」小さい頃から習慣になっていると、「子どもは考えなくても、新しいものをお仏壇に持って行きますがな。」

「新所帯の家には仏さんがありません。子どもは何かを貰うたら、そのまま口に持って行きます。自分本位ですやろ。ものに感謝するということが欠けてきます。『ああけっこうやなあ』ということがなくなります。」「仏さんがあって、お墓参りして、そんなこと

が必要かどうかは別にしてですえ、ご先祖様がいはるから家が続いてきた、けっこうやなあ、という気持ちね。仏壇がないと、けっこうやなあ、ありがたいなあ、という感謝の気持ちが薄くなってます。」先祖のない新しい家では、感謝するという習慣が薄れてしまう。

「若い人は、何でもあたりまえ、という考えです。百円のお金を出して、百円の物を買うのはあたりまえ、という頭ですやろ。われわれ戦争中に育った者は、お金を出しても物がないのやから、『売ってくれはる人があって買える。けっこうやなあ。おおきに』ということになります。今の人は、千円の物を千円で買うのはあたりまえやないか、とね。ここが違います。売ってくれはる人がいないと買えしません。何ぼお金を持ってても どすえ。売らはる人がいはるさかい買えます。持ちつ持たれつどすやろ。お互いが『けっこうやなあ』てね。買うてくれはる人があるさかい商売人も成り立つ。ありがたいなあ、けっこうやなあ、という気持ちです。百円出して百円の物を買うのはあたりまえ、当然、というやり方とは違うてきますわなあ。」

「いやなお客さんもあります。店の者が、『もう売らん。もう断る』というようなお客さんもいはります。『商売人やったら、そんな人にこそよけいにお金を使わさせたらええ。そのお金に頭を下げるのや』とわたしは言います。『お金を貰うのやさかい、ああけっ

こうやなあ。そう思うて頭をお下げ』と言います。『商売人やったらそこまでお行き』と言いますねん。若い人は、好かん、と思うたら、お金なんか要らん、と思うてしまうのどす。」新しい女だった分家の妻も、若い者の態度には手を焼く。「難しいことどす。時代ということがありますしねえ。」

富松の店先で乾物を売っていても、若い者とは違うことになる。「わたしが一生懸命に売ると、ね、一つでも売らんといかんと思うて気っ　てますやろ。若い子が、『お婆ちゃんは親切に売らはる』と言うて感心してます。『親切に売らなんだら、お客さんは来てくれはらへん』と言いますのやけどねえ。」「自分の気分が悪うても、いつもと同じ調子でお客さんに接し続けるというのは、商売のこつですなあ。」

客によって態度を変えるのもよくない。「一つやったら邪魔臭い、というのはいけまへん。一つ買う人は気がづつない、そういう人にこそ丁寧にせんといかん」と思って美子は売っている。

客の方も変わってきている。「二十歳くらいの娘さん。『このニシン下さい』と言わはったんどす。『百グラムてどのくらい』と言わはったん。『これだけです』と言うて秤にかけたら、『少ないねえ』て。ポイっと行ってしまわはるのどす。百グラム三百五十円で買おうと思わはったら、自分の思いよりも少なかったんやろうけど、

少ないねえ、でパアっと行ってしまわはるの。ちょうど銀行の人が来たはって、感心したはりました。『少ないしやめときます』とか、『すみません』とかねえ。一言いうたらええのに。」「今の時代、そんな人ばっかりとは違いますけど、びっくりするような人がいはります。」

分家がやっている鮓屋では、客が酒を飲む。「夜遅くに、『酒だけでも飲まして』と言うて来はったら、『ネタがおへん』というわけにいかしません。いやな顔できしません。うちにしたら他にもお客さんはたくさんありますけど、その人はわざわざうちに来てくれたはる。嫌な感じを与えられしません。商売人はそこがかなわんのどす。」「しんどうても、悲しいても、つろうても、商売人が相手に自分の気分を顔に出して見せるというのはもってのほかどす。」

鮓屋が休みの日に、喫茶店へ入ろうと思っても、知っている人の店には入りたくない。「知らんとこで、ぼけっとしてお茶を飲む、ということがしてみたい。」「お風呂へ行こうが、道を歩いていようが、知っている人はいはります。頭下げてばっかりです。頭を下げんと、自分だけで、誰も知らんとこで、ぼけっとしていたい。」商売人はいつでもどこでも客に見られている。「姉さんでも、『旅行へ行きたい』と言わはるのはこれですやろ。」

客相手だけでない。家族の関係でも、「どこかへ行ってしまいた

い」と美子は思うことがある。「姉さん、それは疲れたはりますのや。疲れるということありますやろ。それでも生活していかんならん。そこが家族生活の悪いとこです。人間関係というのはいつまでたっても戦いどす。うちは夫婦と息子と三人ですけど、お互い気分のええ時でないとねえ」と肉親だけの家族でもうまくいかないことはある。まして、三代、四代の家族では、気疲れということがある。

分家の一人息子はまだ独身である。「うちにはまだ大役が残ってます。嫁は二人の親を見ていかんなりませんし。」商売人の跡取りは、家と親の面倒をみなければならない。「商売人というのは、お嫁さんがむつかしい」と美子も言う。息子は高校を卒業して、六年間鮓屋で奉公し、父の魚屋を鮓屋に変えた。「一人息子、こっちは気を使うているつもりでも、子どもはそれ以上に二人の親の間のことを気使うてると思います。かわいそうにねえ。」

「たとえどんな小さな商売でも、命をかけないと。」「こんな小さな鮓屋くらい、と思わはるかもしれませんけど、やっぱり命懸けです。」商売人は、その商売のように生きていかねばらならない。「魚屋をしていた時は魚屋らしく。鮓屋になったら、鮓屋らしく。」「らしく」なければならない。

人間というのは、「らしく、というのがいちばん大切と思います。」「嫁さんは嫁さんらしく。今どき、嫁さんか娘さんか分からんでしょ

う。わたしはこれを心掛けてきました。らしく、ということ。なかなかに難しい。皆分かっていながらね。女は女らしく。わたし、これがちょっと無理。男性的で。」鮓屋らしくはなっている。

家を「続けていくというのは大変でね。うちらはこれから。二代三代と続いてくれるまではどうしよう、と思うてねえ。それまではものすごい努力が要ります。歴史です。義姉さんとこでも。」古い本家には歴史がある。

本家の仏壇には分からない位牌がある。「毎朝お茶をあげますやろ。いったい誰やろう、という仏さんがいはります。戒名は知ってますけどね。林治郎兵衛さんと言うて、お婆さんの出所の人ですねん。文化十二年に死んだはるんです。百二十何年前になるのどすてなあ。」「富松は三代目がいちばん盛んでした。その前の前が富田松吉でね。四十一で亡くなってます。明治の前の人ですねえ。死なはった年と何歳で亡くなったというのを勘定しては、何年生まれかを見るのどす。」

仏壇にたくさんの仏さんがあるだけでなく、神さんもたくさんまつってある。「朝には飯室の不動さんにお茶をあげて拝みます。若い人は知らあらへん。比叡山で行をしはりますやろ。飯室堂の不動さんに篭もってね。あのお不動さんです。阿闍梨さんが歩いてずうっと廻らはりますやろ。」比叡山の千日回峰行の阿闍梨信仰がこの家

でもまつられている。

「うちのお不動さんは比叡山のですか。あれは受けたままですやん。何せ古いというとおかしいけど、とにかくたくさんあるんです。皆にお水あげはったら何十とありましたなあ。」分家にも神さんがまつってある。

本家にはもっとたくさんの神さんがまつってある。「この頃はずぼらになって。何の神さんかというのが分からんようになってね。ぜんぜん分からんのがあるんです。お婆ちゃんに訊ねても分からんのどす。」「姉さん、あんまりまつりたおしてもいかんのどすなあ。けんかしはる、というようなことがあるんどす。」

先々代の女主人が信仰深く、あちこちの神さんを請けて来た。「箕面の弁天さん。あそこへ講をかけはりました。毎月毎月。昭和十一年か十二年でした。講をかけると弁天さんのご神体があたるんどす。朝から精進してそれを請けて来はるんどす。帰る間はぜったいに喋ったらいかん、と言うてね。店の人が担いで帰らはりました。それが二体あります。蔵にももとから一体ある。三つになります。」「三つも同じとこにまつっといたらおかしいわねえ。拝んで見て貰うたら、『二つは外へ出しなさい。六畳の部屋に出しなさい』と言わはって。天神さんの横にまつってあるのやけど。あんまり多いので、箕面へ行った折にでも納めて来たら、と思うてるのやけど。元

のとこへね。古くなったし返す、というのもけったいな話やけどねえ。」何かにつけて、運命鑑定や方角の良しあしを、占いでよく見て貰う。

「うちにも一体あります。うちのお父さんが弁天さんですやろ。お父さんと思うて毎日水をあげて拝んでました。石丸先生が言わはるには、『十年以上前からうちの守り神さんになってはる』て。『世話をする者に移り替わって、わたしの守り神さんになったはる』てね。『お香を欲しがってはる』ということで、日を決めて、毎月十八日に、白檀のお香を七枚あげてます。」「そういうことがありますねん。おうちやったら笑わはるやろけど。」神信心や運命鑑定を古いと言われないかと、分家の文子はわたしに弁解する。それぞれが守り神を持っているのである。

本家の隣で次男が蕎麦屋をやっている。「次男の秀雄のとこ、竈を焚いてますやろ。むこうにいはる神さんが、『熱い、と言うたはります』のやて。それで、『二十八日になったらかならず小豆を炊いてあげなさい』と先生が言わはった。うち、毎月二十八日になったら、小豆をおぜんざいみたいに炊いて、ほんのちょっとでもあげてますの。」商売に関わる神さんは、大事にしなければならない。

「お婆ちゃんが、この神さんはあんたのとこ、と言うて授かってくれはりました。それはいまだにお守りさせて貰うてます。」分家

を守る神である。「この家にはこういう用事がありますの。うちがここへ来た時から。うちとこではうちとこで、ちゃんと神さんが置いてあるんです。」嫁ぐ前からまつってあった。「お不動さん、弁天さん、祇園さん。それだけ入ったはりました。見て貰う人が言わはるには、『全部が力をかしてくれたはる』てね。無駄にいはるのとは違うのですて。」

新しい家には必ず神さんをまつる。「あんたの時もそうやったけど、うちも今度は秀雄が出たやろ。『お不動さんを持って行かんと』とお婆ちゃんが言うてね。『うちでしておやり』と言わはる。本人がまつらんといかんと思うのやけど、そこがちょっと分からへんのどす。あっちへ、新しい家、子どもの寝泊まりしてるとこへね。それに、あの人のお店にも置いてね。」

「そのへんが古いんです」と文子がうける。「一人一人に守ったはる人があると言います。」「わたしは毘沙門さん、丑歳です。亥は魔利支天さん」と美子は言う。「うちも亥です、五黄の。『亥のやん。亥のやん』と言うて、『皆に勢いが強い』と嫌がられてます。錦の兄さんも亥ですやろ。わっと行くけど、わりあいにあかんのどす」と分家の文子が言う。生まれ歳で性格が決まっている。「わっと行って、引っ込みがつかん。あとから考えはるのどす。うちのお婆ちゃんは子歳です。一月六日の生まれどす。それで、亥で勘定さ

れはります。かかっと行かはります。」と美子。本家の老女主人と分家の文子と生まれ歳が同じになるので、「共通点があると思います。向こう意気は強いけど、どうも情にもろい、気があかん。」

神信心や生まれ歳の性格は、人が家の目でだけ作られるものではない持って生まれたものなのである。守り神がいて、生まれついた運勢の回り合わせがあり、家族の関係がつながりあっている。

9）家族

美子の長女は結婚して東京に住んでいる。「同志社を卒業して、鴨芹学園の花嫁学校に行ってました。同志社の先生が、お仲人でした。三月に卒業して、十月に嫁に行ってしまいました。二十歳で片付いてしまいました。」

「自分の娘を嫁に行かせるなんてねえ。わたしはまだ四十いくつの時でしたしなあ。」「何にもしてない、それこそわたしみたいな子ですねん。高校終わる時、大学へ推薦で行けますやろ。『四年制の大学へ行きたい』と言うて泣いたんです。高校の先生に相談に行きました。『ふつうの娘さんとして育てて、お嫁入りさせはりますのやろ。それやったら四年制へはやらんとおきやす』と言わはりますの。『あんなとこへ行っても何にもならん』と言わはるのどす。『学校の者から言うのは何やけど、同志社の女子大を四年間行った

というて何にもならん』てね。『何かをまっすぐにするというのなら別やけれども、そうでないのなら花嫁学校へ』と言わはりました。『鴨芹学園なら昔の府一［府立第一高等女学校］の後やからええ先生がいはる』てね。泣くのをなだめて鴨芹学園へやりました。」

「お茶とお花は小さい頃から習うてました。鴨芹学園の二年間で、料理から和裁、洋裁、全部すっくり覚えました。卒業する時には、オーバーでも何でも自分で縫えるようになってね。そのままどこへも行かずに、すっとお嫁入りしてしまいました。」

「あんな子が、東京てな西も東も分からんとこでやっていけるやろうか、と思いましてね。いつも見て貰うてる星占いのえらい先生に、こっそりと見て貰いました。『この人はやる。東京の真ん中へでも手放しなさい』と言うてくれはって。まあ、親の気休めですけど。引き留めるわけにもいかしません。それでまあ安心してやりました。」人生の岐路には、占い師に相談する。

結婚の翌年に男の子が生まれた。「五十になる前に、お爺ちゃん、お婆ちゃんに、なってしまいました。」つづいて、女の子も生まれた。

「うちのお婆ちゃんにとっては曾孫です。はじめての曾孫とか孫とかいうものは、いちばん可愛いもんどす。お婆ちゃんは自分の孫みたいに思うて、わたしのいることを忘れてしまわはります。」孫

である「上の男の子が大学卒業して結婚すると、わたしも曾孫を見ますなあ。」

長男夫婦は裏の空き地に別棟を建てて住んでいる。「二部屋に台所という小さいのを建てて、そこにいます。呼んだらすぐそこにいますし、同居といっしょどす。ご飯もいっしょどすしね。」

長男、定治郎は、同志社高校を卒業した。「卒業してすぐに叔父さんの店へ見習いに行きました。」「塩干物の店は朝が忙しおす。卸をしてますんでね。配達やらで昼まで家の手伝いでね。昼から下(しも)へ行ってました。」下というのは、京都では南のことである。四条通りを越えたすぐ近くに分家がある。その頃、「うちの人が病気になって、それがきりなって、うちへ帰って来ました。」

長男が二十五、六歳の頃、店を継ぐのがいやになった。「『あんたは錦の富松の息子や』と言われますやろ。それがしんどい。若いと何もできんように思うてしまいますのやろうなあ。ある時、どこかで飲んで家に帰って来ません。探しに行ったら、四条通りに座り込んで、『錦の富松が何じゃ』と言うてねえ。」「『ある時期が来たら、そんなもんは何でもない。富松てそんな偉いもんやない』と言いましたけど。『また得することもある』とも言いましたけどねえ。『出ていく。弟に譲って出ていく』と言うてはりました。今になったら、何かにつけて便宜をはかってもらえる。あんなに言うた

ことを忘れて、一生懸命やったはります。」老舗の跡を継ぐというのは、若い者には時に重荷になる。

長男には男の子と女の子が生まれた。「下の女の子が生まれた時です。生まれて一ヶ月はお母ちゃんを里へ預けましてね。わたしらでもお産したあとは必ず里でね。その方が齢がいってから体にええ、と言いまして。産後の無理は齢いってからこたえます。むこうもよろこんで預かってくれはります。」嫁は実家に帰って、生まれた子といっしょに産後の体を養う。

ところが「お母ちゃんが体をこわして、また一ヶ月預けました。上の三つと、生まれて一ヶ月とをわたしが見ました。『お母ちゃんまではよう世話せんし、子どもは預かります』と言うてね。」美子も齢をとり、「下の息子の赤ん坊はもうあきません。十年、いや六、七年前かねえ、もうあきません。抱いたり負うたりできしません。上の息子の時は、ようしたなあ、と思います。自分ながら感心します。」

次男秀雄は、蕎麦屋を隣でやっている。「兄と同じように同志社へ行って、大学で経済を出ました。弟は月給取りにでもせんとねえ。それが、古美術やの建築やの、そんなんばっかりでね。月給取りさんにならはると思うてたら、『ぼくは月給取りにはならんで』と言うてね。大学を出る二年ほど前から、『ならへんぞ。ならへんぞ』

てね。偏屈でね。あまりものも言わん子で、商売人になるてなことわたしは思うてませんでした。一生懸命に大学へやったのにねえ。」

次男は家を出て行かなければならない。サラリーマンになって会社勤めをするのが順当な道のはずであった。「お婆ちゃんは泣かはりました。うちには月給取りがないのどす。一人くらい月給取りになって、と思うてね。月給取りはどんなええものかと思うてましてねえ。姉はサラリーマンに片付きましたけど。息子が一人くらいサラリーマンでもええやろうにと思うてました。」会社勤めの方が商売人よりも安定しているはずである。

大学を卒業すると蕎麦屋をやると言い出した。「わたしは紀州屋が義理の兄弟になります。飛鳥庵というお商売してますやろ。そこへ、『商売するけどどうやろ』と相談に行きましてね。」美子の妹が伯父伯母の紀州屋という大きな蕎麦屋に縁づいて、「まあ言うたら、わたしの弟みたいなものですやろ。それが言いました。『あんた、蕎麦屋なんかやめとき。しんどいで。自分で一生懸命働かんならん。うちみたいに大きくなってしもうたら、店の者にまかしといたらええ。一から始めるとしんどい。やめとおき』てね。そうしたら、『叔父さんには世話にならん』と言うて、大学を卒業した明くる日に、木屋町の大黒屋へ行って、高校出と言うて、『見習いさせて下さい』てねえ。」

「末息子であばちゃんに可愛がられて育ってますやろ。鍛えてない体を早く一人前にするのに、大黒屋の大将がうまいこと考えてくれはりました。大丸に出したはる店にやって、こしらえの下まわりに使うてくれはりました。体の動きを作らんといかん、というので、忙しい時間にぱぁーと動く体をね。そこで一年間働かせて貰いました。そして、大阪の京橋に新しく出さはった店へやって貰うてね、上のえらい人と。その新店へ一年やらせて貰いました。そこで、蕎麦をこしらえるとこから皆飲み込んでね。」

秀雄は二年ほどで辞めてしまう。「『同じとこで修行させて貰うてても何やし、よそへ修業に行かせて貰います』と言うて辞めて来たんです。『そんなに早く辞めんでも、次を見つけてくるまでいさせて貰うたら』と言うたんですけど。何にもしないで遊んでいるんです、三ヶ月ほど。ちょうど十二月で忙しいし、『店をお手伝い』と言うて手伝わせてました。」

店先に続いて一間ほどの土塀がある。よその店に貸していたこともあるが、ちょうど借り手が店じまいをして閉めてあった。「近所の人が、『こんなええ場所を、閉めておくのはもったいない。秀雄君が蕎麦屋をしはったら』と言わはりますの。『二年やそこらの修業で蕎麦屋ができるはずない』と言うてたんどす。皆がやれやれと言うてくれはるので、本人もその気になったんです。」

美子は大黒屋へ行って相談した。「ご主人に、『秀雄でできますやろか』と訊いたんどす。そしたら、『やろうと思うたらできる。やれん者は十年が十五年修行してもあかん。あの人はできる』と言わはったんです。」「自分の好きなように設計して、小さいとこに小さい店を始めたんです。」

「はじめはちょっと上の人にいて貰うてね。今は自分一人でやったはります。アルバイトの学生と三人でね。」「きっちり座っても十五人しか入れません。何でも自分でしないと気がすまん性質でね。とにかく手作りで、てんぷらも自分が揚げて、だし汁をかけてジュウといわして持って行く。お客さんは得心して食べてくれたはります。おかげさんでお得意さんができて、『こんな狭い店』とか言われてます。」

商売を始めて三年になる。「一昨年結婚しました。商売して二年目で。おかげさんで軌道にのってます。」「わたしは、それも手伝わんなりませんやろ。」独立してもまだまだ美子の手は要る。定食に付ける漬物は美子の手作りである。

跡継ぎは、「下の女の子がその気でね。男の子の方は、洋館建てのとこに勤めると言うてます。日本建てのこんなんはあかん、と言うてね。」凝った作りの家の中では、「『あそこにものをあてたらいかん。ボールはいかん』と言われますやろ。この間も蔵の壁にボ

ールをあてて、お婆ちゃんに怒られましたんや。『下の座敷は走ったらいかん』とかね。自由に遊べませんのや。それで、『洋館建ての鉄筋コンクリートの大きいとこへ勤めるのや』と言うてます。」

町なかの家の立て込んだこのあたりには、子どものための広い遊び場がない。「昔は通りで遊んでました。こんなにたくさん自動車がなかったさかい。だいたいは二階で遊んでました。昼過ぎに用事が終わると、女中さんは二階へ上がって、アイロンあてたり、洗濯物の始末をしたりね。そこでわたしの子どもも遊ばしてました。階段から落ちんように、はめるものがありましてな。お爺ちゃんが子どもの時分にこしらえはったのがいまだにあります。やっぱり二階で遊ばしたはったんどすなあ。」

子どもたちは代々地域の小学校へ通ってきた。京都の中心部では、小学校は地域活動の中心であり、明治の学制改革の時に町の人々がお金を出し合って建てたという歴史がある。親子三代にわたって通ってきた小学校をやめて、孫たちは私立の小学校に行くことになった。「勉強の仕方が違うらしおすなあ。女の子はずっと上まであるのどす。男の子は中学で考えなりまへん。昔やったらここの学校へ行かんならんと思うてね。上の男の子は、塾へやったり家庭教師つけたり、大変やし。私立へ行くと学校だけで一生懸命してくれはるのやったらまあええ、ということでねえ。」地域の小学校では進学するた

めの受験勉強が心許ない。

「昔のわたしらの時代は、中学の試験に落ちても子どももさっぱりして、まあ入れたらそれにこしたことはない、ということどした。落ちてもふつうの公立の中学が待っててくれはります。高校で落ちるとちょっと難儀で、どこかを探さんならん。この頃は、その公立へなかなか入れしません。」公立高校へ入っても、大学へは簡単に入れない。「うちらの子は中学で入れとくと言うて、同志社へ受けさしたんどす。あとは上へあげてくれはるさかいにね。親が学校のことについてられしませんしねえ。中学の時に入れておいたら、あとは楽、と言うてねえ。それがこの頃は入れてもらえんのどす。」大学までいける私立中学へ入るのが難しくなった。

「公立が悪うなった。先生がストライキしはるのどすさかいなあ。この頃はもうねえ。」学校も昔では考えられないようなことが起こる。「ここの小学校では、下の人をあげるのばっかりにかかってはんのどす。ちょっと上の者は、ちっとも伸びないのどすて。上の学校へやろうと思うたら、別に勉強させんならん、と聞いてくるもんどすさかいなあ。上の方の者には、わりかた知らん顔みたいですなあ。」受験競争に勝とうと思うと、公立の学校では難しい。

新しく行く私学の小学校は遠くなる。「ここら界隈と違いますやろ。電車に乗って、バスに乗ってねえ。世の中が変わってきて、わ

たしらには分からんようになって。親が決めはって、好きにしはったら得心ですしねえ。」子どもは喜んで行っている。「毎朝きばって行かはります。靴づれこしらえて。」

１０）今の暮らし

今は「店番してるのがいちばんよろしい」と美子は言う。「急に、『中に入って中でこちょこちょとしておれ』と言われても、かなんのです。」とくに最近、脚や腰が痛くなってきてからは、店に出ているのがいい。「退屈したら店に座ってます。その方が気がよろしい。」

「背中がいがんでるもんどすさかい、もう治らしません。温めて引っ張って貰うても、飴みたいにはいきまへん。これ以上に悪くはならんように毎日一生懸命です。」

姑も亡くなった。「神さんも二階へあげてしもうて。毎日二階へあがるのもねえ。一日（ついたち）と十五日とにお掃除して。お婆さんがいはった間に減らしてくれはりましたけど、まだええかげんにいろいろあります。次の代になったらだんだんずぼらになりますやろ。目に見えてるものだけになると思います。」

「バスでもこの六年ほど、ただで乗せて貰うてます。七十からですさかいね。それでも、立っててもめったに、『お掛けやす』と言

うてくれはる人はあらしません。」市がくれる老人の優待パスを使うようになった。

「年寄りばかりが行ってる病院へ行っても、他のお婆ちゃんには、『気をおつけや』と看護婦さんが親切に言うてくれはるけど、七十代の者には、『はいこっち』てなもんどすわ。八十から九十近い人の部には入れてくれはらしません。せいぜいその中には入りとうはないと思うてますけど。」まだまだ元気で毎日を過ごしたい。

戦後の闇市の頃に軒先を借りて商売をしていた焼き魚屋も、子どもたちが店を持ち、料理屋を開いている。そこへ鯖を配達することになった。「むこうのうちへ鯖一本を届けるとは、夢にも思うてませんでした。料理屋さんの前でどこから入ったらええのかと迷うてたら、あの小さかった息子さんが飛んで出て来て、『えらいすんまへん』と言うてねえ。」「毎日どこの軒先を借りようか、てなもんで商売してはったのがねえ。夕方になると夫婦が自転車で相乗りして帰ったはりました。仲がええなあ、と思うてね。」

そのおかみさんにバスで会った。「ぴゅうっとええ身なりしてね。貫禄でした。こっちは常の形(なり)で走って歩いててねえ。そやけど、『ご無沙汰いたしております』てね、ていねいに挨拶しはりました。忘れてはらしません。うちのお爺さんが、ようお世話してはりました。」

店を貸していた肉屋も大きくなった。「出世しはりました。兄さんの方は亡くなりました。息子はんが、お祭にはちゃんと持って来はります。」昔の義理はなくなっていない。

通っている病院で、「わたしくらいの齢の人がいはりまして、その方が丁稚にいってた店が、『一日(ついたち)と十五日に魚日(さかび)と言うて、富松つぁんのご馳走を出してくれはりました。常は野菜の炊いたのとかお汁とかいうおかずばっかりで、魚日にはお焼きもんを出してくれはりました。あの味がいまだに忘れられません』と言うてくれはりました。」

店に来た人が、「『おたくがあの富松つぁんどすなあ』てね。『錦の富松つぁんというたら有名で』て。『そんなあほらしいこと言わんといておくれやす』と言いましたけど。何か買うて帰ってくれはりました。」昔の富松を知っている人がまだまだいる。

「昔の顔を思うてくれはると、かないまへんのや。昔の富松つぁんのお嬢さんやったら、うちの姉さんの時代、お茶のお稽古には女子衆さんがついて送り迎えしてはりました。今の富松つぁんのお嬢さん、スクーターに乗ってエレクトーンのお稽古に走って行かはりまっせ。昔のお嬢さんは、今日はどれを着る、というと、ちゃんと女子衆さんに着物を出して貰うて、ね。帰って来たら、脱いだままで放っておいても、女子衆さんが始末したはりました。今は送り迎

えはないし、ね、時代も変わって。自分のお嫁入りも、自分でお勤めしてちゃんとして貰わないかん、というようにね。」何でも自分でしなければならない時節になった。

「わたしがここへ来た頃でも、『今日は里へ帰っておいなはい』と言われんと里へ行かしまへなんだ。里へ帰るいうても、先に丁稚さんがおみやげ持って行かはります。今は里も近いし、常の形(なり)して自転車乗って走って行かはります。気楽でねえ。」お嫁さんも様変わりである。

体の調子がいいと老人会の旅行に行くこともある。「学区の老人会と東中京老人会とね。この学区の者だけで行くと、いつも同じ顔ぶれでねえ。他の学区が入らはると、楽しいて面白いのどす。カラオケの一つも歌わはる人があってね。いつも同じ顔やと面白うない。『またあの同じのを歌わはる』と言うてね。お互いに分かりすぎてるとあきませんの。」

別家の富矢の奥さんと行く。「富矢の奥さんが老人会のお世話をしてくれたはります。何ぞいうと、誘うてくれはります。ゲートボールもやったはるのどすえ。ナイターでやりに行かはるんどっせ。わたしらはそんなもんようしませんけどね。」

実家の方の兄弟はよく集まっている。「わたしは盆とお正月だけ、年に二回会うだけですけど、あっちはちょいちょいね。ハワイへ行っ

て来たとやら言うたはります。この前は一回だけ、紀州へ行こういうことで、姉さんと、妹、弟夫婦で、一泊で行きました。紀州屋とうちとだけが姑さんがあって、なかなか出られしませんでした。むこうは気楽で、自分らが大将の姑さんになったはってね。好きなように出て歩いたはります。これからは出られるし、『誘うて』と言うてますけど、あんまり遠いとこはねえ。だんだん齢をとってきて、企ても減ってきてるらしおす。」

実家の兄弟たちは「年会をたいそうにしはります。そういう時に呼んでくれはります。父親(てておや)はもう七十回忌です。お母さんのは忘れてしもてね。怒られてます。こっちへ来たら、『里のことは考えんでよろし』でしたやろ。あっちのこと、忘れてしもて。」嫁いで来て長い年月がたってしまった。

「こっちはこっちで、『ちょっと行きましょうか』『食べにいきましょうか』と言うてね。お婆ちゃんがまだ元気な間は、出かけました。お婆ちゃんが弱ってきはると、放っといて行くのは気の毒でねえ。話は出ても、さてとなると、『お婆ちゃんが気の毒やし』ということになります。」「最後は箱根でした。皆で行きました。お鮓屋のお母ちゃんだけが行けんようになりました。その分、東京に嫁いでる娘を呼んで、ね。『お父ちゃん。一晩だけ貸しておくれやす』と言うてね。箱根で一泊しました。」

１１）息子の死

昭和六十二年夏、長男が死んだ。

「弟の方が昔の齢でいうと厄年でした。やっぱり本厄やったなあ、と言うてます。」「あの人が最後に病院へ行くという十日ほど前、『お爺ちゃんもだいぶに齢がいったさかい、病院へ行ってよくなって帰って来たら、経理の方もやるさかいな。もうしばらく辛抱してや』と言うてました。めずらしいこと言うてたんどす。」それが最後であった。

商売は家族でやっている。長男の嫁が朝六時に表の戸を開ける。「『お爺ちゃんも齢いかはったさかい、新式の戸の出し入れはわたしがします』と言うてやってくれてます。」「子どものお弁当を作って、学校へやって。そのあとにお爺ちゃんが起きて来て、品物出してね。番頭さんが買い物にいって、八時頃に帰って来はります。その頃にはわたしらも店に出て行って、卸のお客さんを受ける、という具合です。」店は今まで通りに動いている。

嫁も中心になって働き始めた。「そんな朝早くに店を開けんでもええのに、と思うても、毎朝六時には開けはります。」「嫁というので手伝いみたいな気持ちがあったんどすやろかなあ。この頃は自分の仕事、という気持ちでね。番頭さんも、わたしに言うよりも、

あの人に『こうしたら』とか、『あれはこう』と言うたはります。ありがたいなあ、と思うてます。」

「まだ自分で仕入れに行くというとこまではいってませんけど。商売は難しおす。」「『この品物はもう値を下げて売ろか』とか、相談しましてね。『あれはおかずにしようか』とか、『捨ててしまわんと』とかね。『食べられるうちに食べてしまいましょ』とか、そういうふうに考えはるようになってます。」嫁は積極的に店を切り盛りし始めた。「かえって、今までより皆が輪になってます。」

息子の死は「まだ嘘みたいでね。しようがないとは思うてますけど、朝に拝んでると、『何であんたを拝まんならんのや』と言うてねえ。お仏壇はきっちりと閉めてましたのやけど、この頃は開けておいて、『あんた。皆を見ててや。お店を見ててや。子どもを見ててや』と言うてます。」

「あの人が病院から帰って来た時、下の子とお母さんがわたしに抱きついてね。お母さんが、『わたしはどこへも行くとこがないようになりました。どうぞお頼みもうします』と言うんです。『皆で一生懸命やっていこうな』と言うてねえ。わたしはそれが身に染みて、よう言うてくれたなあ、と思うてます。」

嫁の実家は代が変わってしまっている。「あの人の里は弟さんが所帯をやってはるし。お父さんとお母さんは元気でいはるけど、さ

てと言うて帰るとこはあらしません。誰しもねえ。自分はここへ来たのやからここを守っていかんならん、と思うてくれてね。『お母さん。どうぞ頼みます』と言うたさかい、『こっちも頼みます』と言うてね。」嫁いだ先を守っていかなければならないのが、女たちの生活である。

「昔人間みたいに、『ここにはこれがあって、あそこにはあれが入ってる』てなことを常には言うてしません。お婆さんが亡くなった時、わたしが何も言いつけないのに、弟息子の嫁さんとガラス拭きして、蔵のお座布団出して、きちんと用意してくれました。何にも教えもせなんだのにねえ。常にそれとなしに見てたんどすなあ。」

時代が変わっても、「女主人」は見覚えして育っていく。

結語

1）物語の枠

わたしの習作であった「『家』女が作る世界」は、「家を守る女」の人生への感謝で終わった。

> 朝は起きてすぐに、仏さんにおつとめをする。お不動さんに毎日水をあげ、おもちをそなえる。十時頃までは、店は卸しの商売で忙しい。家の中の仕事の手のあいた時には、少しでも売りあげになるようにと店を手伝う。戦後、てっとりばやい商売と始めた塩干物屋であるが、これだけ長い間やっていると、仕入れの仕方から売り方まで、だいたいすべてのことがわかってくる。齢をとって体のあちこちが痛くなってからは、根気がなくなって、家の中でいるよりも、かえって店番をしているほうが気がまぎれてよい。たいくつしたら店に座っている。夜、ふとんに入るとありがたいことやと思う。お金に苦労して走りまわったこともないし、子供は一人として心配するものもいない。年金などもらわなくとも、ちゃんと暮らしてゆける。人の世話にならずに、なんとかやってゆけることは、本当にありがたいことだと思ってくらしている。（橋本　1981、104-5）

この語りには、送ってきた人生への誇りと今後への希望がある。半生の物語であると同時に、自分自身の生き方を支えてきた「道徳」の表明でもある。語られた家の歴史には、商売替えをしたといって

も、四代にわたる家を譲り受けて守り、子供たちも無事に育って次の代へと家を伝えていくという喜びが込められている。確実に老いてはいっているが、誰に迷惑をかけるということもなく、自分の務めは果たしてきたという自負がある。そして、何よりも、次の世代への希望がある。

今回のこの本は、この女主人が跡継ぎを失ったところで終わっている。次代を担うはずの長男はいない。家を守って生きてきた女性は、自分の一生を終えようとする時、次代に譲る家はあっても、譲るべき跡継ぎを失っている。過去から継いできた家を守り、未来へつなぐという彼女の生き方が、予期しなかった長男の死によって断絶されてしまった。継いでいくという未来への希望は、現在の不安によって断ち切られてしまった。「日常倫理」として語られた半生の歴史は、行き場を失っている。

ここに記録した彼女の話は、大部分は長男が生きていた時のものである。彼女の物語は、長男の死によって突然に中断された。数年にわたって記録してきた家についての彼女の描写は、単に過去の出来事となり、現在の自分を読み込む対象ではなくなってしまった。

長男に起こった悲しい出来事のあと、彼女はわたしのインタヴューに二回応えてくれた。彼女の態度に、過去を新たに掘り起こし、再生させようという意欲は見出すことができなかった。一つの人生

が完結を迎えた、という印象をもってインタヴューを終えた。物語の終わりであった。

わたし自身のこの家への関わり方も変わった。彼女との最後のインタヴューで、わたしとこの家、さらにこの商店街との関わりは、これで終りにしようと思った。続けられていた解釈的循環の輪は、断ち切られてしまったのである。

四代五代と伝えられてきたこの家は今でも続いている。残された長男の嫁は、夫の死という大きな悲しみを契機に、かえってこの家に根を下ろすようになったし、自分なりのやり方で商売を続け、むしろ新しい店にしていこうともしている。新しい女主人による新しい物語の始まりである。

女主人になるべくしてこの家に嫁ぎ、戦争で家が商売替えしてしまい、小売りのおかみさんになってしまった年老いた「女主人」は、自分の生き方の証として家を守ってきた。戦後、女主人から「おさんどんをする女子衆（おなごし）」になってしまった時点で、継承すべき家はなかったのかもしれない。けれども、長男が五代目として生きているかぎり、引き渡すべき「家」は彼女の世界として存在していた。もちろん建物としての家は今も存続しているし、商売をしている場所もそのままにある。物理的な時は容赦なく経過している。だが、家を継がせ、次代に残す、という継承の輪はなくなってしまった。

たしかに、家族はそのままに同じ場所で生活している。五代目である若主人は亡くなったが、祖父母と妻、そして子ども、という三世代の家族はひき続いてこの街に生きている。夫を失った妻は、店と家とを切り盛りして、商売を続けている。家族という濃密な人間関係は変わらずに続けられているが、女主人が描いてきた家という世界は希薄になってしまった。「家を守る女」の語る世界は、消えてしまった。

もちろん、不幸な出来事を契機に、新しい物語を描き直すことはできたであろう。いや、主人公は生き続けているのだから、日々新たに「家」は語り直されているはずである。毎日、新しい仏さんに、また古くからの仏さんに、お水があげられ、たくさんある神さんはまつられ、季節の変わり目には掛け物が新しくかけ直されて、家族の語り合いは続けられているだろう。だが、齢いった女主人がわたしに語ってくれた「家の物語」は、たとえ同じしきたりや慣習が話題にされても、全体として物語は同じ意味を持ち続けているだろうか。

未亡人となって新たに店を切り回す若い「女主人」に、この家をあらためて語ってもらうことはできる。だが、わたしが聞きとり続けてきた「家の物語」は、終わってしまった。「家を守る」という継承の物語は、解釈しなおされ再構成されていく物語ではなくなっ

てしまったのである。老女主人の語りは継承されるべき未来のない単なる昔語りとなって、新しい地平でのみ語り直される世界の中で新たに意味づけされる物語の一部となっていくであろう。

時代が変わり、女のあり方が変わり、新しい嫁の時代には、老女主人の描く古い世界は無縁のものになってしまった、という解説もできるだろう。この解説は、社会の変化という「近代化の理論」を満足させるかもしれない。つまり、姑と嫁の世代的な断絶、古い家族関係と新しい家族関係のあり方の違い、日本社会全体の変化、という社会学が描いてきた大きな物語の中の一つの絵としては、十分に納得のできるものではある。だが、この大きな物語は、彼女の語った「日常倫理」の物語を、「古い価値観」という以上の仕方で理論化できるだろうか。

ここに取り上げた家族は、古い商店街で何代も続く自営業の人たちの世界であって、郊外に住むサラリーマンたちの新しい家族ならもっと違う様相を見せている、という説明もできる。社会全体が「近代化」している中で、取り残されたように古い世界が残存し、その世界に生きる年老いた人たちの家の描き方である、という比較の拠点にもできる。この「理論化」は、社会学が提示し続けてきた「大きな物語」の枠組の中での「差異」の表現である。だが、比較の基準となる「近代化」という枠組は、この「古い街」の人々が語っ

た「家」の物語が一つの「生きている道徳史」とするなら、社会学の「大きな物語」も同様に、やはり「近代の道徳史」ではないのだろうか。

核家族が優勢となっていくという「核家族化」が一つの神話として強い力を持つ現代の日本社会では、古い家は古い街に生き残り、女たちは家という桎梏の中で抑圧された生活を送っている、という描き方も可能である。その桎梏の世界を、男の支配する世界の裏側としても描けるだろうし、あるいは、普通は隠されている女たちの世界として描こうとしているのだ、という語り方もできる。たとえば、アン・コーネリセンの『影の女たち』は、女たちが生きる世界を女の目を通して直接に描こうとする。隠されてきた「女の世界」もやはり、同じ近代を作ってきたのである。［Cornelisen］

他方、サラリーマンの中流生活を「主婦」として送る女たちは、この街の女たちに比べれば桎梏の圧力は小さいものであるとしても、やはり見えない世界に彼女たちの本当の生活があるとも言える。この街の女たちが語った世界を、女性に共通の抑圧された世界をのぞき見る糸口とすることもできるだろう。

ここで問題にしようとするのは、古い家と新しい家との比較や、男の支配する「表」の世界からは隠された女たちの「内」の世界がある、という点ではない。序章にも書いたように、男と女、作る者

と守る者、という典型による比較ではなく、一つ一つの物語が描く差異が、一つの全体をいかに作ろうとするか、なのである。この意味では、社会学も、あらかじめ想定された何らかの全体を描くための一つの物語だと言えるだろう。じつは、その全体も「有限の世界」でこそ可能な一つの世界記述なのである。この本で語られたいくつかの「世界」においても、細部の差異は、それぞれの物語に込められて、異なる全体のイメージを描きながら、一つの大きな物語を語っていることになる。細部の差異は、すでに細部に込められた全体を通して、物語の全体を構成する。

差異というなら、この街に生まれ、住み、一生を終える人もいるし、この街に店を持ちながらも郊外に家をかまえて通勤する人もいる。「家を守る女」の次男は同じ敷地の中に店を持っていても郊外から通っているし、妻に店を手伝わせることはしない。「家を作る女」の三男は、長男といっしょに商売をしながらも、郊外に家を持って通っている。魚屋として大きな商売をする「家の創出」の主人は、戦後にこの街にやってきた新入りということもあるのだろうが、この街に欠かせない中心人物となっても、家は郊外に持って、妻は家にいる。

息子たちが店を切り回し始め、それぞれが独立し、自分の家を新たに構え、あるいは親の家の近くに自宅を持ち、あるいは親の世代

と同じように店の一つを住居にしたり、というように、一見すると近代的な小家族の形態をとってくるようにも見える。だが全体を見ると、生活のネットワークは相変わらず一つのゆるやかな大きい家を保持しているようでもある。ゆるやかなネットワークをつないでいるのは、全体に対するイメージである。

「家を作る女」の家は、戦前にこの街に入ってきた「新所帯」である。彼らの家の伝統は、彼ら自身が作ってきた。せいぜい二代にわたるだけの新しい家である。にもかかわらず、彼らが作ってきた家の原型は、もう一つ前の世代の家にある。本家に続くものとして、自分たちの家をいかに作ってきたかを語る。この原型にのっとって、新しく独力で作った家であるにもかかわらず、子の世代には継承を求める。長男が跡取りであるだけでなく、長男の嫁も女主人としての跡取りでなければならない。二代目は、継承をこの街全体の物語にまでしようとする。地域的だけでなく、世代を越えたネットワークが、継承という「物語」の中で保持されようとしているのである。直接には見えないけれども、いわば想像の世界で家は結ばれ、人々はつながっている。個では直接には知りえない全体に、つながっていようとする。

想像によってつながっている家の継承という軸を中心に、また自分たちの家の現在の繁栄を永続させるために、家は続けられなけれ

ばならない、という継承の物語が語られているのである。この街が持っている長い歴史は、自分たちの作った家の歴史の永続性に読み替えられて、過去から現在へ、そして未来へという発展の物語として語り直される。街の歴史は、家の歴史であり、自分自身の歴史なのである。

2）語られる全体

語られる世界で生きている家と人々とのつながりは、どのようにして描けばいいのだろう。彼らの語った物語を、再解釈してつないでいくしかない。彼らの語る一つ一つの小さな物語としての「事実」を、より大きな世界を語る物語へと再構成していくしかない。だが、より大きな世界の物語は漠然として、直接には把握できない。具体的には、街であり家であるのだが、語る人によってあり様は微妙に異なり、語る人にも、もちろん聞く者にとっても、かならずしも明確な全体としては現われてこない。人々がいて、家族があり、家があって、さらにそれらをとりまく街があるようには見えているが、その街が全体であって家がその中の部分というわけでもない。ある人にとっては毎日の商売をしている街が全体であるだろうし、また他の人にとっては自分の先祖につながる家と、さらには長い歴史のうえに成り立っている街全体が、彼らをとりまく「全体」であるだ

ろう。人々は、時間的空間的に同一の全体を共有して生活しているようでいて、それぞれが抱いている全体のイメージはじつは細かな点で異なっている。

個々の人々が抱く全体のイメージは微妙に違い、差異ある全体が想定されていて、その中で差異ある個別の「出来事」が起こるのであるが、一方で、より大きな全体はなんらかの「大きな物語」として「同じ」なのである。同じ時代を生き、同じ街で同じように食料品を商い、地域の同じ小学校に通い、同じ祭りをおまつりし、何よりもっとも「大きな物語」として、二十世紀の日本を生きている。だが、もっとも「大きな物語」だけが明らかな全体だと言い切れるだろうか。

個々の人々の半生を語ってもらうというライフ・ヒストリーの方法は、物語の再構成の一つのやり方である。一人の人間が見た「全体」を語り直してもらうというのは、微妙に異なる個々の「全体」を通して、「大きな全体」を語ってもらうことになる。差異と同一、あるいは部分と全体、という、一見するとつながっているように思えるがじつは異なる次元の総合という問題を含む、古いけれども非常にむつかしいテーマを描いていることになる。全体はミメティックなのだが、じつはリクールが楽観的に論じたようにはミメーシスは連続しておらず、したがってミメーシスの積み重ねはかならずし

も全体を構成するにはいたらないのである。連続しないミメーシスがミメティックな全体に包まれているが、個々のミメーシスはそれぞれに独自の性質を主張して一つの「全体」を構成し、しかもミメティックな全体はやはり全体として受け入れられている、という問題なのである。[1)]

ライフ・ヒストリーは、人間の一生の物語として非常に自然な形に見えるので、説得力のある物語の手法となる。一生は誕生から死まで、自明の全体を示しているように見える。生の始まりと終わりは、どのような生が生きられようと、人生に物語としての明確な区切りを与える。季節の移り変わり、時代の変化、家の盛衰、文明の興隆と勃興にいたるまで、その他あらゆる現象は、メタファーとしての生と死によって始まりと終わりの区切りが与えられてきた。「家を守る女」とわたしとの間にあった物語を続ける関係も、跡継ぎの死によって、区切りが告げられた。彼女は、息子の死によって、家の物語を再構成していく仕事を、あたかも彼女の「家」が死を迎えたかのように、中止してしまった。「家を守る女」としての死が、彼女の語ってきたライフ・ヒストリーに終止符を打ったのである。

ライフ・ヒストリーは、語る者にとっても、またその語りを聞く

[1)] アウエルバッハは、西欧文学におけるミメーシスを論じて、作品それぞれの独自性の発展を論じている。一方で、文学史としての全体は想定されている。ただし、ミメーシスは連続であると同時に、独自性という意味で差異を持つ。

者にとっても、説得力ある非常に安定した「始まりと終わり」を一つの全体として提示する。さらに、ライフ・ヒストリーの中の個々のエピソードは、常に自明である全体の部分となり、同時に一つ一つの全体をも構成する。人生の成功にいたる一つ一つのステップであり、ステップごとに成功は内包されていて、常に発展への一本の道をたどっていく。あるいは、人生の浮き沈みはやはり一つ一つのエピソードに込められていて、循環する大きな物語となる。

ライフ・ヒストリーは、自然に見えて強い説得力を持つほど、つまり、波乱万丈の半生をへて、大きな成功をつかむという感動的な一代記であればあるほど、成功や栄枯盛衰の物語はより印象的に語られる。だが、思い出して欲しい。ライフ・ヒストリーは、現在という結果において語られる「過去」なのである。成功にしろ、盛衰にしろ、獲得した「現在」において、半生の歴史が語り直されているのである。到達点としての現在が語るイメージとしての過去なのである。

近代化論にもとくによく現われているように、近代の社会は歴史を一元的な発展として捉えてきた。近代の成功の物語は、この近代がさらに未来に続くことを願って、地球全体の発展の物語を描こうとする。あるいは、循環論も、発展が一元的ではないということを言いながらも、より大きな発展が、盛衰という局面を持ちながら、

継続していくことを論じる。たとえば、トインビーは文明の興亡を通して、世界文明の螺旋的発展論をとっている。

多くのライフ・ヒストリーは、人生を完結した発展の物語として描こうとする。個人の人生も社会の「人生」も、近代社会ではミメティックな発展という全体を共有しているようだし、また共有することで個々の人生はより自然に見えもする。この本に登場した三つの家族におけるライフ・ヒストリーも、街の発展と継続、家の継承、そしてその家を伝えていく人々、という出来事を一つの世界として語っている。だが、この継承の中で、「家を守る女」の物語は、跡継ぎの死という「終わり」によって、中断されてしまった。

社会の物語、あるいは街の物語、という大きな全体は、「家を守る女」の物語が中断されたあとも、相変わらず存在し続け、語り直されているだろう。彼女も、生あるかぎり、彼女の家を語り続けるだろう。だが、「家を守る女」の物語は、わたしに語られたようには続かない。リクールなら、ミメーシス１からミメーシス２へ、という継続はあるということになるだろう。だが、「死」が「家を守る女」の物語に終わりを告げた以上、ミメーシス２はたとえミメーシス１に対してミメティックであっても、連続するのではなく断絶を経て新たに語り直される物語となるであろう。ミメーシスは次々と連続していくのだという語り方は、じつは彼女の「家を守る女」

の物語が成り立っていた「全体」とは異なる次元で想定される「全体」によって、「時間は連続する」という物語が語られているのである。すなわち、社会全体が進行する「発展の物語」として「現にある」という全体への確信によって語り直されることにより、ミメーシスは連続していくという、つまり社会全体は一つの時間軸の上で継続していくという物語に仕立て直されているのである。このような全体への確信は、個々に語られる物語は違っていても、それらをとりまく大きな物語としての時空が、個別的な「全体」が持っている差異をこえて、ミメティックであるという全体イメージを人々が共有しているのだという思い込みに由来する。個々の人々が語る物語としての「全体」は、かならずしも大きな全体と直結しているわけではない。もちろん、人々の物語は、大きな全体の物語の部分でもない。

イメージとして漠然と共有されるメミティックな全体の中で、微妙に異なる個々のエピソードが伝える「事実」を描こうとする手法には、細かな差異の「濃密な描写thick description」が適切である。［Geertz 1973］家について、街について、人々が異なるイメージをそれぞれに抱き、しかもそれらの全体が一つの全体イメージを構成するように重なり合っている。さらに、一人々々が物語を再構成してそれぞれの全体を語っているので、この本で提示したライフ・

ヒストリーがたとえわたしの再解釈を通して得られた全体であっても、人々の「視点」はそれぞれの全体を表現するものとして確保されているであろう。「原住民の視点native's point of view」は、わたしの語りの中で、まったく別個の語りの地平に移されることなく、保持されているはずである。［Geertz 1983a］

この本に登場した三つの家は、それぞれが特異な全体を示している。それぞれの家を語るのに、人々は同じ街に住んで同じように商売をしていると思って生活しているが、自分たちの家を語ると独自の世界を作り出すし、またわたしも特異であるように描いている。

この歴史ある商店街は、まわりの町からするとすでに特異なのである。この一本の狭い通りにだけ、食料品を扱う店が並んでいる。一つ隣の大通りは、銀行や証券会社が並び、またその近代的な建物の間にさまざまの小売りの店がある。これらの小さな店も一つの商店街を形作り、異なる世界を持っている。たとえば、私鉄が地下に延長線を建設した時の反応は、明らかに違うものであった。少し西の方へ行けば、古くからの着物の問屋街がある。それこそ、京都の祇園祭を支えてきたいわゆる大店であったし、現在でも繊維関係の商業の中心地である。さらに南へ行けば、間口の狭い京都独特の町屋に、仏壇や着物の加工をするさまざまの下職の職人がそれぞれの家業を営んでいる。

この広がりの中で、町の一角が切りとられたようにして、生鮮食品を商う街が存在するのである。この街のこの特異性が、都市全体の中で一体性を作り出し、緊密な人間関係から成り立つ共同体の雰囲気を醸し出しているのである。だが、すでに描いたように、個々の家は明らかに異なるように語られる。

この街へ一歩入れば、個々の店は、また個々の家は、独自の世界を持つ。細い通りに面して同じように生鮮食品を扱いながら、店先では互いに声を掛け合い、冗談を言いあいながら、食料品を商う街を作る。さらに、店の奥に入ると、互いのプライヴァシーを犯しあわないようにして、それぞれの家が生活を守っている。「家を守る女」が語ったように、意外にも、近隣の人々との個人的な付き合いは重視されていない。小売りが盛んになって、店の表では軽口を叩きあうような親密さを見せても、家の奥までは人々のつながりは入ってはこない。京都の「鰻の寝床」と呼ばれる細長い奥行きのある家の奥座敷へ外の喧噪が聞こえてこないように、隣近所との個人的交流は及ばないようである。壁を接して暮らしていても、壁を越えての交流は関心ある物語としてはあまり語られることがなかったのである。

緊密な共同体であれば、私生活に踏み込んでの親しい人間関係があると予想されるはずだが、彼らの「内の世界」は閉ざされていた。

開かれているように見える表の付き合いと、家の中の内の付き合いとは、異なる次元の世界に属するのであろう。家の主人たちは、同業者の組合の集まりや、商店街の会合で、頻繁に会っている。公式の会合のための準備や意見の調整のために、いっしょに酒を飲んだりということもある。けれども、それらの集まりはあくまで、男たちの「表の付き合い」である。家の中にまでは入り込まない。このプライヴァシーを守るというモラルが共有されて、家と家との間には一線が画され、それぞれの内の世界が保たれようとする。

互いの家のプライヴァシーが保持されていて、内の世界が完全に隠されている、ということでもない。語られることはなかったが、互いの家の中の「実情」は知られているようである。知っていても知っていない、というモラルが働いて、狭い世界の中の「秩序」は保たれている。とくにわたしのような外部の者には、他人の「内」は語られなかったのかもしれない。他人の「内」について語らないことは、また自分たちの「内」についても語られないことの保証になっているのであろう。それゆえ、「内」の独自性はより強く守られ、自分たちの世界として語られることになるのであろう。

「内」が閉じられた世界としてのみ語られるということは、共同体としての街の中で、それぞれの家が特異であって、差異を持つということが生き方の現れであるという主張なのであろう。一つの家

を伝えるということに大きな意味づけを見出すことになるのであろう。独自性を保持することが、この狭い世界で共に生きていくことの自己表現なのかもしれない。

自分の住む「この家を守る」というイメージを再生させ、親から子へと継承させていけば、細々としたしきたりや慣習を一つ一つ口やかましく子や孫に守らせないでも、家のイメージとしての「家風」は次の世代へ伝わるのであろう。伝え忘れた習慣や、面倒だからと止めてしまった慣習も、「家風」さえ伝わっておれば、いつかある時に復活されるかもしれない。もちろん、それは過去がそのままに復元されるのではなく、復元される時に意味あるものとして、再発見されるだろう。「家を守る女」の姑が、「わたしのいる間に神さんを整理してあげんと」と言っても、孫娘が女主人の後ろについて歩いて、神まつりの仕方を覚えようとする。「だんだんとずぼらになって」と言いながら、「一階の奥座敷にまつってある神さんだけお世話させて貰うてます」と細々とでも神まつりを続けていれば、絶えることのない「家の習慣」となるとも確信できるのであろう。「家」の中で折りに触れて繰り返され、体にしみこんだしつけとなって、「心の習慣」となって、考え方、感じ方が、作り直され伝えられていく。[1] 家に少しずつの差異ある慣習があり、そしてその差異

[1] Bellah et al が指摘する、アメリカの個人主義の「心の習慣」に通じる、「家の慣習」の継承ということになるのであろう。

を大きなこととして日々確認し続けていくことで、家という全体が一つの像を結び、人々はその像を中心に関係を保ち合い、さらに、街に対するそれぞれのイメージを形成して、全体の中の自己を確認していくのであろう。

3）物語の終わり

この本に登場した人々は、現在の日本で常識的に家族関係とみなされている人間関係に比べれば、かなり片寄った家族関係の持ち方、家の形成の仕方、あるいは近隣の共同体との関係の持ち方をしているかもしれない。90%が中流といわれる日本人の生活意識からすれば、都市の中心部に三世代家族が一つの家を作って生活しているということだけでも、それだけでかなり特異に見えるだろう。といって、彼らが「中流」でない、とか、典型的な日本人の家族を形成していない、とも言えない。

たしかに、郊外に一戸建ての家を持ち、子どもが二人いて、夫は都市の中心部へ通勤するという「中流」の生活は、ある種の理想ではありえても、現実にそのまま存在するわけではない。芝生のある庭に犬が飼ってあり、休日には車で家族が遊びに出かける、などというテレビのホームドラマのような生活が、現実に行われているとは誰も思わないだろう。だがこの家族イメージが浸透して、その

「理想の片鱗」の一部でもが生活に実現されることで、「中流」であると思わされているのかもしれない。都心から遠く離れた郊外に小さな家がある、とか、交通渋滞で使いものにならないけれども車を持っている、とか、「典型的中流家庭」の一部が実現されて、90%の中流意識が満足されているのであろう。全体イメージは中流であっても、部分では差異のある「中流家庭」なのである。にもかかわらず、中流家庭という「大きな物語」は機会あるごとに語り直され、強化されている。

家を継ぐという「圧力」から比較的自由な次男たちは、郊外に家を求めて、この街の店に通っている。日曜や祝日に休むことはできなくても、一週間に一度の休日をとることは常識となっている。家族旅行に行くこともあるし、町内の老人会で友人と旅行にも出かける。このようにみると、この街の人々も「中流の家庭」を持っている。けれどもわたしが描いたイメージは、いわゆる中流家庭とはかなり違う。この違いは、わたしの物語の描き方の問題なのだろうか。

繰り返しになるけれども、わたしが採用したこの街の人々の描き方は、彼らとの関わりの中で生まれてきた。インタヴューの中で伝わってきた彼らの生き方についての独特の物語が、この街に生きる人々だけでなく、この街そのもののあり方を表しているのである。インタヴューでこの街に足を踏み入れる度に、生鮮食品を売る市場

に独特の、活気ある空気が突如襲ってくる。この活気ある空気が作り出す物音は、通りをへだてた繁華街からは雑踏の中に飲み込まれてかすかにしか聞こえてこなくても、この街が特別の場所であることを誇示するかのように漏れて出てくる。

家の中に入れてもらえば、表の商売の騒がしさが嘘のように、静かな「内」の世界がある。この世界で語られる物語の持つ雰囲気は、語られている空間の雰囲気とともに、わたしの解釈に影響を与えずにはいない。もちろんわたしがこの世界に入り込んで始めたインタヴューであり、わたしの介在なしには語られなかったライフ・ヒストリーであるから、彼ら自身にとってもわたしがあって語り始めた物語ではある。言い古された言い方であるが、語り手と語られる者の間には相互作用があって、この相互作用が一つの物語を作り上げている。さらに、この物語が成り立つための空間もが、相互作用によって限定され、また空間によっても相互作用のあり方が決定されている。

この本で描いた「家」の物語は、インタヴューをする者とインタヴューをされる者の間に作り上げられた世界が、「差異」あるものであることを始まりとしている。この差異の認識によって、閉じることのないはずの解釈の循環には、始まりがあり、終わりがある。「家を守る女」の長男の死によって彼女の語る物語が「継承」とい

う発展の方向性を失って止まった時にわたしの聞き取りに終わりが来たと感じたように、わたしとインタヴューに応じてくれた人たちとの物語の世界も、いつかは閉じられた世界を作ることになっていたのである。長男の死後、新しい物語を語り直すことも可能であったろうが、彼女とわたしとの間にはもはや新たな物語を出発させる接点を見出すことはできなかった。解釈的循環の輪は、交差する点を持ちえなくなってしまったのである。同時に、他の人々との関係も、「死」を迎えたのである。

かつて共有していた世界がなくなれば、彼らのライフ・ヒストリーをどのように処理するかはわたしの世界の問題である。ライフ・ステージで区切って、外の世界の社会変化と結び付けるのもよい。あるいは、三世代家族が時代の流れと共に核家族志向を強めていくプロセスとして議論することもできる。社会学の枠組を組み合わせて、彼らが語ってくれた物語を「社会学的」に再構成することもできる。理論も一つの「語り」だとすると、われわれが安住する「社会学的世界の物語」を否定する根拠は何もない。

だがこのような社会学の世界で理論的とされている物語の枠組では、それぞれの物語を語ってくれた人々との細かな接点を、わたしの方から一方的に切り捨てることになってしまいはしないだろうかという危惧を抱く。といって、わたしが再構成した彼らの物語が、

彼らの意図に沿った形で語り直されているという保証はない。だが、彼らとわたしの間には共有できた閉じられた「解釈的循環」があった、という確信があり、この確信だけが彼らの物語をここで提示できるという自信の支えになっている。この確信がわたしの「語り」であり、この語りの中で、個々の家や人々についての記述が成立しているのである。ただ、わたしの語りが、たとえ偶然にでも、彼らの物語の語り方と、あの空間で、あの時に、多くの接点を持ちえたのなら、この本で描いた物語は、彼らが解釈した彼らの日常世界の「社会理論」のよき記述であった、と言えるであろう。「彼らの社会理論」を越えて別の新たな地平では彼らの世界を物語れない、ということが、この物語の終わりということになるのである。

文献

アウエルバッハ、エーリッヒ（篠田一士・川村二郎訳）1967.『ミメーシス---ヨーロッパ文学における現実描写---』上・下　筑摩書房

秋山國三　1971.「坊条制の『町』の変容過程について---平安京から京都へ---」同志社大学人文科学研究所『京都社会史研究』　法律文化社

有沢広巳・稲葉秀三編　1966.『資料・戦後二十年史2　経済』日本評論社

エーコ、ウンベルト（篠原資明、和田忠彦訳）1984.『開かれた作品』　青土社

京都府 1915.『京都府誌』下　京都府

京都市 1971.『京都の歴史』2「中世の明暗」　学芸書林

京都市社会課 1923.『市場の沿革』　京都市社会課

田村恒次郎 1980.『辛酸：戦中戦後・京の一庶民の日記』　ミネルヴァ書房

高橋三郎編著 1983.『共同研究戦友会』　田畑書店

中野卓編 1977.『口述の生活史---或る女の愛と呪いの日本近代---』　御茶の水書房

----- 編著 1981.『明治四十三年京都：ある商家の若妻の日記』

新曜社

奈良藤助 1926.『京都魚市場の沿革』 奈良藤助

橋本満 1981.「『家』女が作る世界：解釈学的社会学の試み」『甲南女子大学人間科学年報』6

----- 1993.「歴史と物語---伝統の発明」『ソシオロジ』37巻3号

バフチン、ミハイル（北岡誠司訳） 1987.『小説の時空間』ミハイル・バフチン著作集6 新時代社

藤田貞一郎 1971.「近世京都市中の魚市場」同志社大学人文科学研究所『京都社会史研究』 法律文化社

藤本利治 1963.『同業者町』雄渾社

森岡清美・青井和夫編 1987.『現代日本人のライフコース』日本学術振興会

Bellah, Robert N. et al. 1985. Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life. The University of California Press. ［島進・中村圭志訳『心の習慣』みすず書房、 1991］

Berger, Peter. 1967. The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge. Anchor Books. ［山口節郎訳『日常世界の構成』新曜社、1977］

Blythe, Ronald. 1973. Akenfield: Portrait of an English Village. Pantheon Books.

Carr, David. 1986. Time, Narrative, and History. Indiana University Press.

Carrard, Philippe. 1992. Poetics of the New History. The Johns Hopkins University Press.

Cornelisen, Ann. 1977. Women of the Shadows: The Wives and Mothers of Southern Italy. Random House.

Crapanzano, Vincent. 1980. Tuhami: Portrait of a Moroccan. The University of Chicago Press.

Geertz, Clifford. 1973. "Thick Description: Toward an Interpretive Theory of Culture" in his The Interpretation of Cultures. Basic Books. [吉田・柳川・中牧・板橋訳 1987.『文化の解釈学』I,II. 岩波書店]

-----. 1983a. "From the Native's Point of View": On the Nature of Anthropological Understanding. in his Local Knowledge. Basic Books. [梶原・小泉他訳 1991.『ローカル・ノレッジ』岩波書店]

-----. 1983b. "Found in Translation: On the Social History of the Moral Imagination", in his Loal Knowledge. Basic Books.

Hashimoto, Mitsuru. 1987. "Ie, the world women make---for the interpretive sociology" Journal of Family History 11:4.

Parsons, Talcot and Robert F. Bales. 1955. Family: Socialization and

Interaction Process. The Free Press. ［橋爪貞男他訳　1971.『核家族と子どもの社会化』上・下　黎明書房］

Ricouer, Paul. (Tr. Kathleen McLaughlin and David Pellauer) 1983, 1984, 1985. Time and Narrative. Vols. 1,2,3. ［久米博訳　1987, 1988, 1990.『時間と物語』I,II,III. 新曜社］

Schutz, Alfred and Thomas Luckmann (Richard M. Zaner and H. Tristram Engelhardt, Jr. trs.) 1973. The Structure of the Life-World. Northwestern University Press.

Watson, Lawrence C. and Maria-Barbara Watson-Franke. 1985. Interpreting Life Histories: An Anthropological Inquiry. Rutgers University Press.